新　村　4　遺　跡

―上ノ国町豊留地区道営農地開発事業用地内
遺跡発掘調査報告書―

1987.3
北海道上ノ国町教育委員会

新村4遺跡空中写真

序

本書は町内豊田、新村、大留地区における道営農地開発事業に伴う新村4遺跡の発掘調査報告書であります。

農地開発事業が計画されるとともに北海道教育委員会による遺跡所在と範囲を確認する調査が行われ、新たにいくつかの遺跡が登録されました。

本遺跡もその一つで幾度かの協議を重ね北海道教育委員会文化課の格別のご配慮によって調査体制がつくられ、発掘調査を実施する運びとなりました。

調査の結果、従来から縄文時代晩期に〝上ノ国式〟の名をもって道南の標識とされていた土器群の内容を明らかにする上で貴重な資料や、当町では調査例の少ない縄文時代後期の良好な資料などが得られました。

この間、工事を担当された檜山支庁耕地課・耕地管理課をはじめとする関係機関、各位から多大の御理解とご協力を得ました事を心から御礼申し上げます。又調査に種々ご指導を賜りました北海道教育委員会文化課をはじめとする関係機関、各位にも重ねて御礼申し上げます。

本書が今後の遺跡の保護と歴史の研究にいささかでも役立ちますと幸いであります。

昭和62年3月

上ノ国町教育委員会教育長　布 施 潤一郎

本 文 目 次

Ⅰ．緒　言……1
　a．調査要項
　b．調査体制
　c．作業分担
　d．謝　　辞

Ⅱ．遺跡の位置及び周辺の遺跡……4
　a．位　　置
　b．遺跡名称と、その由来
　c．周辺の遺跡

Ⅲ．調査状況……6
　a．発掘調査の経過
　b．発掘調査の方法

Ⅳ．遺跡の層序……8
　a．基本層序
　b．セクションの実測
　c．層位と出土遺物

Ⅴ．遺　構……22
　a．検出遺構の分布と若干の問題
　b．遺構検出状況

Ⅵ．遺　物……29
　a．遺物の概要
　b．土　器
　c．土製品
　d．石器・石核・剥片等
　e．その他の出土遺物

Ⅶ．総　括……67
　a．検出遺構の概要
　b．出土遺物の概要
　　(1)　土器について
　　(2)　スタンプ状土製品について
　　(3)　石器について
　c．遺跡の性格等について

写真図版目次

PL.Ⅰ　新村4遺跡空中写真
PL.Ⅱ　〃　と調査状況
PL.Ⅲ　遺物出土状況
PL.Ⅳ　Tピット検出状況
PL.Ⅴ　〃
PL.Ⅵ　縄文時代後期の土器
PL.Ⅶ　〃
PL.Ⅷ　〃
PL.Ⅸ　〃
PL.Ⅹ　縄文時代晩期の土器
PL.Ⅺ　〃
PL.Ⅻ　〃
PL.XIII　〃　とスタンプ状土製品
PL.XIV　接合資料
PL.XV　剥片・剥片石器
PL.XVI　剥片石器
PL.XVII　〃　・石核
PL.XVIII　礫石器
PL.XIX　〃
PL.XX　〃

挿 図 目 次

Fig. 1　新村４遺跡の位置……２
Fig. 2　新村４遺跡の発掘区と周辺の地形……３
Fig. 3　土層断面図の位置と
　　テストピットの柱状図……10
Fig. 4　新村４遺跡東西セクション……11
Fig. 5　〃　東西・南北セクション……13
Fig. 6　〃　南北セクション……15
Fig. 7　〃　南北セクション……17
Fig. 8　〃　南北セクション……19
Fig. 9　発掘区と検出遺構の分布……21
Fig.10　新村４遺跡Pit1検出状況……22
Fig.11　〃　Pit2検出状況……23
Fig.12　〃　Pit3検出状況……24
Fig.13　〃　Pit4検出状況……25
Fig.14　〃　Pit5検出状況……25
Fig.15　〃　Pit6･7検出状況……26
Fig.16　〃　Pit8検出状況……27
Fig.17　〃　Pit9検出状況……28
Fig.18　縄文時代後期の土器……30
Fig.19　〃　……31
Fig.20　〃　……32
Fig.21　〃　……33
Fig.22　〃　……34
Fig.23　〃　……35
Fig.24　〃　……36
Fig.25　〃　……37
Fig.26　縄文時代晩期の土器……38
Fig.27　〃　……39
Fig.28　〃　……40
Fig.29　〃　……41
Fig.30　〃　……42
Fig.31　〃　……43
Fig.32　〃　……44
Fig.33　新村４遺跡出土のスタンプ状土製品…46
Fig.34　石器総数，剥片等の重量分布……47
Fig.35　剥片石器の分布……48
Fig.36　礫石器，接合資料の分布……49
Fig.37　接合資料(１)……50
Fig.38　〃　(２)……51
Fig.39　剥　片……53
Fig.40　剥片石器(１)……54
Fig.41　〃　(２)……55
Fig.42　〃　(３)……56
Fig.43　〃　(４)……58
Fig.44　〃　(５)……59
Fig.45　石　核……60
Fig.46　礫石器(１)……61
Fig.47　〃　(２)……62
Fig.48　〃　(３)……63
Fig.49　主要土器とスタンプ状土製品の分布…68
Fig.50　主要剥片石器の分布……69
Fig.51　主要礫石器の分布……70

Ⅰ 緒　　言

a．調査要項

本書は「上ノ国町豊留地区道営農地開発事業」の用地内に所在する新村４遺跡の発掘調査報告書である。

調査は、檜山支庁が上ノ国町に委託し実施された。

遺跡の所在地は、「上ノ国町字豊田69－１（井越岩美所有）、70（高見哲夫　同）、71－１（岩坂良栄　同）にまたがっている。

発掘調査面積は、2,106.0㎡。発掘調査は、1986年７月１日～同年９月２日（グリッド設定・地形測量等を含む）に整理作業は、同年10月５日～翌年３月25日に亘って実施した。

b．調査体制

本調査の主体者は、上ノ国町教育委員会（教育長　布施潤一郎）であり、調査並びにそれに伴う事務的業務の推進にあたっては、以下の体制で臨んだ。

上ノ国町教育委員会　文化課　課長　関　登志夫
〃　〃　学芸員　松崎　水穂
〃　〃　〃　斉藤　邦典
調査担当者　宮　宏明（札幌学院大学人文学部研究生・日本考古学協会員）
調　査　員　鈴木正語，小田川哲彦，松本尚久
調査補助員　浅野賢卓（南山大学々生）
事　務　長　久末久義

発掘調査及び整理作業においては、上ノ国町在住の方々の御助力を得た。以下に作業員の方々の氏名を記して感謝申し上げる次第です。

川口泰子，若狭孝子，七尾美也、沢村豊子，
三浦ひとみ，薄田百合子，永田トモエ，
工藤恵美子，鷲田フミ子，住吉春美，斉藤綾子，
下倉美代子，土谷早苗，室谷佐代子，竹内江美子，
伊勢寿子，松本津枝子，宮上幸子，土本マリ子，
草間美波子，木村貴子，辻都茂子，笠谷奈智子，
長谷川フミ子，鈴木辻子（以上25名）

c．作業分担

本書の、編集は宮　宏明、執筆は以下の者が分担した。尚、文末には文責者を記した。

鈴木正語（Ⅵd・Ⅵe・Ⅶb(3)）
松本尚久（Ⅱ・Ⅲ）
宮　宏明（Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵa～Ⅵc・Ⅶa～Ⅶc）

主な作業の分担は、以下のとおりである。

遺跡の写真撮影　小田川，松本，宮
室内での遺物の写真撮影　鈴木
石器・石核等の実測　鈴木，小田川，草間，斉藤
〃　のトレース　草間，斉藤
土器・土製品等の実測　松本，斉藤，草間，伊勢，長谷川，下倉
〃　のトレース　草間，斉藤
土器拓影　土本
拓影土器断面の実測とトレース　土本，斉藤、宮
土器復原　工藤，永田，宮
遺物の集計　辻，下倉，松本
石器・石核・剥片等の計測・計量　松本，長谷川

d．謝　辞

発掘調査の推進と本書の作成にあたっては、以下の機関と各位より多大の御指導・御助力を賜りました。記して感謝申し上げる次第です。(順不同)

北海道教育庁文化課，北海道埋蔵文化財センター，青森県教育庁文化課，檜山支庁耕地管理課・耕地課，上ノ国町役場耕地課，上ノ国町土地改良センター

竹田輝雄，伊藤庄吉，森田知忠，木村尚俊，
越田賢一郎，大沼忠春，鬼柳　彰，千葉英一，
熊谷仁志，葛西智義，森　秀之，福田友之，
鶴丸俊明，藤村久和，大場利夫，岡田淳子，
菊池徹夫，工藤雅樹，千代　肇，大谷敏三，
田村俊之，高橋正勝，久保　泰，高橋豊彦，
藤田　登，中村子之吉，巻口宏行，中西政道，
菅原鈴雄，小西信夫，佐藤健一，新屋良秋，
矢代直蔵，山崎淳一，金子　広，片石　明，
井越岩美，高見哲夫

（宮）

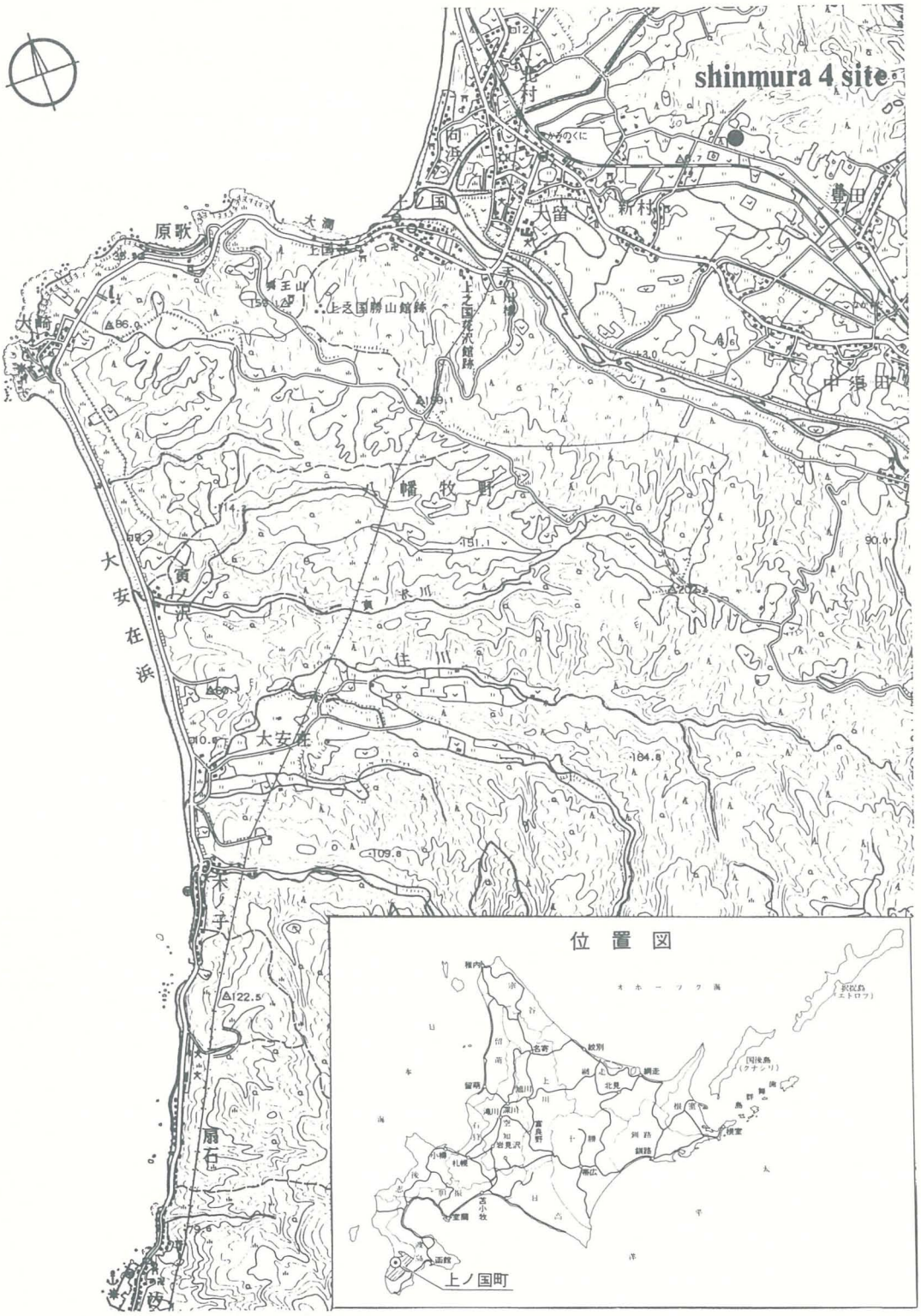


Fig. 1　新村４遺跡の位置（国土地理院　5万分の1）

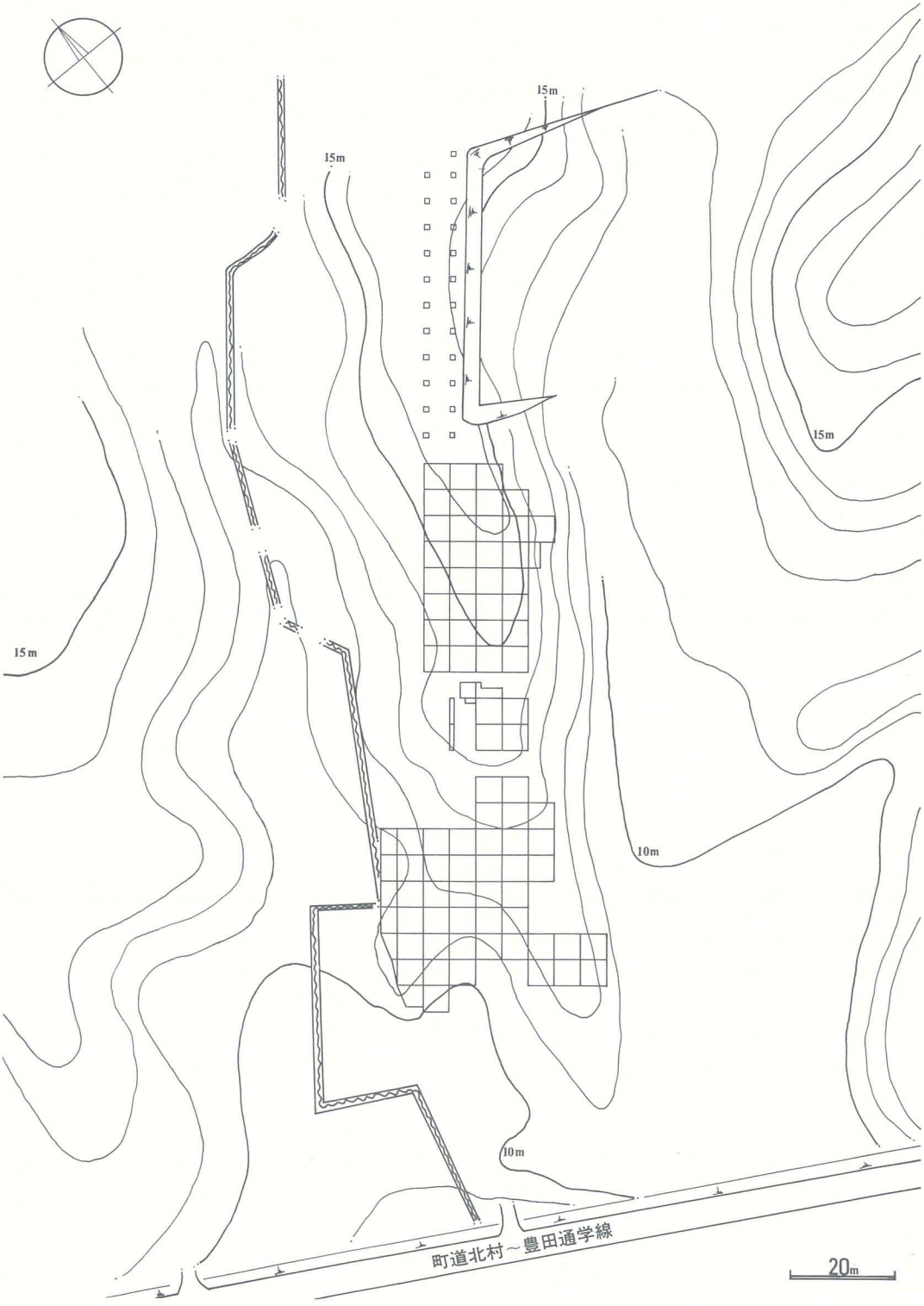


Fig. 2　新村4遺跡の発掘区と周辺の地形

II　遺跡の位置及び周辺の遺跡

a．位　置

上ノ国町は渡島半島の西南部に位置する。西は日本海に奥尻島・渡島大島を望み、北は江差町、南は松前町に接する。また，東は袴腰岳(699ｍ)，七ツ岳(957ｍ)，大千軒岳(1,072ｍ)ら渡島山地の高峰が連なり、これら峰々を境に津軽海峡側の木古内町，知内町に接する。本町の所在する渡島半島の日本海側は半島の骨格をなす渡島山地が海岸近くまでせり出している。このため、平野部は狭小で諸集落は海岸線と、本町を南東から北西に貫流する天の川流域の平野部に点在している。

天の川は標高260ｍの稲穂峠に源を発する全長約40㎞の本町最大の河川で、下流域の右岸には幅２㎞程の沖積平野が形成されている。本遺跡はこの平野部の北側に続く丘陵地上にあり、河口より約2.5㎞東に位置している。遺跡をのせる丘陵地は標高14ｍで両側が沢状の地形を呈する台地となっている。(Fig.１，2)

b．遺跡名称とその由来

遺跡名となった新村は天の川流域に広がる典型的な水田集落のひとつであるが、その地名は同地の開拓者新村久兵衛に由来する。久兵衛は江差の豪商で、明治11年に当時の米価の上昇に注目した商人，旧藩士らに呼びかけ「共同社」を結成し、下中須田他 180町（現在の新村周辺）の造田に着手した。「共同社」は明治12年～18年の７年間に約10,000円という巨資を投じて12町の水田を開いたが、明治19年に凶作他によって解散のやむなきに至った（註１）。しかし、久兵衛は本道稲作の先駆者として当時注目をあびる事になった。現在の「新村」はこれにちなんで昭和10年に命名されたものである。

ただし、本遺跡は新村の水田地域との境にあり、元来は大谷地と呼ばれる原生林であった。調査時には南東側斜面が植林地、中央部が畑地として利用される他は熊笹の生茂る原野となっていた。

c．周辺の遺跡

新村から天の川中流の宮越にかけての丘陵裾野には縄文時代中期から晩期の遺跡が多数分布している。本遺跡の周辺では瓦場遺跡，新村遺跡，豊田Ｂ～Ｅ遺跡等が知られていたが、近年の農地整備事業に伴って、本遺跡とともに新村２・３遺跡，豊田西遺跡、豊田西２遺跡が新たに確認された。このうち、本遺跡から約500ｍ東に位置する豊田西遺跡は昭和60年に緊急調査が行なわれ、縄文時代後期前葉の大湯式土器，後期後葉の堂林式土器，スクレーパー３点，敲石１点等が出土し、Ｔピット１基が検出された（註２）。

本町における遺跡はこの丘陵裾野の他、天の川下流の左岸から夷王山(159ｍ)にかけての丘陵地と海岸段丘に分布している。

夷王山の北東部には国指定史跡の勝山館と花沢館が所在する。両館は松前藩の藩祖武田信広ゆかりの館で、勝山館から夷王山に至る中腹には武田・蠣崎氏一族の墓と推定される数百の墳墓がある(註３)。昭和27年以来調査が実施され昭和54年より史跡整備事業が進められている。なお、勝山館には縄文時代前期の円筒下層ｃ・ｄ式，中期の円筒上層Ａ・Ｂ式に相当する土器の出土している勝山館遺跡が所在する（註４）。また、花沢館から約500ｍ東の台地には昭和60年に緊急調査が行なわれた小岱遺跡，61年に緊急調査を行なった大岱沢Ａ遺跡が所在する。小岱遺跡からは縄文時代中期の住居址14軒とフラスコ状ピット等が検出され、縄文時代中期中葉の見晴町式，森越式，大木８ｂ・９式土器等を主体に縄文時代中期前葉から晩期前葉にかけての遺物が出土した（註５）。大岱沢Ａ遺跡からは骨片を伴うフラスコ状ピット等が検出され、縄文時代中期中葉を主体とする遺物が出土している（註６）。

海岸線では四十九里沢Ａ遺跡，大澗遺跡，大安在Ｂ遺跡，小砂子遺跡，竹内屋敷遺跡等の調査がなされている。四十九里沢Ａ遺跡は夷王山の北側の裾野に位置し、縄文時代の早期・晩期の遺物の出土をみている（註７）。大澗遺跡は四十九里沢Ａ遺跡の約 500ｍ西に位置し、縄文時代早期の平底土器いわゆる大澗式土器等が出土している(註8)。大安在Ｂ遺跡は大澗遺跡より約３㎞南の大安在川河口に位置する。縄文時代前期から擦文時代に至る遺物が確認されているが、なかでもここより出

土した縄文時代中期後葉の一括土器は大安在Ｂ式として標式土器になっている（註９）。小砂子遺跡は松前町に近い海岸線に位置し、ノダップⅡ式・大木式土器等を主体とする遺物と縄文時代中期の住居址10軒を検出している（註10）。竹内屋敷遺跡は天の川河口の左岸に位置し、縄文時代晩期の大洞BC式等に並行するいわゆる上ノ国式土器によって有名である（註11）。

上ノ国町は昭和30年代より発掘調査を行なってきた。現在、全町で86ヵ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており調査報告は、14遺跡を数えるが、これらの所在地は海岸線に集中している。天の川右岸の丘陵裾野では22ヵ所の包蔵地が確認されているが調査報告がなされたのは本遺跡が豊田西遺跡に次いで２遺跡目である。　（松本）

註

註１　松崎岩穂　1956　『上ノ国村史』　上ノ国村役場
　　松崎岩穂　1962　『続上ノ国村史』　上ノ国村役場

註２　鬼柳　彰ほか　1985　『上ノ国町　豊田西遺跡』　北海道埋蔵文化財センター

註３　松崎水穂編　1984　『夷王山墳墓群』　上ノ国町教育委員会

註４　渡辺兼庸ほか　1959　『北海道椴川、十兵衛沢、勝山館遺跡』『考古学雑誌』　第44巻第４号

註５　鬼柳　彰ほか　1985　『上ノ国町　小岱遺跡』　北海道埋蔵文化財センター

註６　1986年調査。1987年３月報告。

註７　其田良雄　1974『上ノ国町四十九里沢Ａ遺跡』　上ノ国町教育委員会

註８　大場利夫ほか　1955　『檜山南部の遺跡』　上ノ国村教育委員会・江差町教育委員会

註９　倉谷泰賢ほか　1972　『大安在Ｂ遺跡』　上ノ国町教育委員会

註10　加藤邦雄編　1979　『小砂子遺跡』　上ノ国町教育委員会

註11　大場利夫・松崎岩穂・渡辺兼庸　1961『上ノ国遺跡』　上ノ国村教育委員会

Ⅲ．調　査　状　況

a．発掘調査の経過

調査を開始するにあたり、笹刈り及び調査区のグリッド設定を７月３日～７日に亘って実施した。

７月８日よりＡ地点の発掘作業を開始、町道側のＢ２、Ｅ３、Ｆ３、Ｇ３、Ｈ２、Ｉ２グリッドから表土剝ぎを行ない、各グリッドより縄文時代晩期前葉の土器を採取した。なお、北西～南東ラインの３・８・10ライン、南西～北東ラインのＣ・Ｅ・Ｇラインにはトレンチを入れ、発掘作業に並行してセクションの実測を行なった。その結果、包含層の上位が耕作等によって失なわれている事が判明、プライマリーな遺物包合層は下位のⅣ層・Ⅴ層が主体をなすものとみなされた。各グリッドの掘り下げが進むにつれて主としてⅣ層から縄文時代晩期前葉の遺物、Ⅴ層からは縄文時代後期の遺物の出土をみた。また、縄文時代中期後葉～後期前葉のものと思われるＴピットを４基検出した。

７月９日には、ベンチマークを移動、10日～15日は、調査区の地形測量（縮尺1/500）を実施した。７月の中旬に入ると12・14・17・18・23日と雨天が続き作業の遅れが心配されたが、その後は晴天に恵まれ作業は順調に進行した。遺物は中央部のＢ６，Ｃ６，Ｄ４・６，Ｆ６グリッドに集中し、Ｃ３・６，Ｄ３，Ｅ５，Ｆ６グリッド等より一括土器が出土した。７月中旬には、これらグリッドの調査に力を注いだ。

７月下旬にはＢ地点の樹木の伐採を行ない、同地区の調査を開始した。Ａ地点同様にＣ・Ｆライン、14・22ラインにトレンチを入れ、セクションを実測したが、ここでも攪乱による上位層の欠落がみられた。遺物包含層はⅣ・Ⅴ層が主体をなし主に縄文時代後期の遺物が出土、Ｅ17・20，Ｆ16・19グリッド等からは同時期の一括土器が出土した。また、Ａ地点でみられた様なＴピットが４基検出された。７月末にはＡ地点のセクションベルトの除去作業を行ない、発掘の主体をＢ地点に移行した。

７月29日には工藤雅樹先生（宮城学院女子大学）・菊池徹夫先生（早稲田大学）が来訪された。８月２日より調査補助員として浅野賢卓君（南山大学）が加わる。

８月10日にはＡ地点で遺物の多い北西側の発掘区を拡張（Ａ３～７）した。翌11日にはＢ地点で遺物の集中するＤ18～21グリッドの南側にＥ18～21グリッドを設定した。さらに19日にはＡ地点の南側にＧ６・７グリッドを設定した。こうして８月中旬には当初の発掘予定面積である 1,350㎡を発掘し、８月23日現在で1,600㎡の調査を終了した。しかし、遺物が立会範囲内に広く分布している事が予想される事から今後の対応について協議する事になった。８月25日には北海道教育委員会文化課伊藤庄吉埋蔵文化財係長及び森田知忠主査が協議のためみえられ、その結果、調査面積を 2,100㎡程度とし、短期間で残り 500㎡を引き続き調査する事となった。

８月下旬からは新設グリッドの発掘に全力を注いだ。また、Ａ地点・Ｂ地点間に幅１ｍのトレンチを三ヵ所設定（Ｄ11・12，Ｅ11・12，Ｄ11・12）した。その結果、Ｅ12，Ｆ12グリッド間に遺構と思われる落ち込みを確認、精査したが、この落ち込みは風倒木によるものと判断された。なお、Ｆ12グリッドより多量の焼土が検出されたが、風倒木による攪乱が広い範囲に及んでいる事もあって周囲に遺構等は検出されなかった。８月30日にはＥ13グリッドのⅣ層よりスタンプ状土製品１点が出土した。

８月29日には浅野調査補助員が帰郷、作業も終りに近づき、杭の除去作業、用具の整理等を除々に行なう。最終日の９月２日は現場の撤収作業と並行して、遺跡の北東側（21ライン以東）の状況を把握するためテストピットをあけた。21ラインより５ｍ毎に１ｍ×１ｍのテストピットを23ヵ所（Ｃ23～33，Ｄ23～33）に設置したが、北東にいくにつれて攪乱が著しい事を確認した（Fig.３）。また、遺物の出土量は極めて少なく、土器片４点，フレーク１点であった。撤収作業も午後４時には終え、総発掘面積 2,106.5㎡を完掘し、全日程を終了した。

b．発掘調査の方法

調査区のグリッド設定は、1985年に道教委によって範囲確認調査が行なわれた際に組まれた５

m×５mのメッシュを基本としている。各グリッドは北西から南東（短軸）にアルファベット，南西から北東（長軸）に算用数字を配して「Ａ１，Ａ２…」の如く表記した。なお、調査区は南西側と北東側の２ヵ所に分かれるため、便宜上、前者をＡ地点、後者をＢ地点と呼ぶ事にした。

調査はＡ地点の２ラインの各グリッドより開始し、順次、北東側のＢ地点に移行した。調査が進行するに従い、遺物包含層が調査区外の立会範囲にも広く分布している事が確認された。このためＢ１，Ｃ１・２，Ｄ２，Ｅ14～21，Ｆ14～20，Ｇ６～８，18・19グリッドを新設，また、Ａ地点とＢ地点の間でトレンチ調査を行ない（Ｄ11～12、Ｅ11～12，Ｆ11～12）、この結果をふまえて、Ｃ12・13，Ｄ11～13，Ｅ11・12グリッドを設定した。なお、北西～南東の３・８・10・14・22ライン，南西～北東のＣ・Ｅライン，Ａ地点のＧ，Ｂ地点のＦラインには幅50cmのトレンチを入れ、セクションを実測（縮尺1/20）した。また、南西～北西のＣ・Ｅラインには幅１ｍのセクションベルトを設けた。なお、土層の色調の認識には日本色研事業株式会社の『新版　標準土色帖』を使用した。

遺物は、グリッドごとにメッシュを組んで図面（縮尺1/20）に出土位置・層位・レベル等を記録して取り上げた。ただし、８月下旬に新設したＤ12・13，Ｅ12・13，Ｆ12・14～18，Ｇ８・18・19は、作業日程上から位置・レベルを記入せず層位ごとにグリッド一括で取り上げた。遺構はメッシュを組み縮尺1/10で実測した。

写真撮影は、遺構，一括遺物，セクション，調査風景，遺跡遠景等について実施し、モノクローム，リバーサルフィルム双方に収めた。（松本）

Ⅳ 遺跡の層序

a．基本層序

発掘区における基本層序は、以下のとおりである。

Ⅰ層　黒褐色表土層，10YR2/3，brownish black soil

Ⅱa層　黒褐色腐植土層，10YR2/2，brownish black humus soil

Ⅱb層　にぶい黄褐色土層，10YR4/3，dull yellowish brown soil

Ⅲa層　にぶい黄色火山灰混じりオリーブ黒色腐植土層，2.5Y6/4＋5Y2/2，olive black humus soil containing dull yellow volcanic ash

Ⅲb層　黒色腐植土層，10YR1.7/1，black humus soil

Ⅲc層　褐色火山灰混じり黒色腐植土層，10YR4/3，black humus soil containing brown volcanic ash

Ⅲd層　褐色火山灰層，10YR4/4，brown volcanic ash

Ⅳa層　褐色火山灰層，7.5YR4/6，brown volcanic ash

Ⅳb層　Ⅳa層に同じ，後述

Ⅴa層　極暗褐色腐植土層，7.5YR2/3，very dark brown humus soil

Ⅴb層　暗褐色漸移層，10YR3/4，dark brown soil

Ⅵa層　黄褐色軟質粘土層，10YR5/8，yellowish brown clay

Ⅵb層　灰白色軟質粘土層，10Y8/2～2.5Y6/4，light gray～bull yellow clay

Ⅰ層は耕作等による攪乱層である。発掘区のほぼ全面に亘って認められた。浅いところでも10cm～20cm、低位部では40cmにも達するところがある。Ⅱa層はプライマリーな腐植土層。Ⅲa層はOsaとの説もあるが、上下との関係や、その他から否定的見解を持たざるを得なかった。Ⅲc層はⅢb層とⅢd層が混じった層であり、E13Grid付近でのみ確認された。Ⅲd層は極めて粒子が細かい火山灰層である。これもE13Grid付近でのみ確認された。Ⅳa層の2次堆積である可能性もある。

Ⅳa層は褐色ないし赤褐色の火山灰を母材とする層である。極多孔質で腐植土にも富んでいる。西側の沢状地形を呈する部分を除く発掘区の広い地域に亘って認められる。ko-eとの説もあるが不明である。

北海道埋蔵文化財センター（大沼忠春ほか1986）が数年間に亘って調査している木古内町新道4遺跡のⅡ層とされる赤褐色火山灰層、あるいは、同じく北海道埋蔵文化財センターが1985年に調査した上ノ国町豊田西遺跡（鬼柳　彰ほか1986）のⅢ層とされる褐色土層が本遺跡（新村4遺跡）のⅣa層に相当するものと考えられる。

Ⅳb層は、色調などにおいてはⅣa層とほとんど同一であり、Ⅳ層として一括して大過なきものである。発掘区南側の低位部にのみ認められることからも、水の影響を多分に受けているものと判断した。Ⅳa層よりも若干、粘性に富んでいることからも裏づけられよう。**(Fig.3～8)**

b．セクションの実測

発掘区におけるセクションはFig.3のように実測した。前述したように実測面には幅50cm、深さ30～50cm程度のトレンチを入れた。

図のように東西セクションはA3～J3，A8～G8，E10～G10，C14～F14，C22～F22について実測した。又、南北セクションについてはC2～C8，C14～C17，C18～C19，C20～C22，E3～E10，E11～E14，F14～F22，G2～G10とA3Gridを斜断するFig.8に図示した面について実測した。A3Gridのセクションについては、Ⅲ層の堆積状況が良好であるため図と写真とによって記録した。

発掘区の北東部に延びるテストピット(Fig.3)は、調査終了間際に設定し試掘したものである。出土遺物は非常に少なく、C24，D23，D31から合計5点（いずれもⅠ層）の遺物が出土したのみであり、遺構等も検出されなかった。

テストピットの柱状図をみてもわかるとおり、主要発掘区に比して攪乱の度合が比較的深く、Ⅳ

層が確認されたテストピットは、C23とD31の2ヵ所にすぎない。

c．層位と出土遺物

遺物はⅠ層～Ⅴ層の各層より出土しているが、本遺跡の主たる包含層はⅣ層とⅤ層である。

出土遺物総数23,600点の内、約54%がⅣ層から、約4%がⅤ層から出土したもので占められている。Ⅱ・Ⅲ層からの出土遺物は両層あわせても全体の約1%にすぎない。その上、これらは全点混入と考えられる。残りの約41%が攪乱層であるⅠ層からの出土である。

Ⅴ層からの出土遺物は縄文時代後期のものに限定されるのであるが、Ⅳ層からは縄文時代後期と晩期の2時期に亘る遺物が出土している。したがって前述したようにⅣ層の火山灰の降下年代も必然的に限定されてくるものと考えられる。（宮）

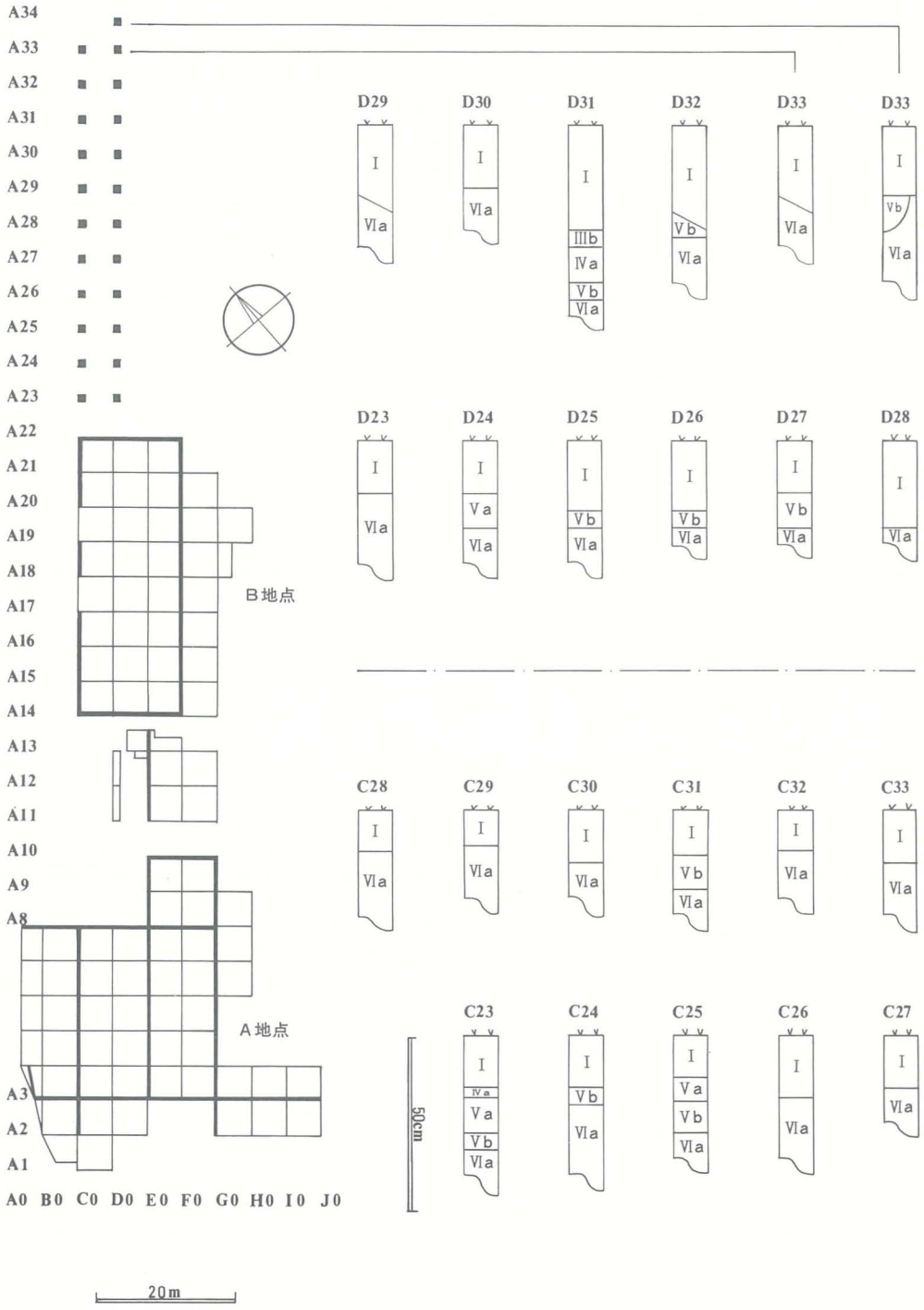


Fig. 3　土層断面図の位置とテストピットの柱状図

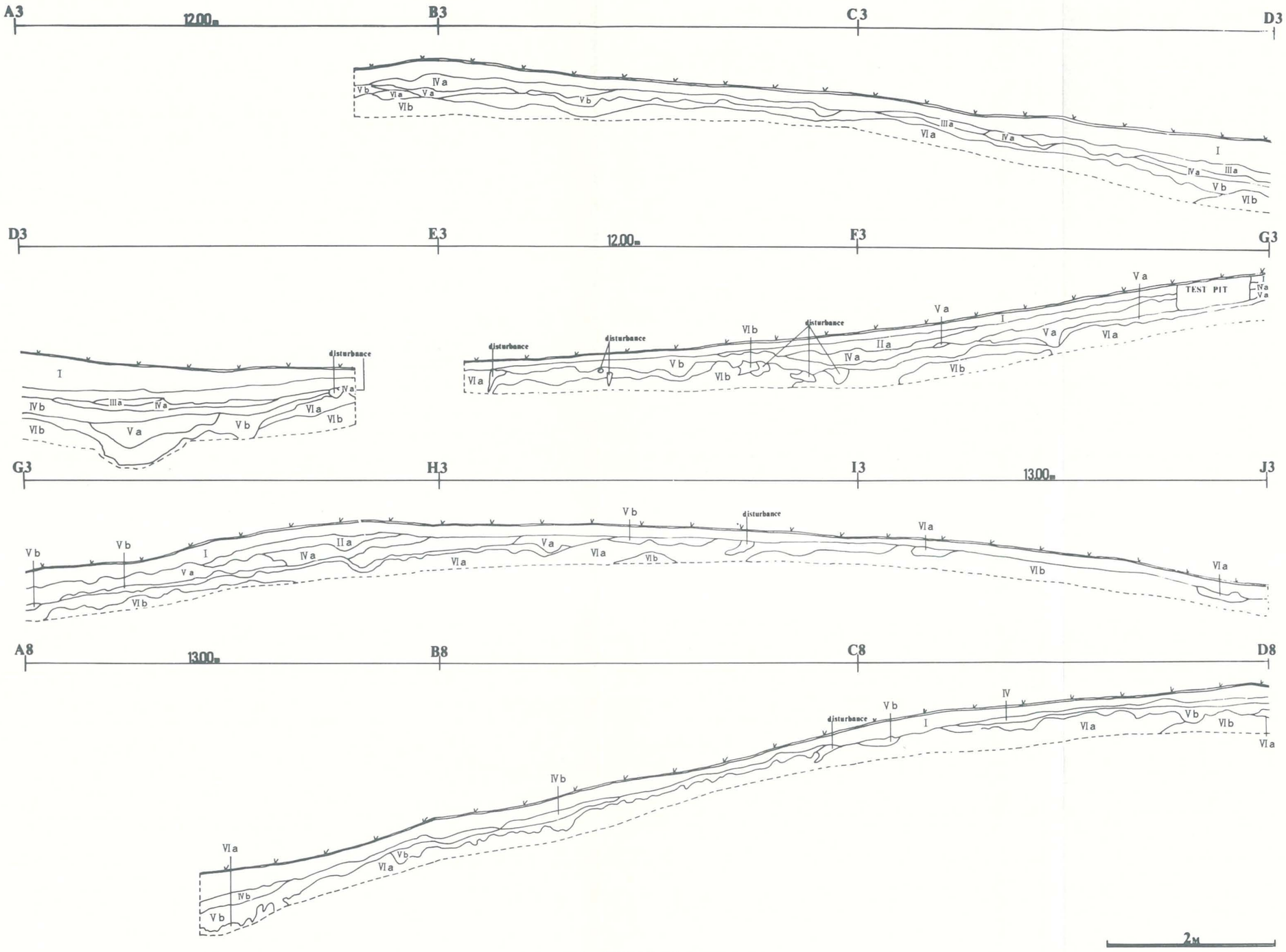


Fig.4　新村4遺跡東西セクション

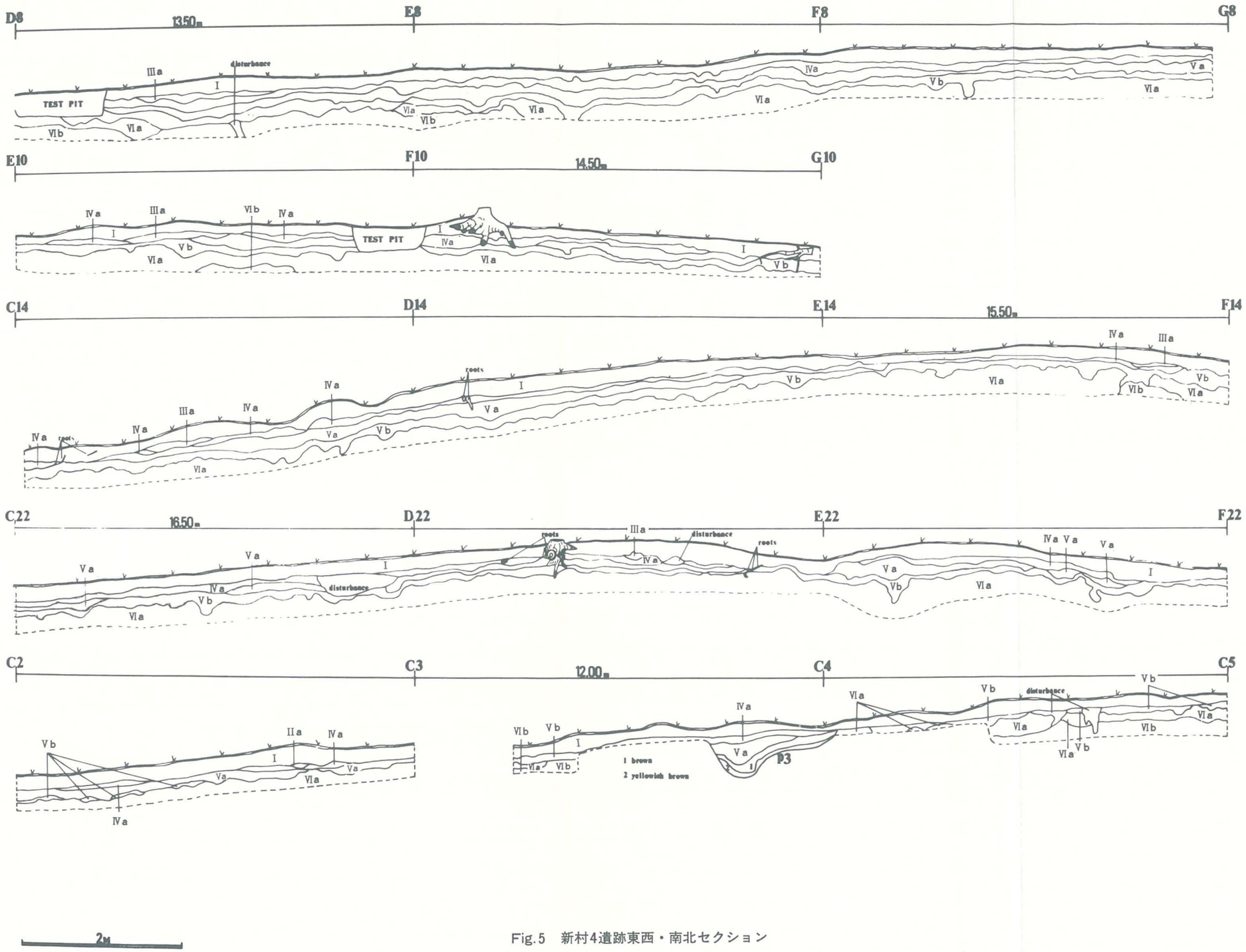


Fig.5　新村4遺跡東西・南北セクション

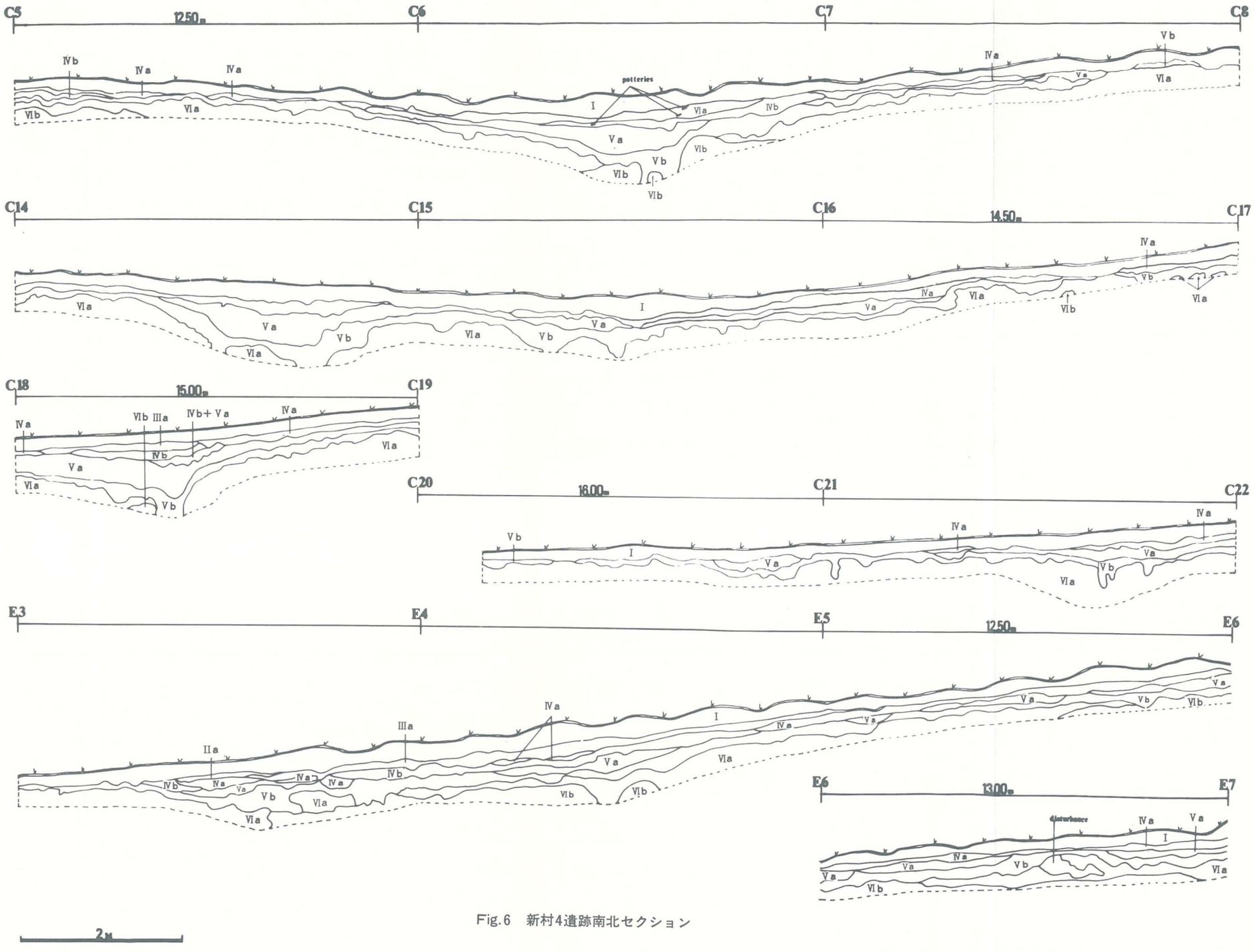


Fig.6　新村4遺跡南北セクション

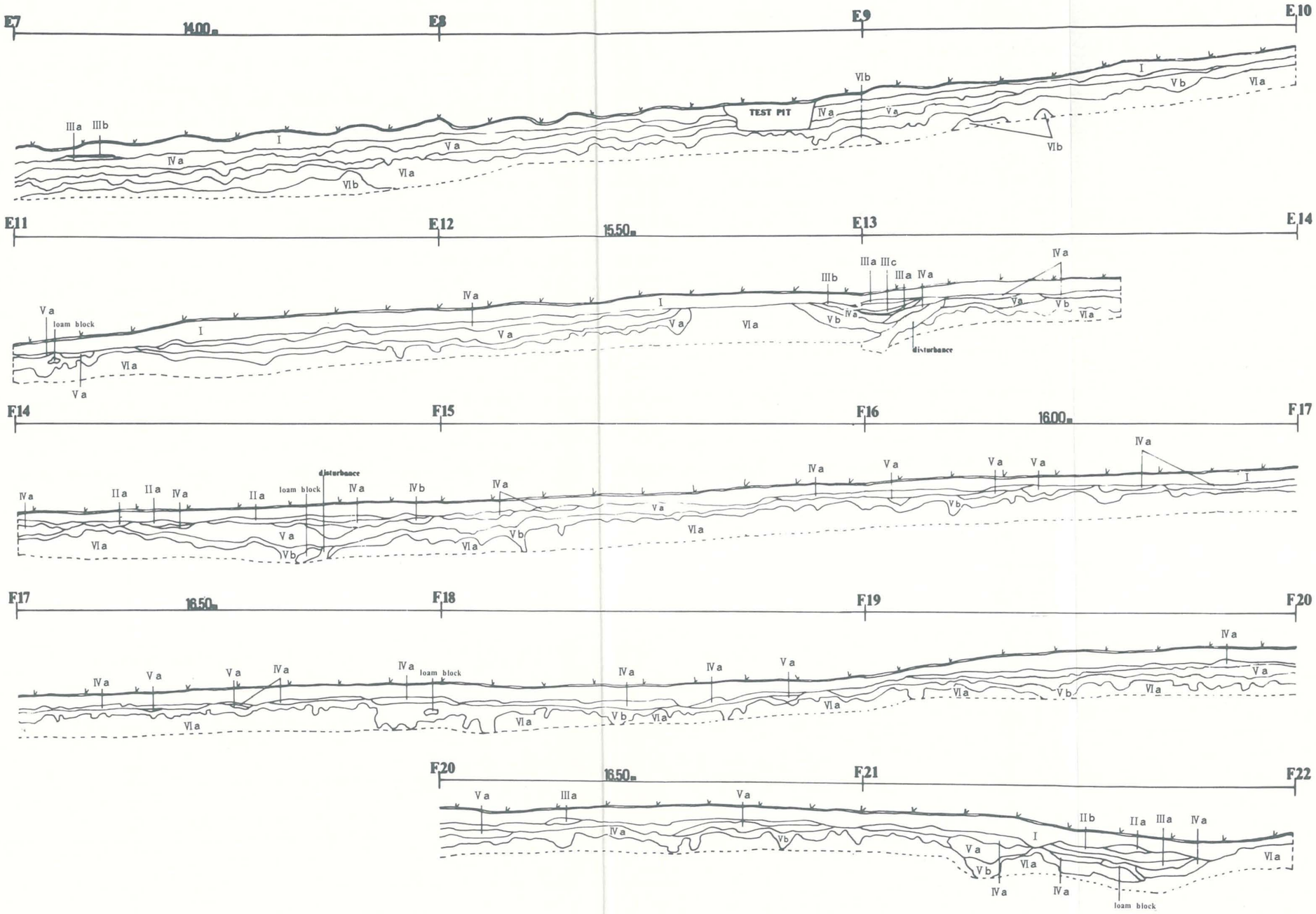


Fig. 7　新村4遺跡南北セクション

2m

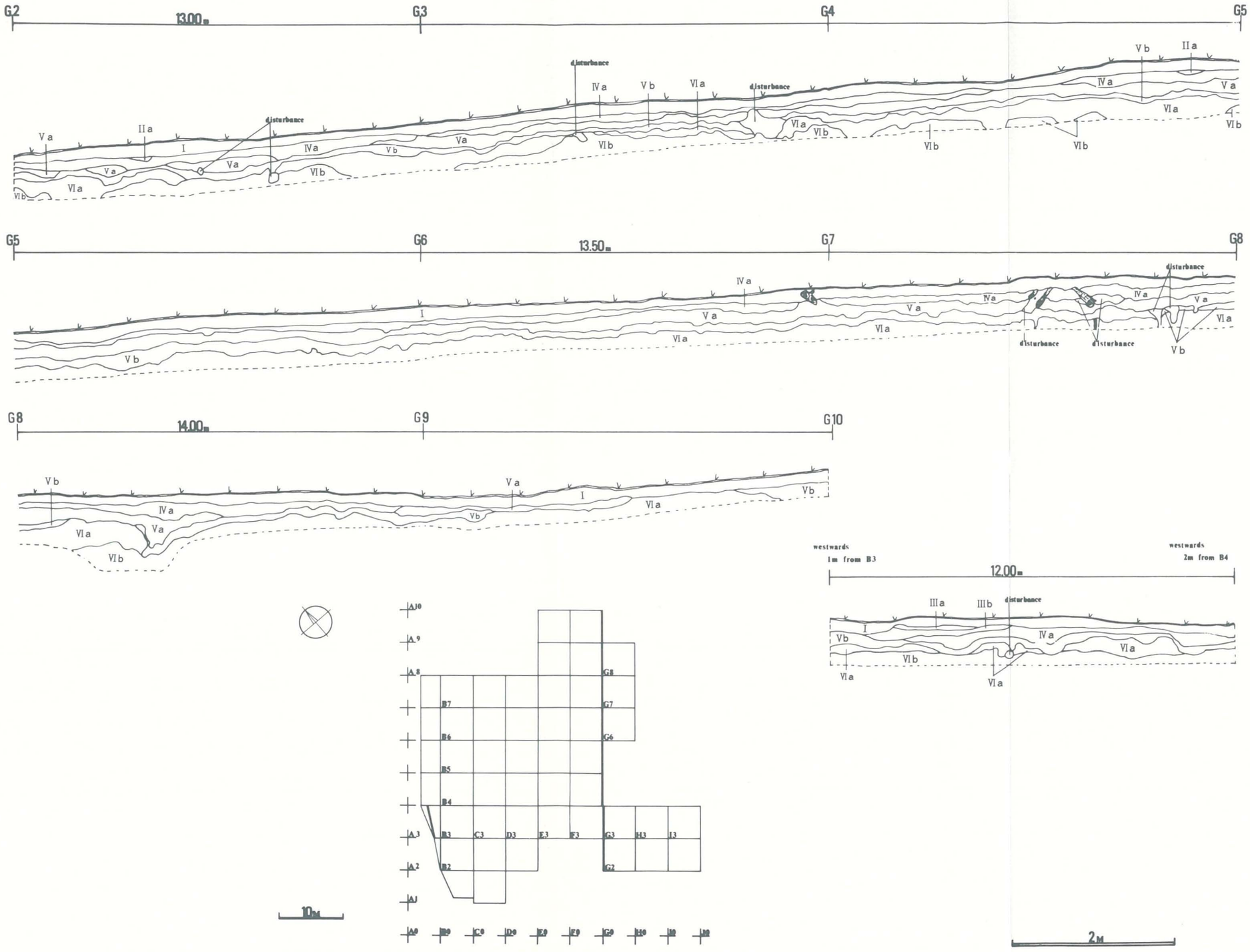


Fig.8　新村4遺跡南北セクション

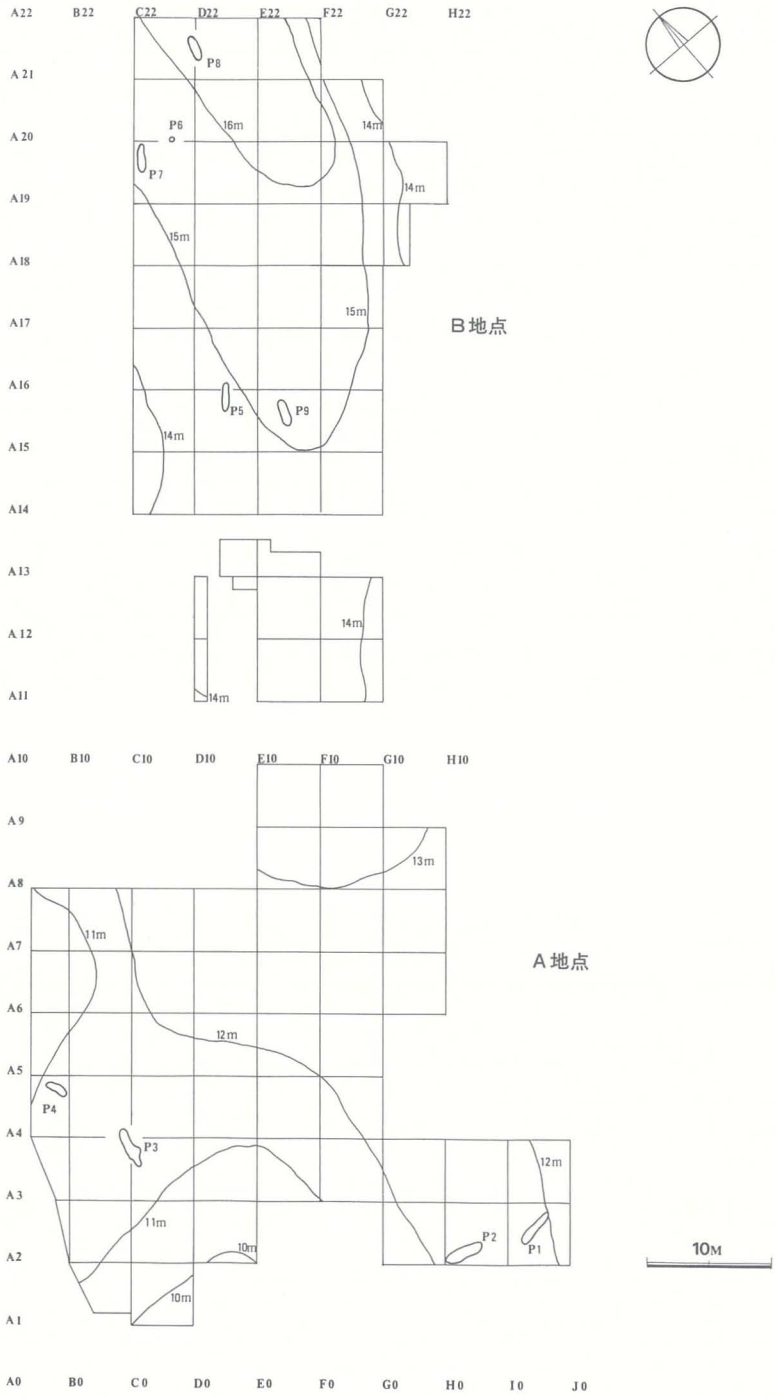


Fig. 9　発掘区と検出遺構の分布

Ⅴ．遺　　構

ａ．検出遺構の分布と若干の問題

今回の発掘調査によりＴピット８，小ピット１の合計９基の遺構が検出された。遺構覆土から遺物が若干出土したピットはあったものの、遺構伴出遺物は皆無であった。

検出遺構の分布にコンターラインを書き入れたのがFig.9である。Ｐ１～Ｐ４の分布するＡ地点とＰ５～Ｐ９の分布するＢ地点では、Ｔピットのあり方に若干の違いが認められる。

Ｐ１～Ｐ４は、コンターラインに直交する傾向がある。すなわちＴピットの長軸が傾斜に沿って構築されていることである。一方、Ｐ６を除く、Ｐ５～Ｐ９の４基のＴピットは、コンターラインに沿うように構築されている。どのような理由に基づく相違なのであろうか。地形上の違い、あるいは時間的な違いがあるのかもしれない。

今回、調査対象とならなかった区域外の隣接地域にもＴピットは、少なからず存在するものとみてまちがいない。

ｂ．遺構検出状況

Ｐ１　発掘区中、最も南側で検出されたピット

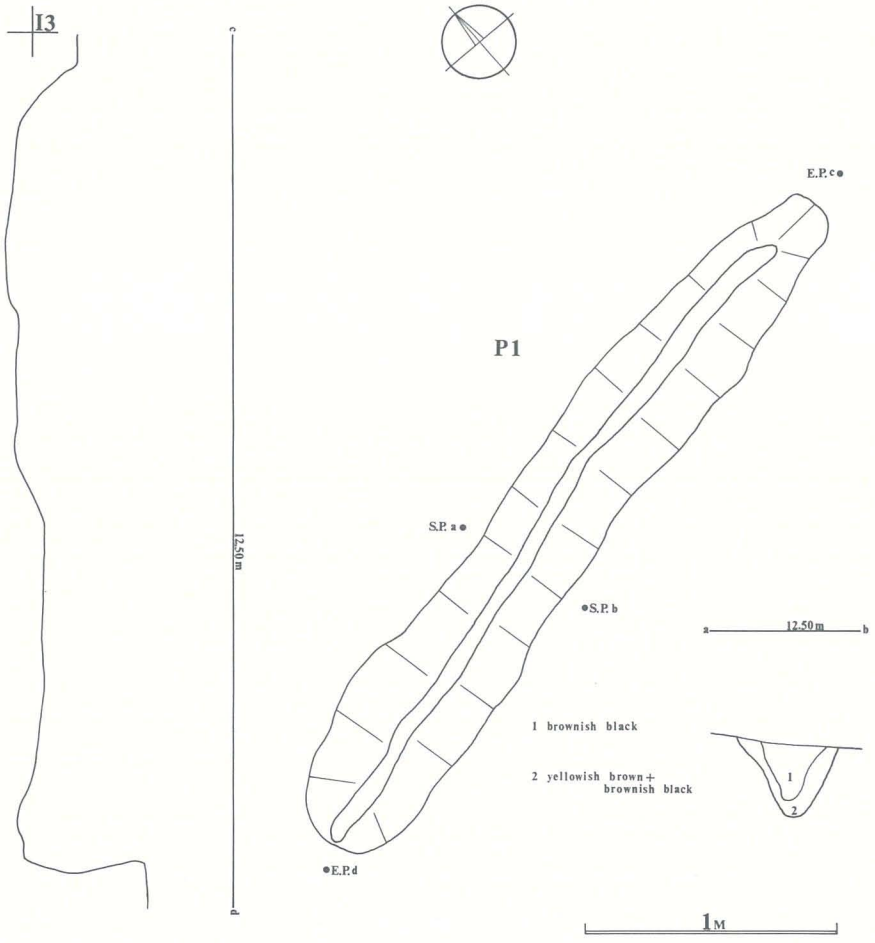


Fig.10　新村4遺跡Pit 1検出状況

である。Ⅰ層除去後、プランが確認された。耕作等によって上部が削平され、本来はあと数十センチ深かったものとみられる。

321cm×54cmほどの大きさで、確認面から最も深い部分で約50cmと、きわめて浅い。形状からＴピットと考えられる。

覆土のセクションは、以下のとおりである。

1　黒褐色腐植土　5YR3/1（粒子細）

2　明黄褐色粘質土＋黒褐色腐植土　2.5Y6/6＋5ＹＲ3/1

Ｐ2　Ｐ１より３ｍほど西側にあるピットである。340cm×97cmほどの大きさで、確認面から最も深い部分でも約60cmと浅い。Ｐ２は削平されておらず、構築時の深さに近いと考えられる。Ｖａ層を掘り込んでいることがセクションベルトの観察より明らかとなった。これもＴピットと考えられる。

Fig.11のエレベーションにみられるように傾斜する小ピットが底の部分より検出された。本例はいわゆる逆茂木とは考えにくく、むしろＴピット構築の際の掘削状況を窺わせる事例と考えたい。

覆土のセクションは、以下のとおりである。

1　黒色腐植土　10ＹＲ1.7/1（若干粘性あり）

2　黒褐色腐植土　2.5Y3/1（若干粘性あり）

3　暗褐色腐植土　10ＹＲ3/3

Ｐ3　Ｂ３，Ｂ４，Ｃ３の３Gridにまたがって検出されたピットである。当初重複しているかに

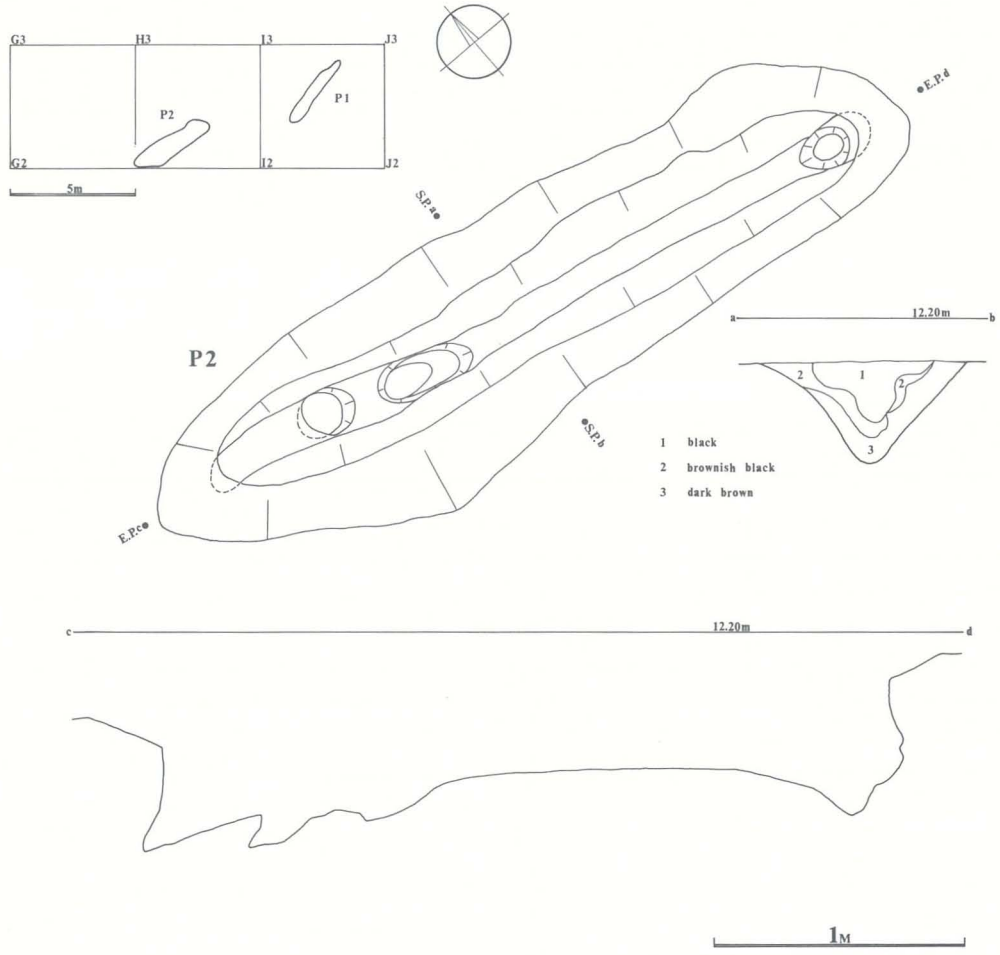


Fig.11　新村4遺跡Pit 2検出状況

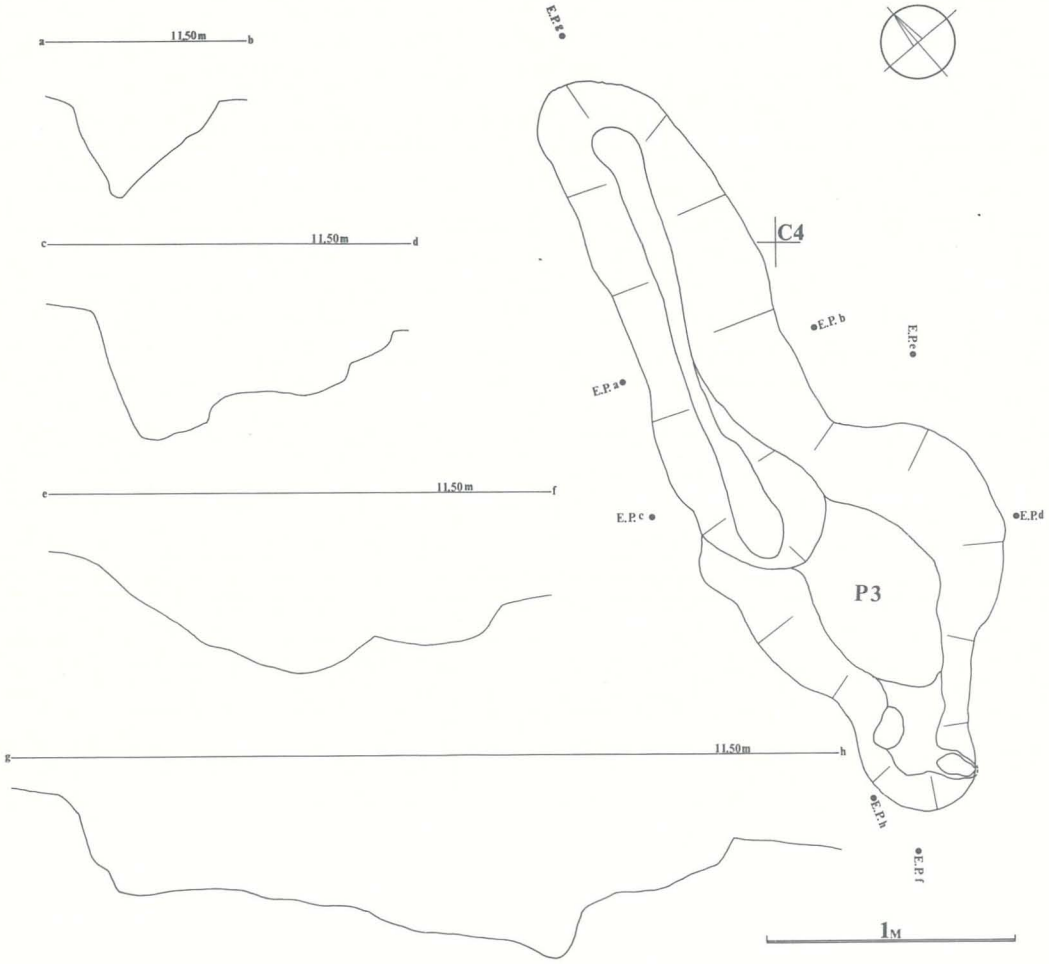


Fig.12　新村4遺跡Pit3検出状況（Fig.5 南北セクション参照）

思われたが、同一のピットであった。形態が歪であるため、エレベーションの実測に少々時間をかけた。327cm×113cmほどの大きさで、確認面から最も深い部分で約50cmと浅い。これもTピットであろうか。覆土のセクションは以下のとおりである（Fig.5参照）。

1　褐色土　10YR4/4，2　黄褐色土　10YR5/8

覆土中よりフレーク1点，土器片13点（小破片，いずれも縄文時代後期）が出土した。

P 4　発掘区の中でも最もレベルの低い部分で検出されたピットである。沢近くであるため降雨後は一部浸水する。ピット北側の一部は浅く明確でない。205cm×63cmほどの大きさで確認面から最も深い部分で約40cmときわめて浅い。覆土のセクションは、P 2とほぼ同じである。これもやはりTピットであろうか。

P 5　D15、D16Gridにまたがって検出されたピットである。246cm×44cmほどの大きさで確認面から最も深い部分で約60cmである。破線で書かれた部分は、ピット周辺部の地形が浅く落ち込んでいたため、若干掘り過ぎた嫌いがあったため破線で示したものである。このピットからも底部に傾斜する小ピットが検出された。しかし、P 2同様、杭穴を彷彿させるようなものではなかった。覆土のセクションは、以下のとおりである。

1　黒色腐植土　7.5YR1.7/1

2　〃　7.5YR2/1（粘性強し）

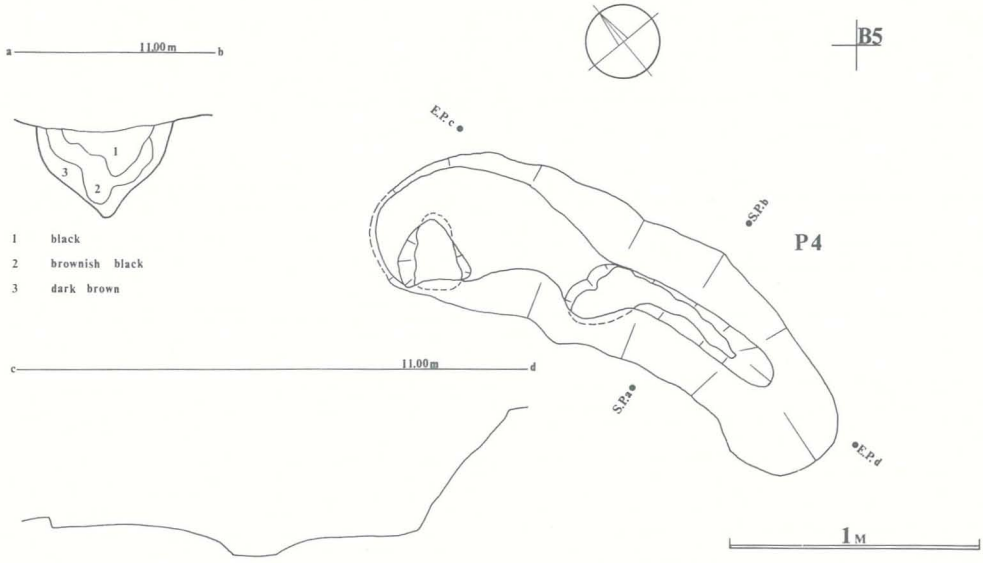


Fig.13　新村4遺跡Pit 4検出状況

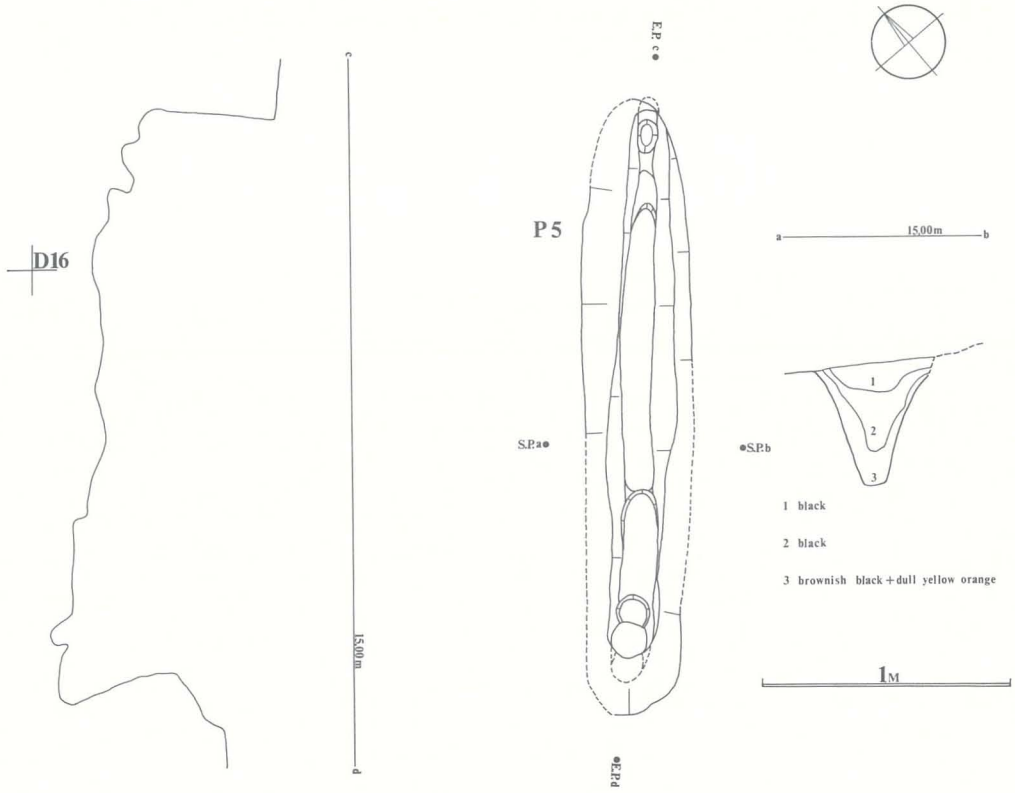


Fig.14　新村4遺跡Pit 5検出状況

3　にぶい黄橙色粘土混じり黒褐色腐植土
2.5Y3/1＋10YR6/4

P 6　検出遺構中、最も小さなピットである。C20Grid南側より検出された。P 7とは2m程の距離である。49cm×39cmの大きさで確認面から最も深い部分で約17cmである。壙底部より若干、炭化物が認められた。覆土はⅣa層に非常に近く、これがⅣa層であるとすれば、他のTピット群の年代よりも後出のものであるといえよう。

したがって、本遺跡出土の土器のいずれかのものと同一時期の所産である可能性が高い。

P 7　C19Grid北側から検出されたTピットである。243cm×57cmの大きさで、確認面から最も深い部分で約62cmである。P 2とP 5同様、壙底部は起伏に富んでいる。覆土のセクションは、以下のとおりである。

1　暗褐色腐植土　10YR3/4（Ⅳa層に酷似）
2　黒色腐植土　10YR2/1
3　黄橙色粘土混じり黒褐色腐植土　10YR2/3＋10YR7/8

P 8　C21、D22Gridにまたがって検出されたTピットである。長軸は南北の軸に近い。壙底部

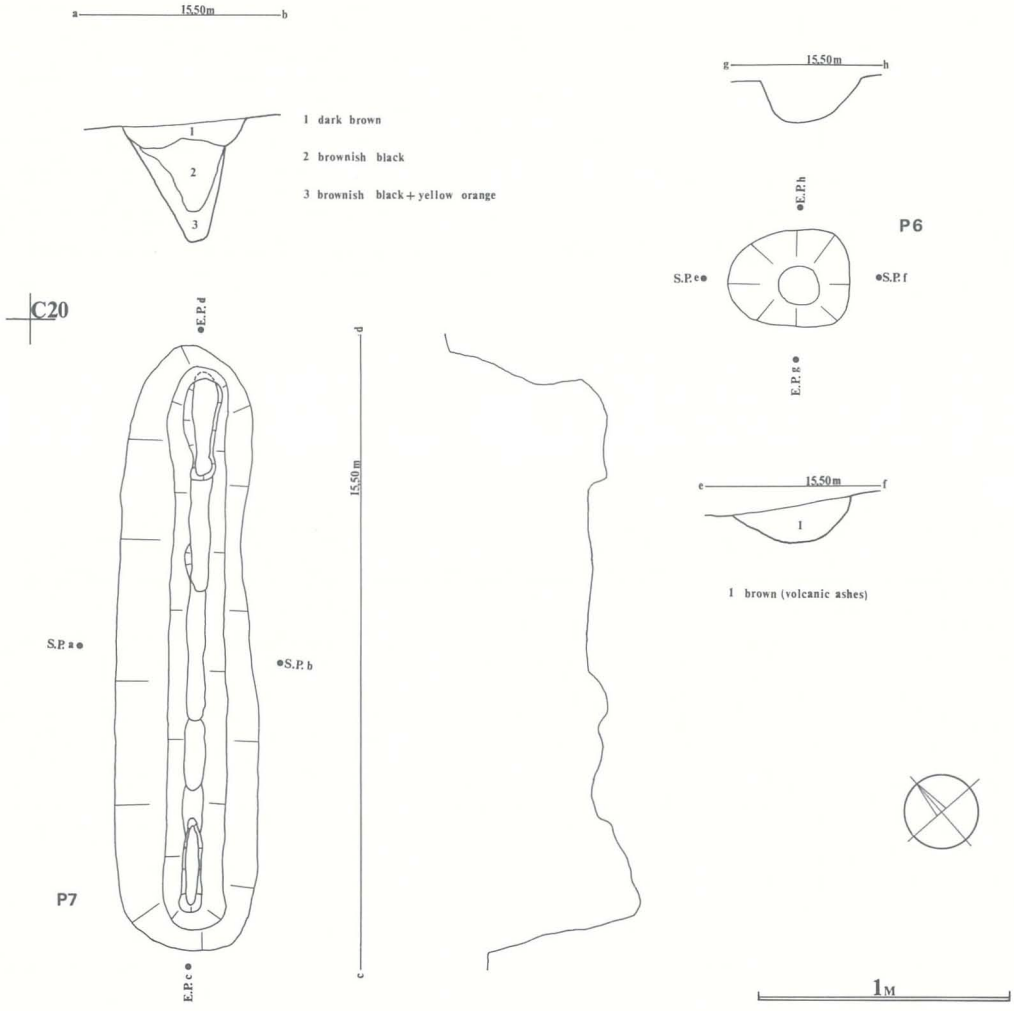


Fig.15　新村4遺跡Pit6・7検出状況

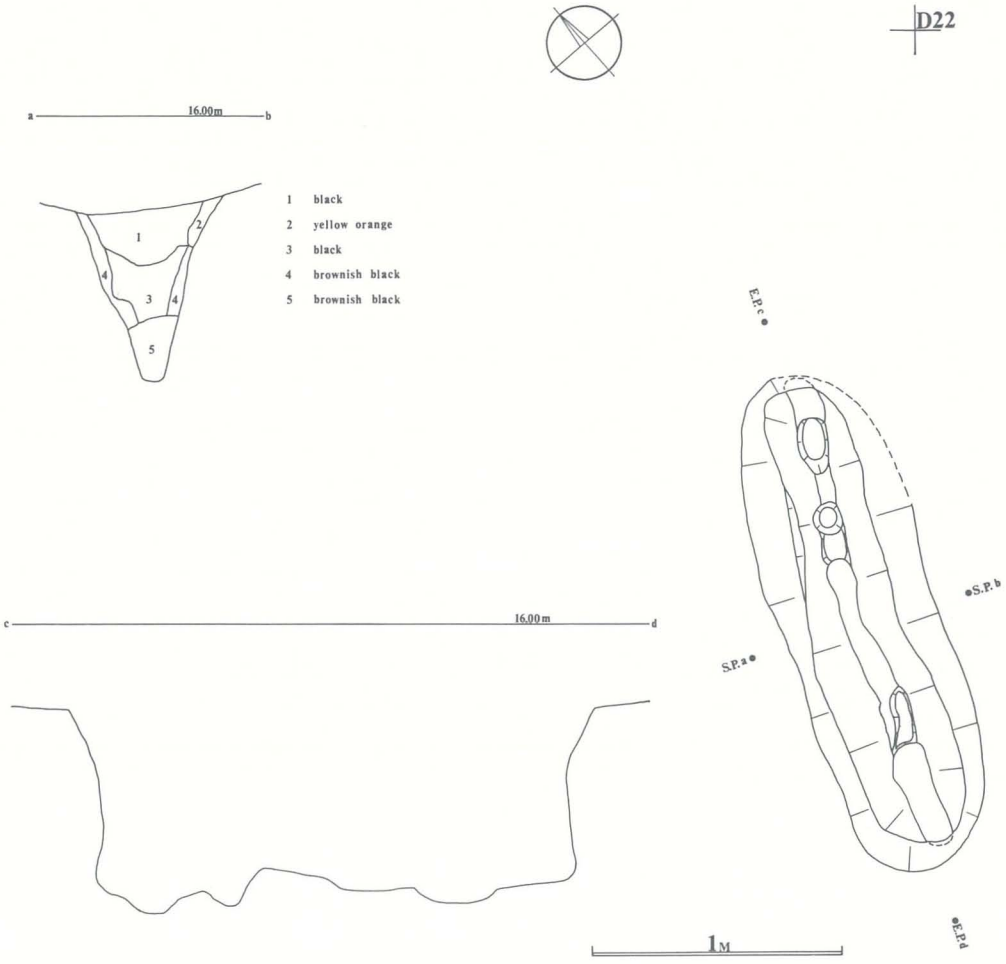


Fig.16　新村4遺跡Pit8検出状況

はＰ２・Ｐ５・Ｐ７同様起伏に富んでいる。206cm×65cmの大きさで確認面から最も深い部分で約78cmである。覆土中３層より、リタッチドフレーク１点が出土した。覆土のセクションは、以下のとおりである。

1　黒色腐植土　10YR1.7/1
2　黄橙色粘質土　10YR7/8(ブロック状に混入)
3　黒色腐植土　10YR2/1(粘性強し)
4　黒褐色腐植土　10YR2/2 ～3/2
5　〃　10YR3/2(粘土が斑状に混入)

Ｐ９　E15Gridの中ほどから検出されたＴピットである。長軸はＰ８同様、南北に近い。壙底部はＰ２・Ｐ５・Ｐ７・Ｐ８と同じ様に起伏に富む。222cm×71cmほどの大きさで、確認面から最も深い部分で約70cmである。

覆土のセクションは、以下のとおりである。

1　赤黒色腐植土　10R1.7/1
2　〃　2.5YR2/1
3　黒褐色腐植土　10YR2/2
4　暗オリーブ褐色土　2.5Y3/3　（宮）

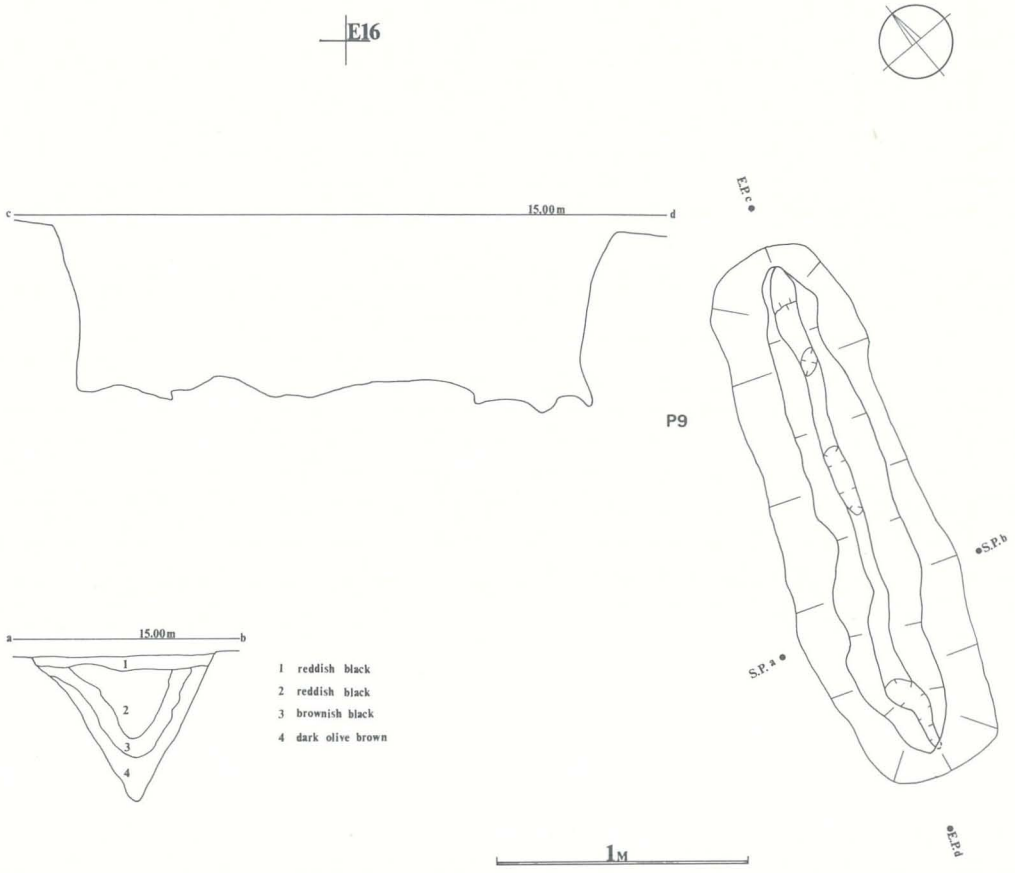


Fig.17　新村4遺跡Pit9検出状況

Ⅵ 遺　　物

a．遺物の概要

発掘調査により約23,600点の遺物が出土した。前述したように本遺跡の主たる包含層は、Ⅳ層（Ⅳａ層＋Ⅳｂ層）であり、プライマリーな遺物のうち約92％がⅣ層からの出土である。あとの約８％がⅤ層（Ⅴａ層＋Ⅴｂ層）からの出土である。

Ⅳ層から出土した土器は、縄文時代晩期と後期のものがみられ、Ⅴ層出土のものは、縄文時代後期のもののみに限定される。

遺構出土の遺物は前述したようにＰ３から14点，Ｐ８から１点の合計15点のみである。残り23,570点は総て包含層からの出土である。

遺物はＢ地点よりもＡ地点に多くみられる。遺物が集中するGridはＢ６，Ｃ２，Ｃ３，Ｃ６，Ｄ３，Ｄ４，Ｄ５，Ｅ５，Ｆ６等であり、ほとんどは縄文時代晩期の土器である。

縄文時代後期の遺物は、概ねＢ地点からＡ地点の東側に分布する。それに反して縄文時代晩期の遺物は、Ａ地点の東側一部分を残し、Ａ地点全域に分布する。したがって、Ａ地点の東側部分の一部に両時期の遺物がオーバーラップし、分布しているとみて概ね、まちがいはない。

口縁部並びに底部の双方から推測した両時期の土器の個体数は、後期が約55個体で晩期が約105個体と概ね１：２の比率である。　　（宮）

b．土　器

縄文時代後期の土器（Fig．18～25）

当該期の土器を概ね、以下のように４分類した。詳細については、分類別に後述する。

Ⅰ群ａ類　縄文時代後期初頭の土器
〃　ｂ類　　〃　　前葉　〃
〃　ｃ類　　〃　　中葉　〃
〃　ｄ類　　〃　　後葉　〃

Ⅰ群ａ類

１・33・34は、本遺跡出土の土器中最も古手のもので同一個体と考えられるが、接合しなかったため実測図と拓本でそれぞれ示した。波状口縁であり６ヵ所の突起を有するものとみられる。肥厚した口唇部には沈線が施されている。口縁部は無文帯を形成し頸部にも口唇部と同様な沈線が、胴部から底部には口唇部と同様ＬＲ縄文が施文されている。後期初頭のものとみられるのは、この１個体のみである。

類例は管見の限り見当らず、今後の資料の増加に期待したい。

Ⅰ群ｂ類

35は、２本一組の沈線による渦巻状の沈線文が施されている土器であり、渦巻の中心部が磨消されている。

２は、Ｅ17GridⅤ層より倒立した状態で出土した。口縁部が波状を呈する壺である。３・37はＦ19、35・36はＥ18、38はＦ20と、いずれも比較的隣接するGridから出土した。37・38は同一個体と考えられる。大津遺跡の第７群土器や入江式土器等に類例が認められる。東北地方北部の十腰内１式に並行するものとみられる。

６・10・11は、器面全体に縄文のみが施文されているものである。６は浅鉢、10・11は深鉢であり、12・13は、無文土器である。いずれも後期前葉のものとみられる。

本類土器と考えられるものが12個体前後出土している。いずれも大津遺跡第７群土器あるいは入江式土器に包括されるものとみられる。

Ⅰ群Ｃ類

４は、４ヵ所の低い突起を有するとみられる波状口縁の土器である。口頸部に一条の不明瞭な沈線が、胴部にはＲＬ縄文が施されている。胴部以下が、すぼまる器形である。

15は、平行沈線文・短刻文の特徴から、いわゆる手稲式と鮏澗式両タイプの特徴を共有している土器である。平行沈線をＣやＳといった縦方向の沈線で区切り、口頸部には浅いキザミ列がみられる。

16～20，39～51は、鮏澗式土器と考えられる。短刻文が多用される段階である。多くは口唇部の裏面が肥厚する。39～42，43～45，46～48は、それぞれ同一個体とみられる。道南では臼尻遺跡や日吉遺跡等に出土例が認められる。

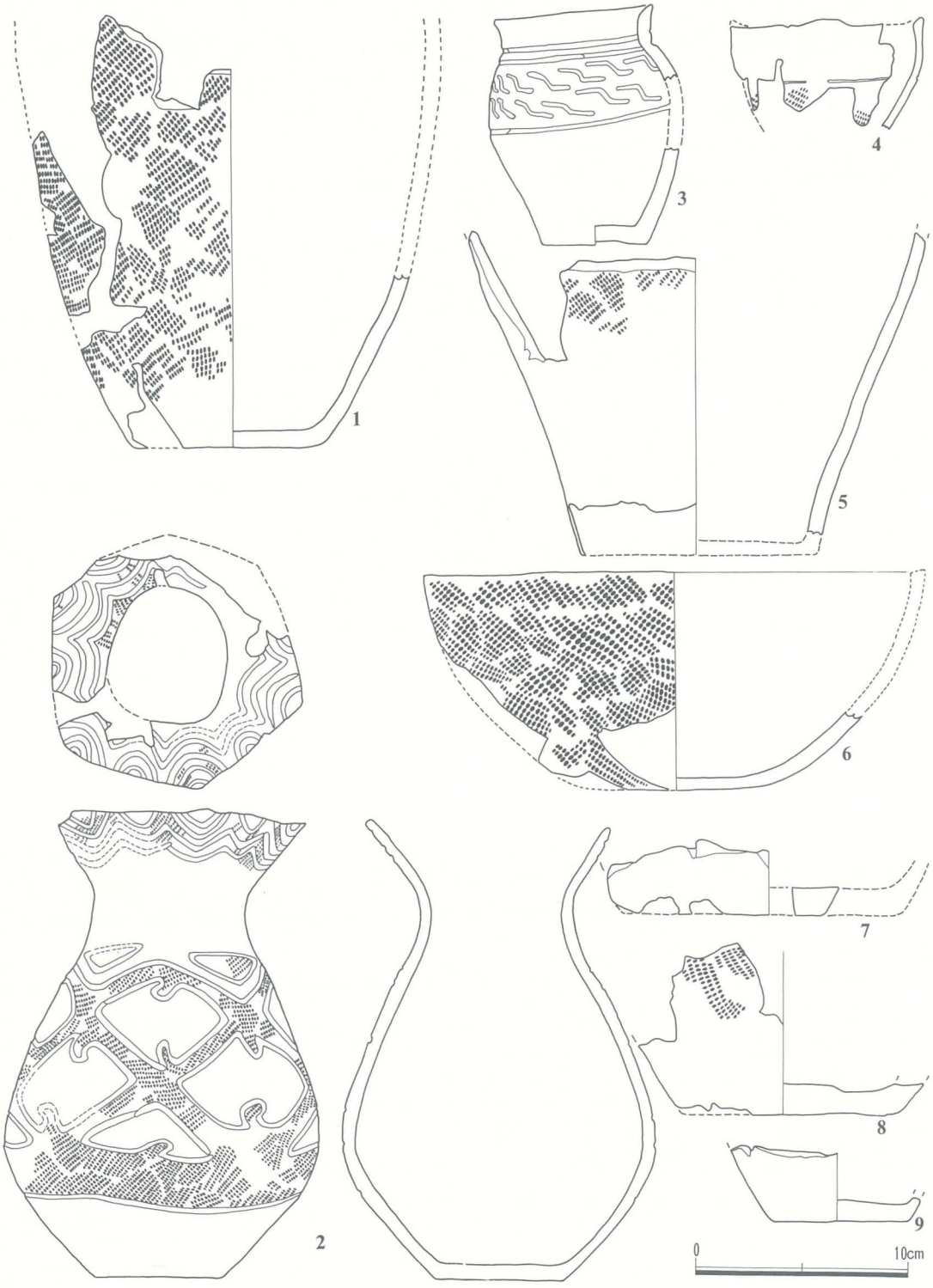


Fig.18　縄文時代後期の土器

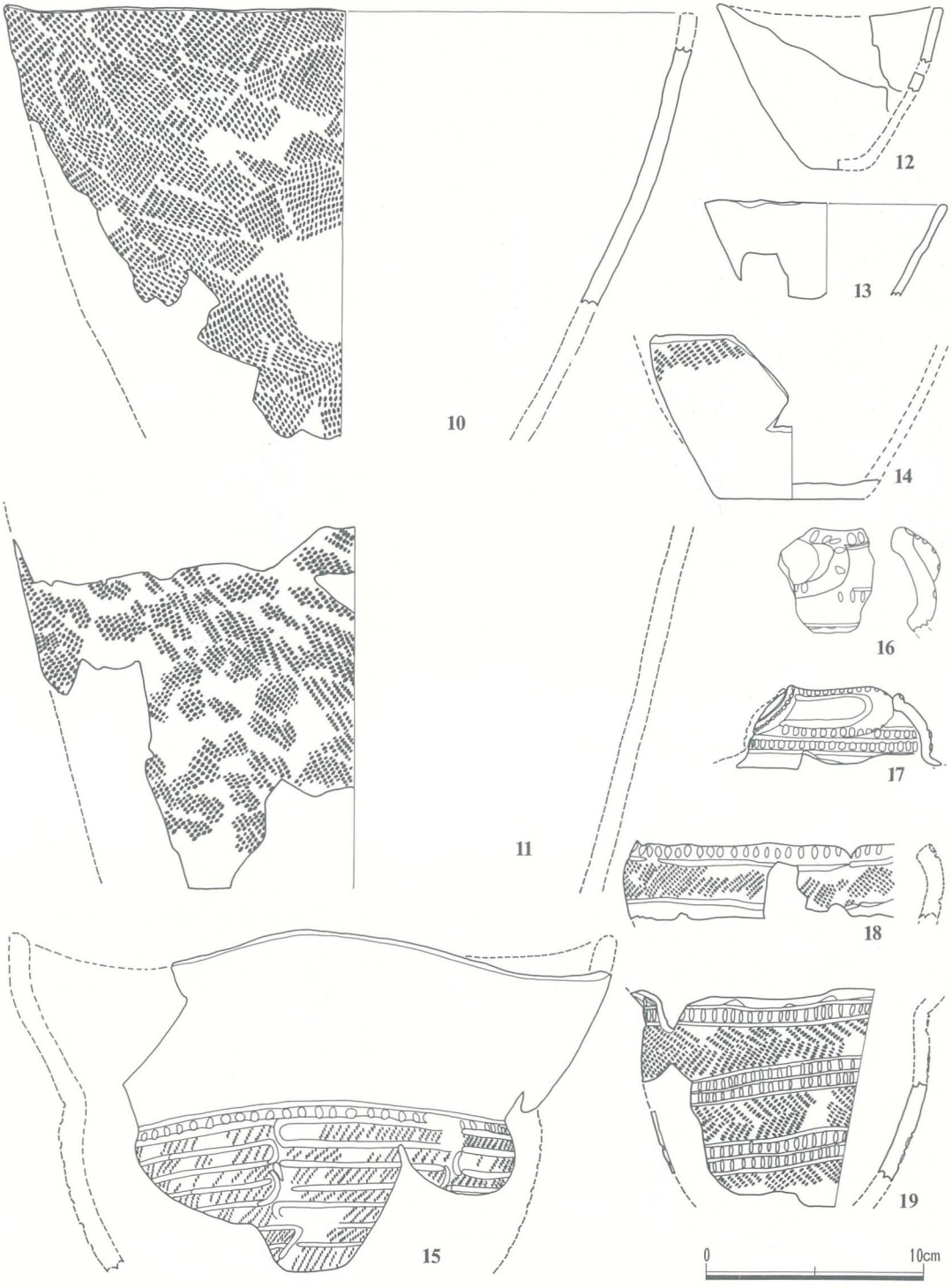


Fig.19　縄文時代後期の土器

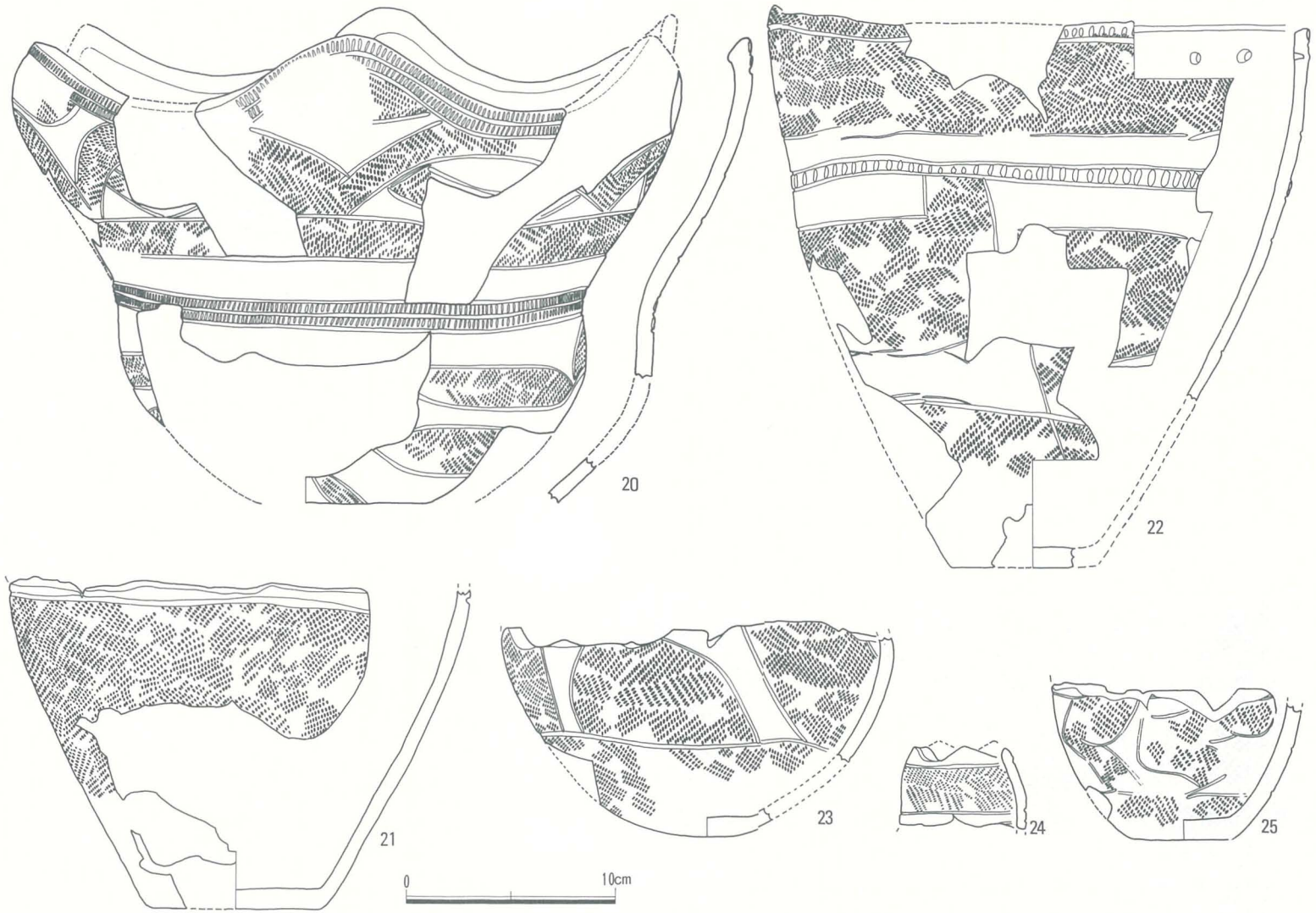


Fig.20　縄文時代後期の土器

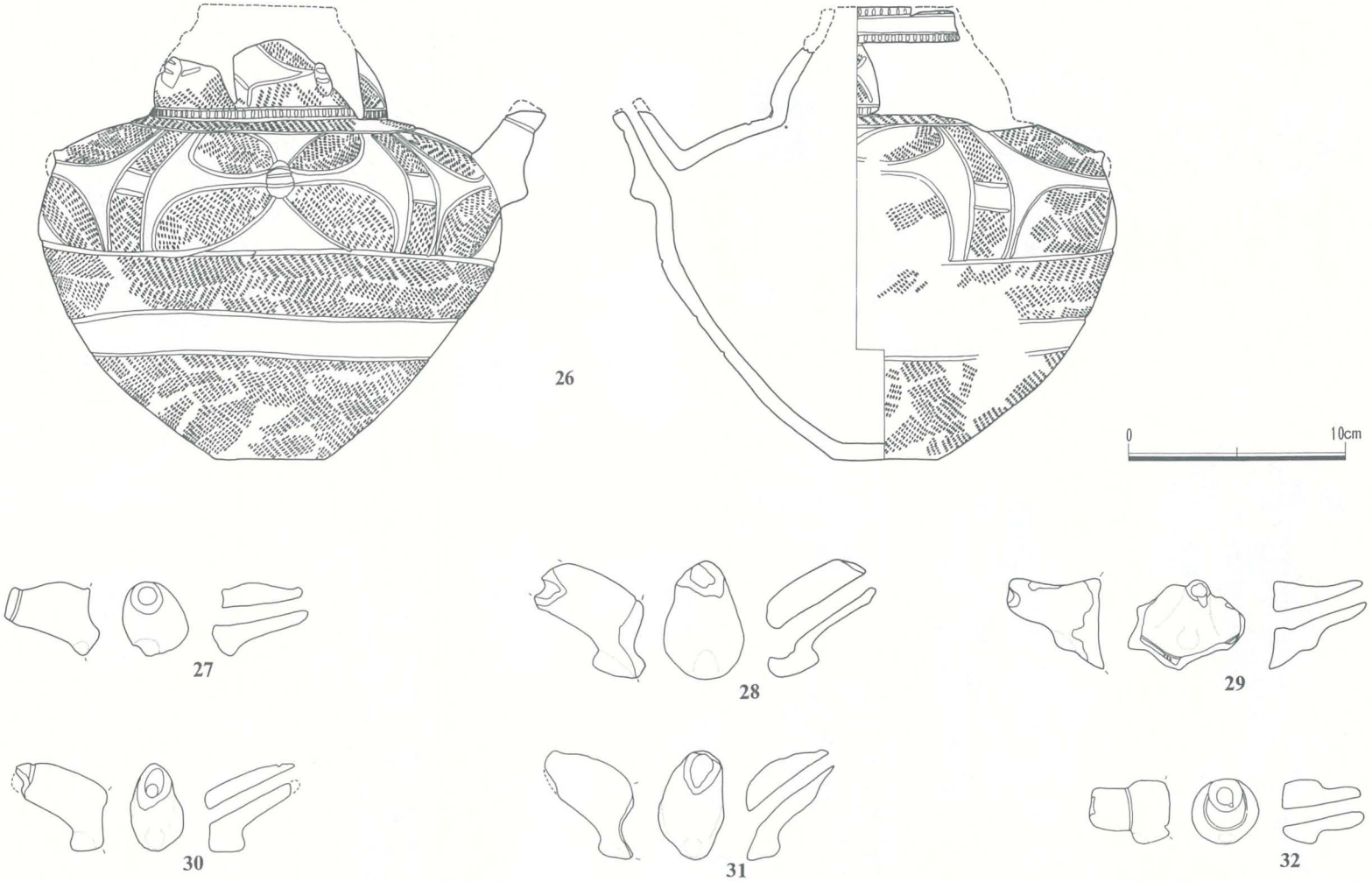


Fig.21　縄文時代後期の土器

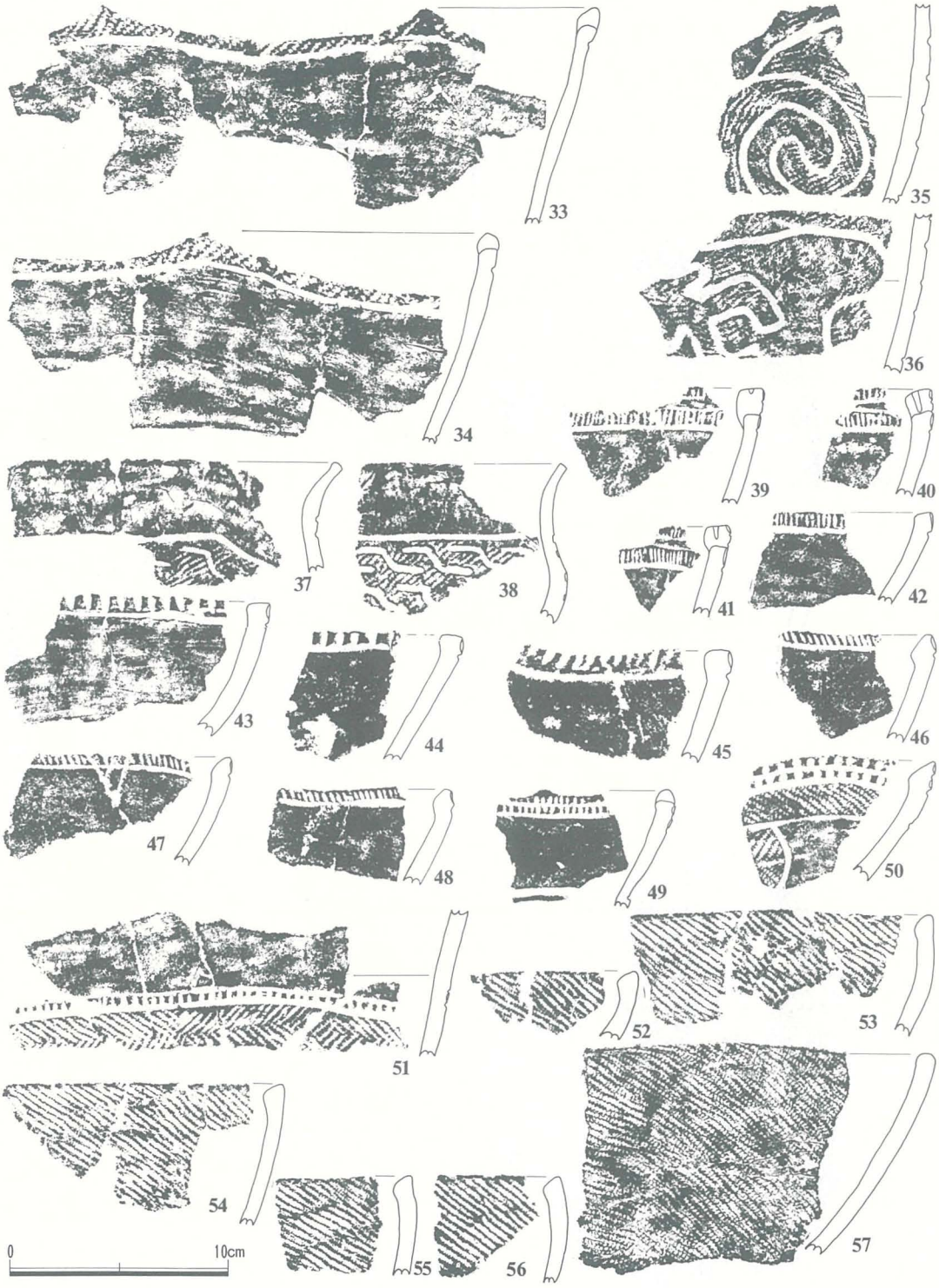


Fig.22　縄文時代後期の土器

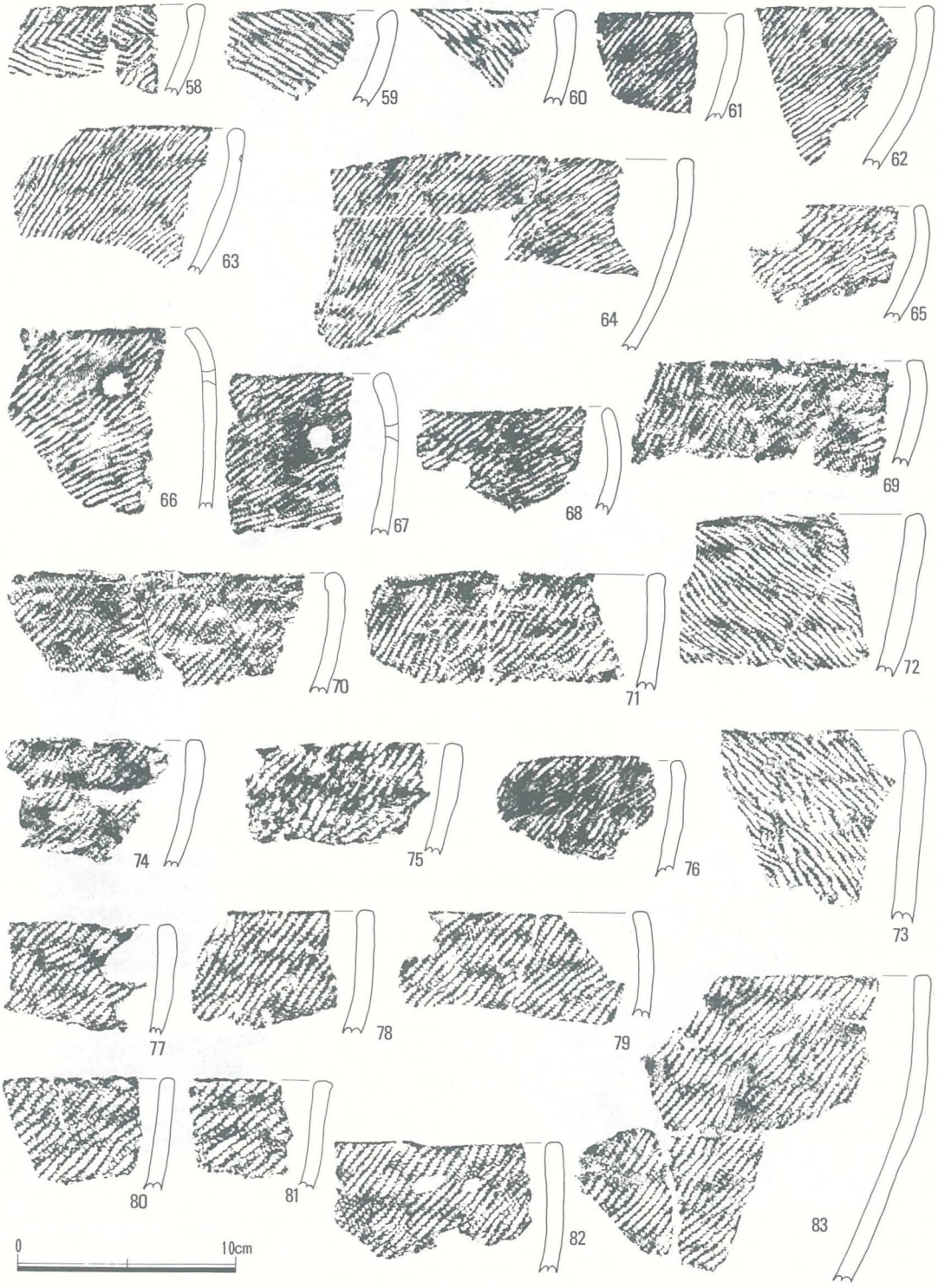


Fig.23　縄文時代後期の土器

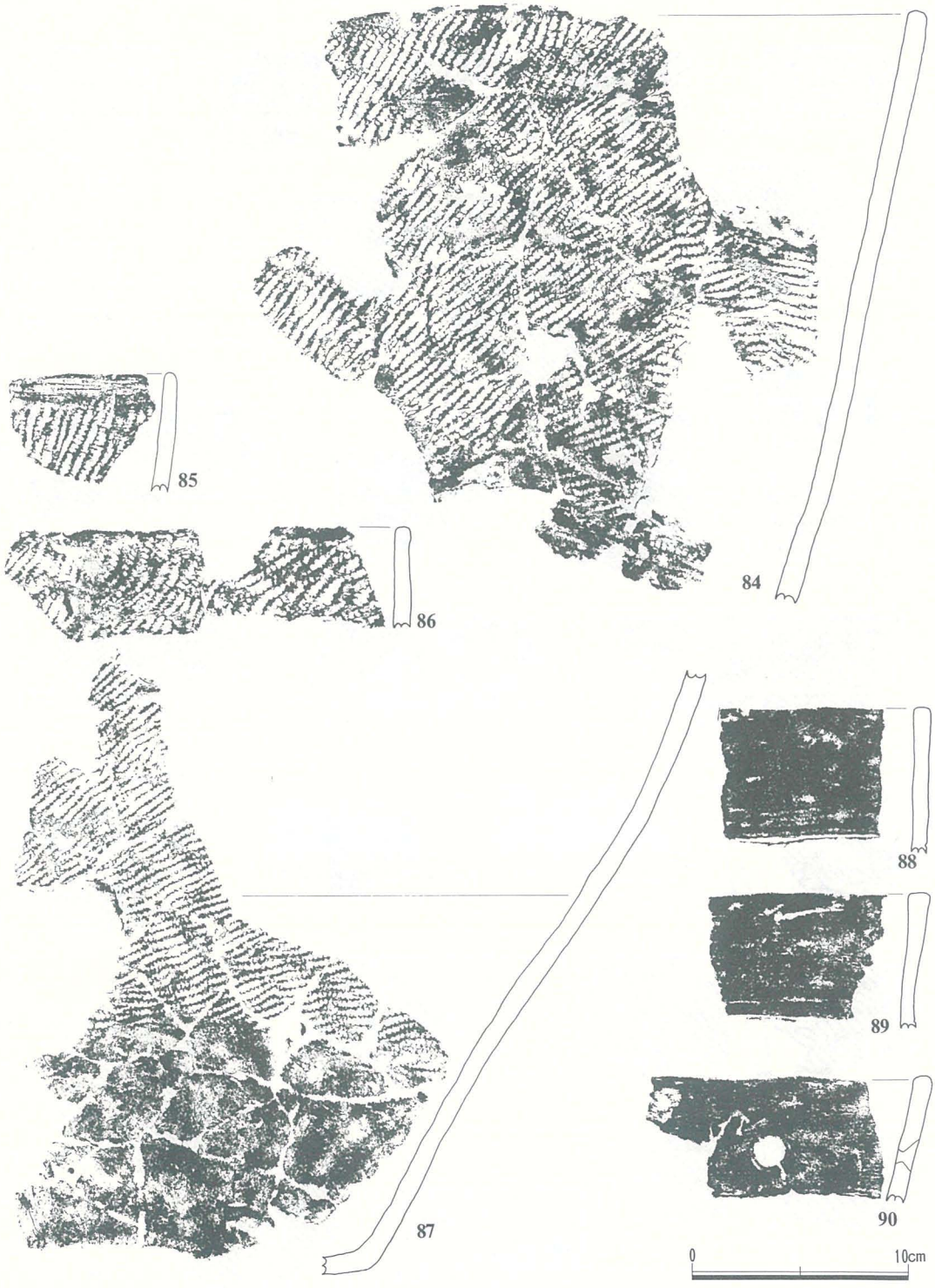


Fig.24　縄文時代後期の土器

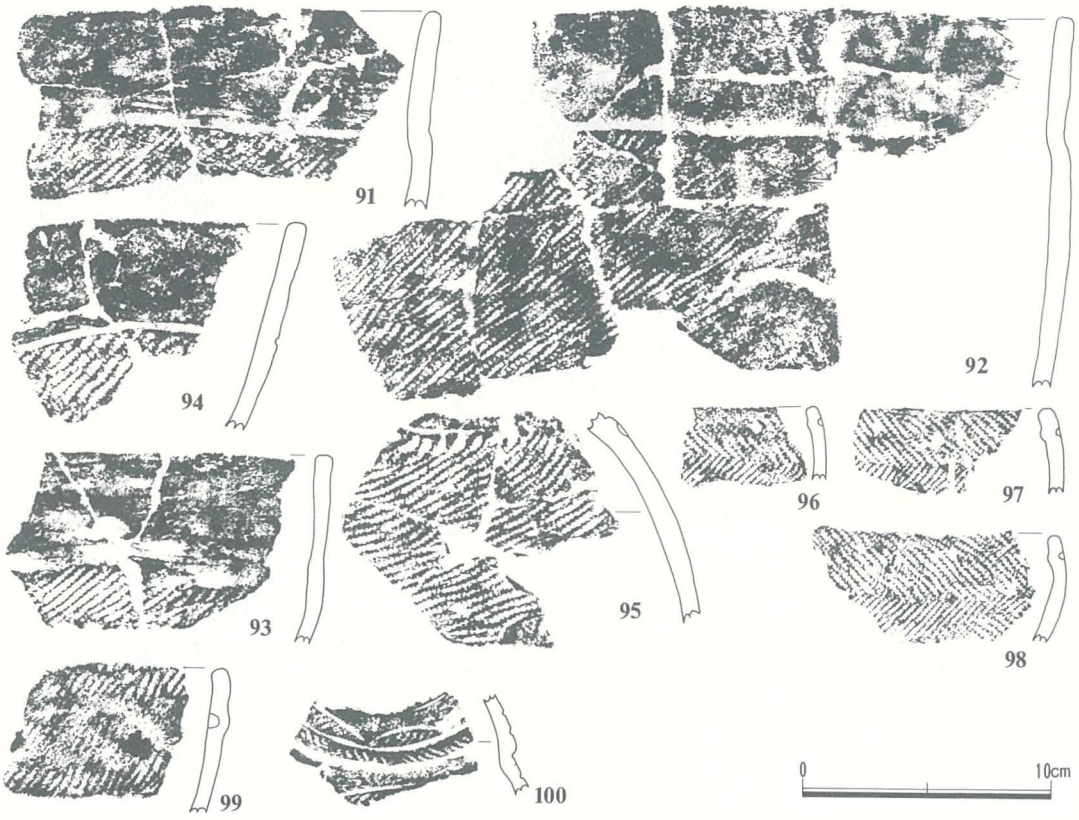


Fig.25　縄文時代後期の土器

52～73も鉈澗式土器に伴うものとみられる。いずれも平縁で縄文だけを施文している。口縁は、いずれも若干、内側に湾入する。52～63は、口唇部裏面が肥厚するものである。52～56，61～64，65～68，69～71，72・73は、それぞれ同一個体である。65～67には補修孔がみられる。

74～87も縄文のみを施文する土器である。前述のものと異なる点は、ほとんどが深鉢形を呈することであり、口唇部なども肥厚しない。

88～94は、口縁部が無文帯を形成し頸部以下は縄文のみを施文するものである。88・89，91～93は、それぞれ同一個体である。88～90，94は沈線によって、91～93は段によって頸部・胴部と口縁部を分けている。90の中央部には補修孔がみとめられる。88～90の焼成は、きわめて硬い。

95は、頸部に刺突列を施す壺形土器である。刺突列の上位にはラフな沈線がみられる。比較的器厚が厚く、胎土にはテンパーとして砂を多量に使用している。ＬＲ縄文を施文。

本類土器は、30個体前後出土している。磨消文・平行沈線文・短刻文等が多用される段階を後期中葉のものと考えた。鉈澗式を主体として、それよりも若干先行するものも包括している。

Ｉ群ｄ類

22は、短刻文・磨消文・沈線文に加えてＩＯの突瘤文を施すものである。Ｃ類土器に後続するとみられる、いわゆるエリモＢ式に類似する。焼成は硬く器厚が若干薄くなる。Ｅ11とＦ11GridのⅣ層から一括して出土した。

96～98は、口縁部にＯＩの突瘤文を施すものである。96～98は、同一個体である。焼成は脆い。堂林式土器の突瘤文は、ＩＯ型であることが知られているが本例は、ＯＩ型のそれである。後期の土器とみてまちがいないものと判断した。器形は浅鉢であろう。

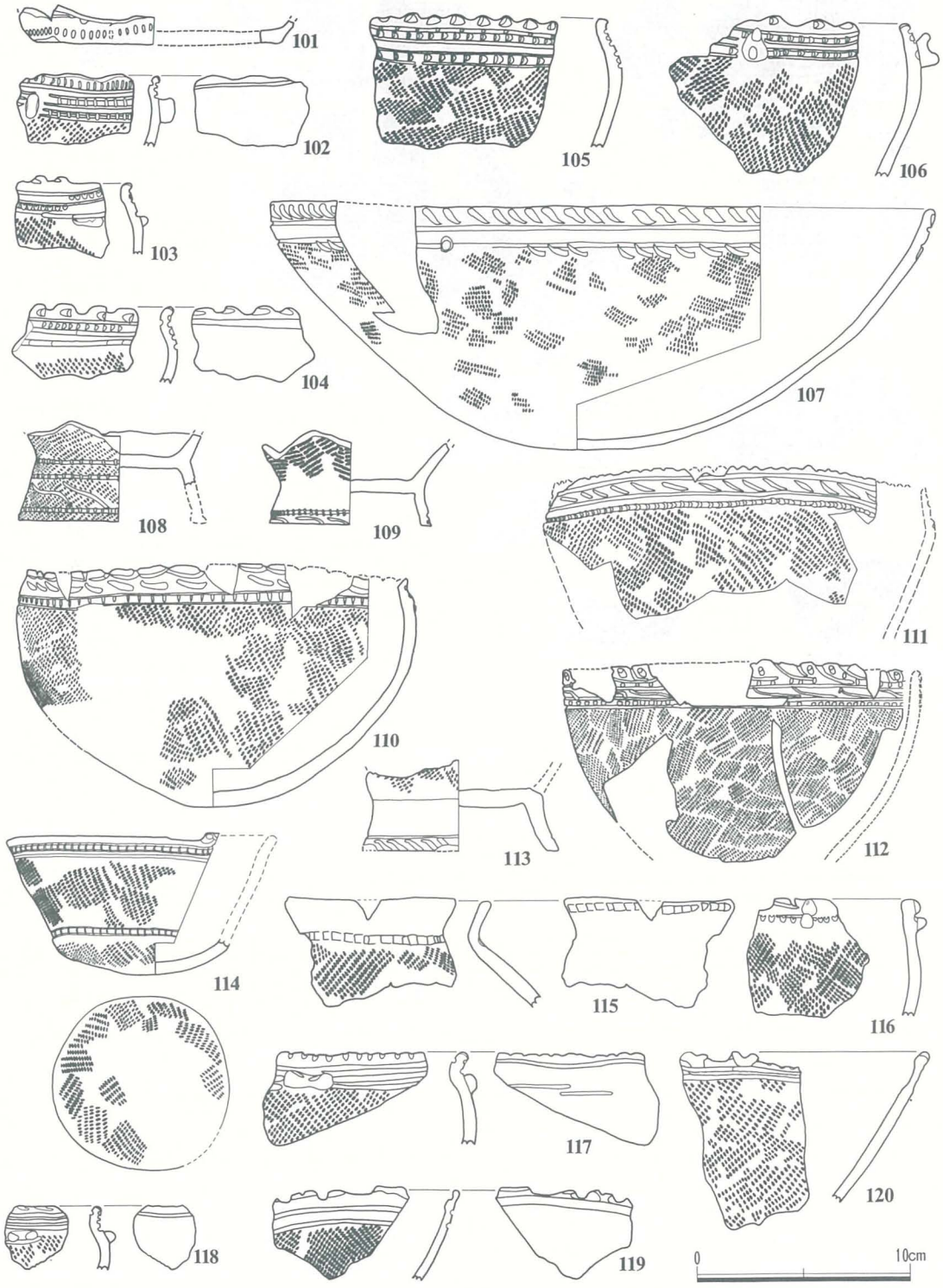


Fig.26　縄文時代晩期の土器

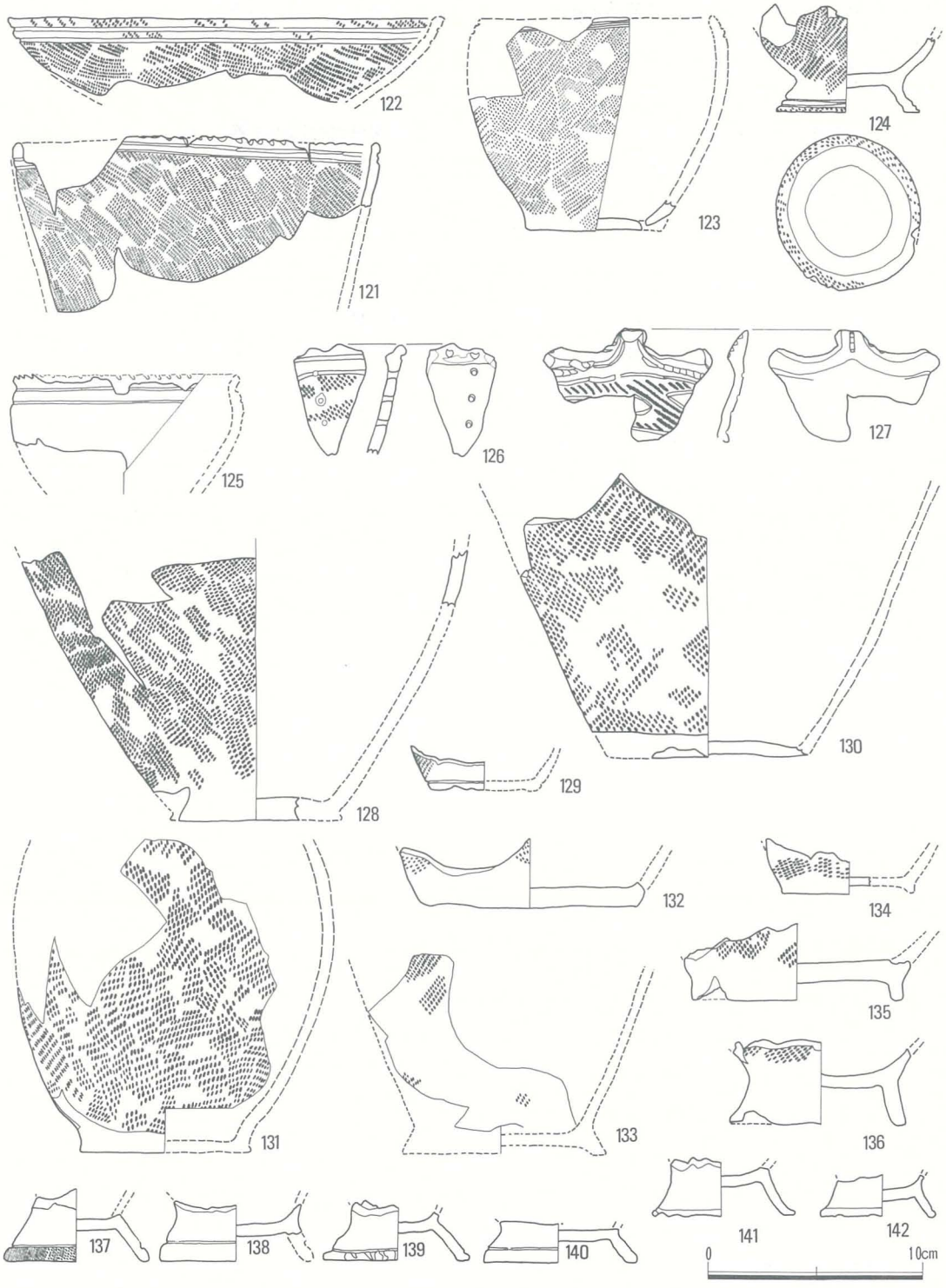


Fig.27　縄文時代晩期の土器

99は堂林式土器である。ＩＯの突瘤文を施し、地文はＬＲ縄文である。器表面は磨滅が顕著である。胎土には砂と小礫が多量に混入されている。器形は深鉢であろう。96～98とは、器形と突瘤の方向が全く異なる。

24～32，100は、いわゆる御殿山式等に類似する特徴を有している。24は、波状口縁を呈し５ヵ所程度の突起があるものらしい。25は、三叉文・磨消文等によって構成されている。Ｅ８GridⅣ層から出土した。26は、三叉文・磨消文に加えて、短刻文・貼瘤文が認められる注口土器である。口縁部と頸部に３列の短刻列が認められる。口縁部に４ヵ所、扁部に３ヵ所の貼瘤が附されている。27～32は、本類土器の注口部とみられる。26同様、いずれも男性のシンボルを模倣していると考えられる。26・27・30は、注口部先端，32は、中程，29は、基部に沈線が施されている。100は、該式土器の頸部破片である。

本類土器は、10個体前後出土している。Ｃ類土器に後続し、突瘤文・貼瘤文・三叉文等が加わり主体となる段階である。

縄文時代晩期の土器（Fig．26～32）

本遺跡出土の当該期の土器を概ね、以下のように２分類した。詳細については、分類別に後述する。

II群ａ類　縄文時代晩期前葉の土器
〃　ｂ類　　〃　　中葉　〃

II群ａ類

151は、高野遺跡Ⅴ群１類土器に同様なものがみられる。三叉文等を特徴とする沈線文によって施文されている。Ｄ４GridⅣ層から出土した。

101，152～164は、爪形文・刺突文等が主体となるものである。101・162，153・154，163・164

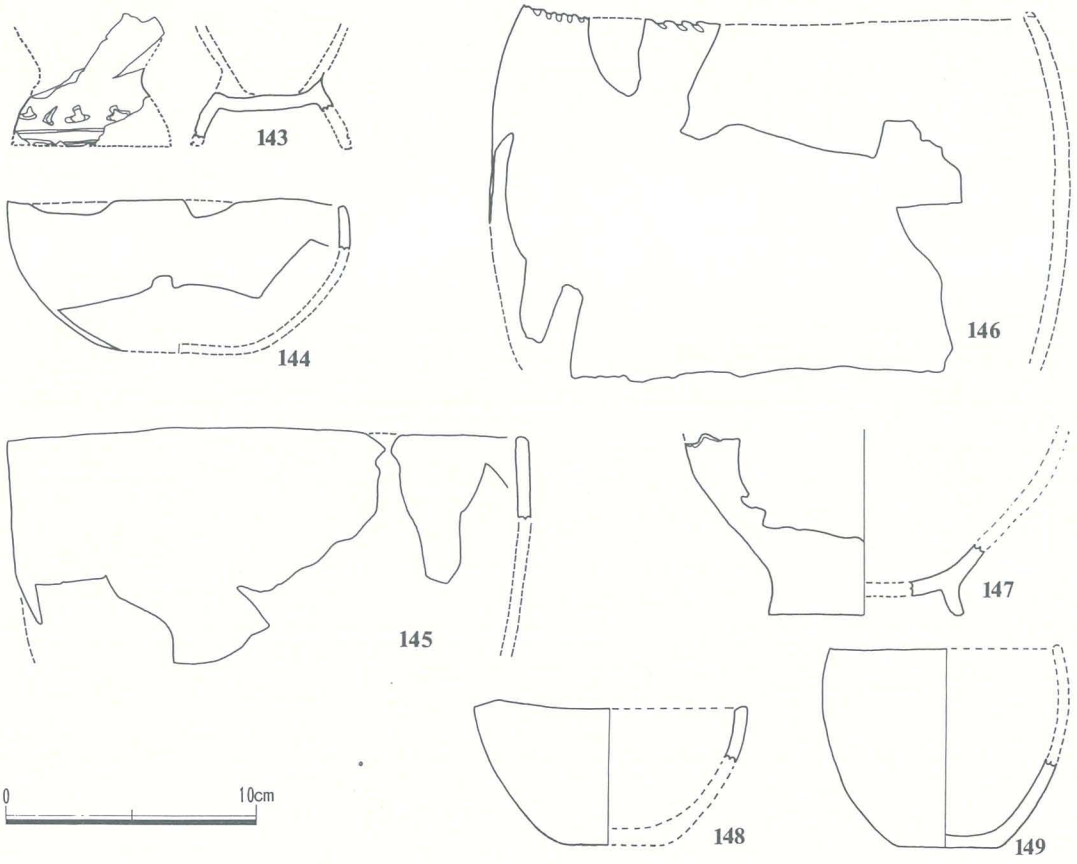


Fig.28　縄文時代晩期の土器

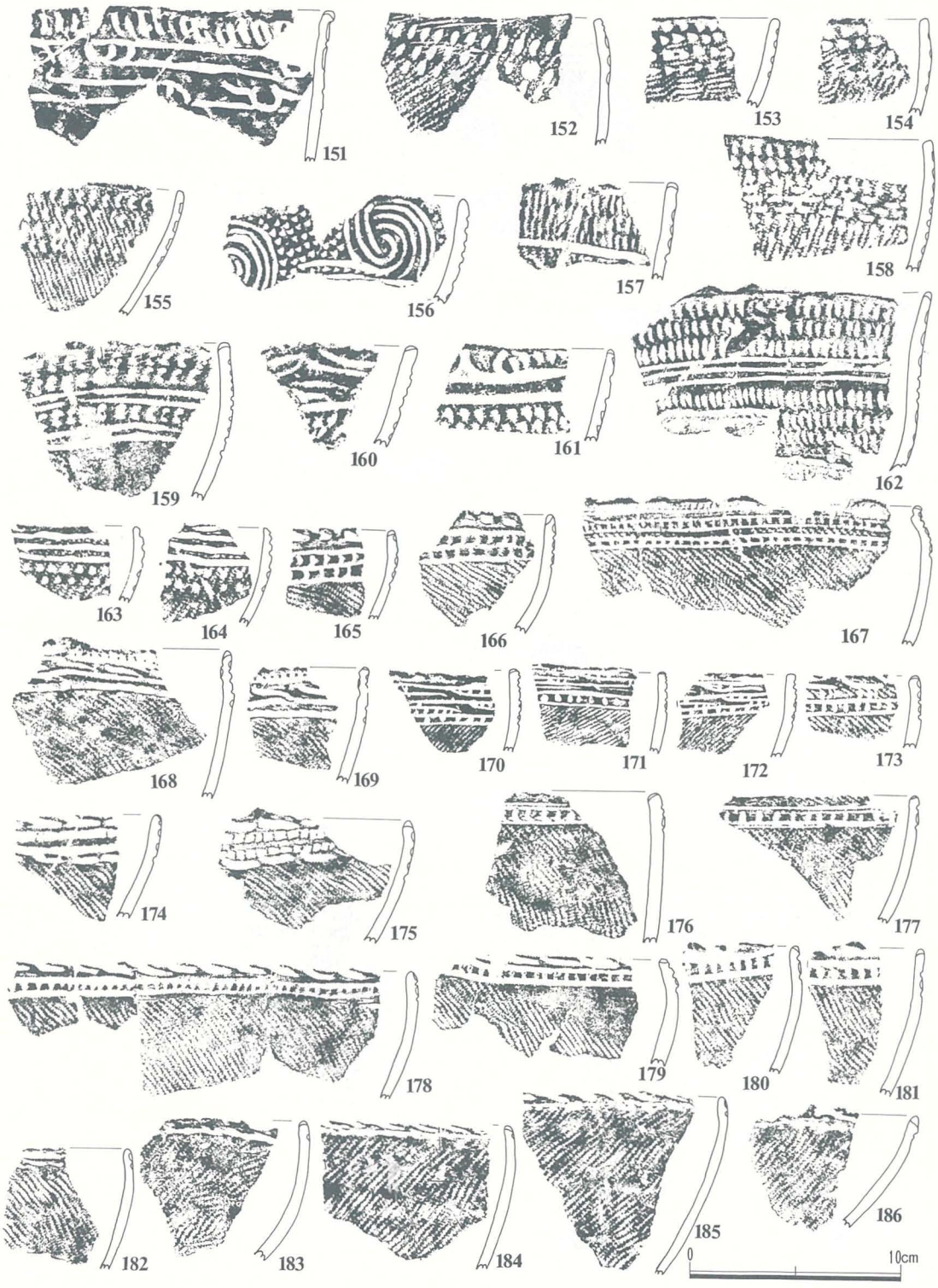


Fig.29　縄文時代晩期の土器

Fig.30　縄文時代晩期の土器

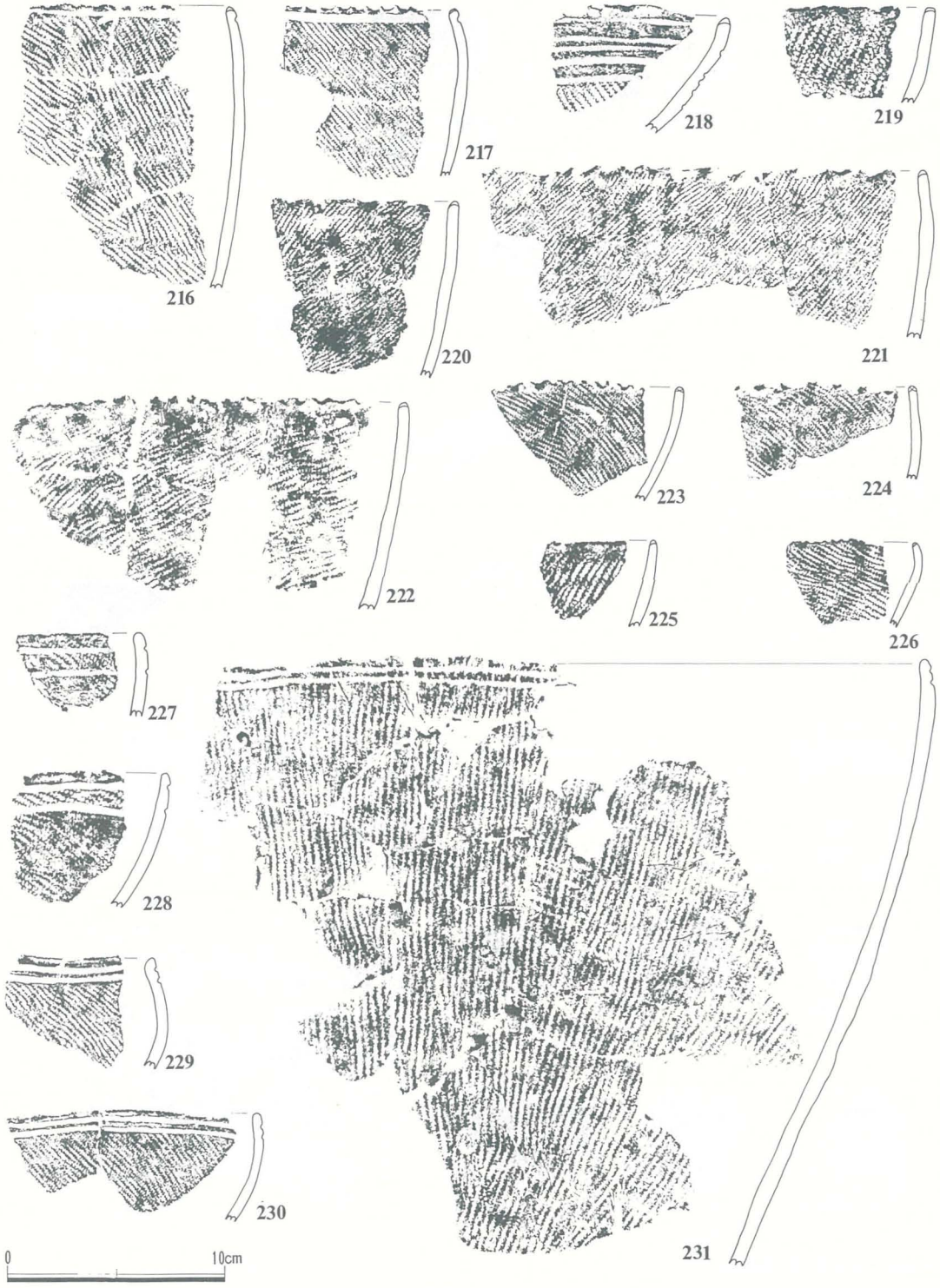


Fig.31　縄文時代晩期の土器

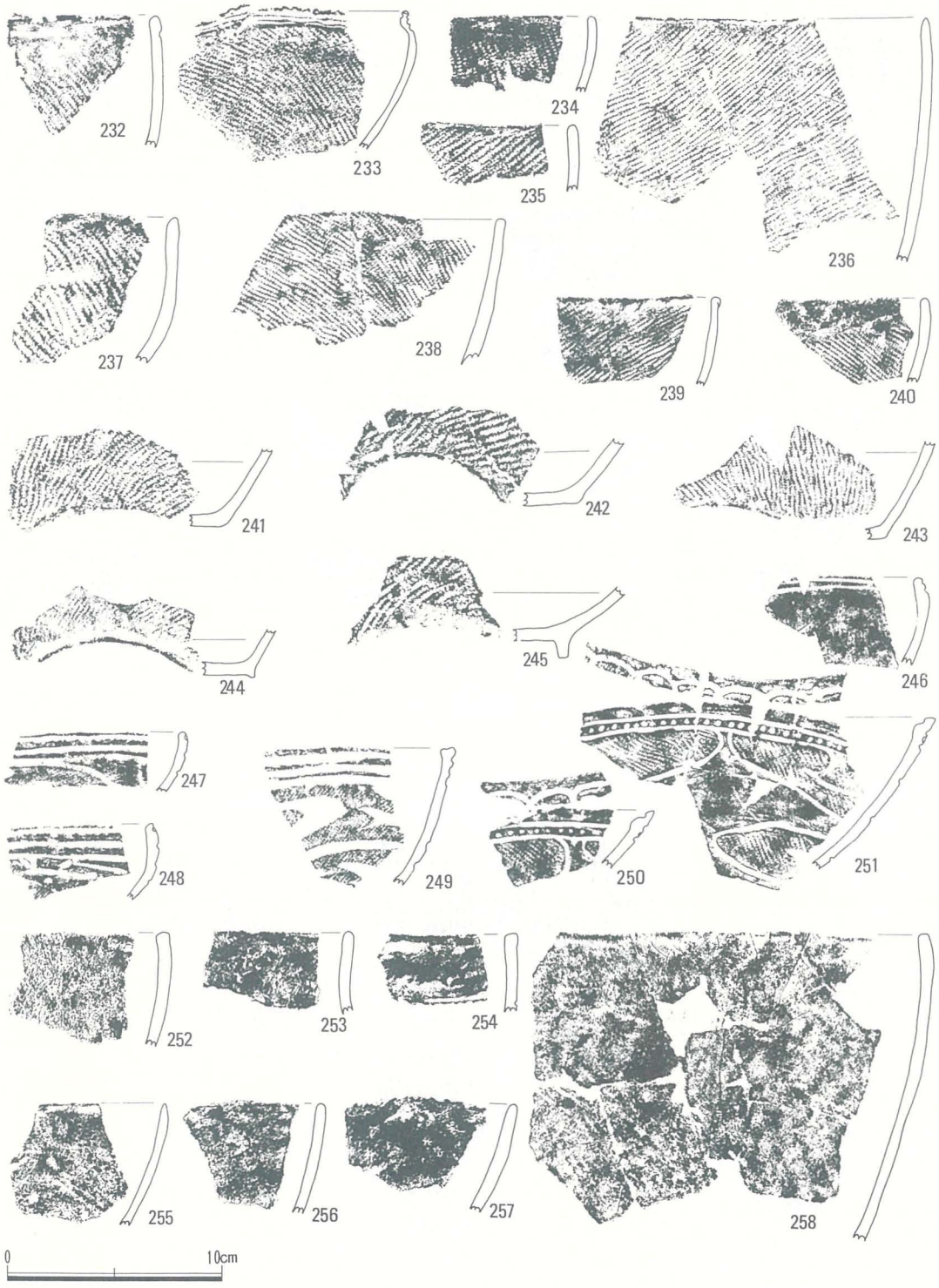


Fig.32　縄文時代晩期の土器

は、それぞれ同一個体とみられる。爪形文が主体となるものは、101・157・160・162である。他は、半截竹管状・楔形・方形等を主体とする刺突文である。沈線文も施文されているが、あくまでも爪形文・刺突文等が主体をなす。いわゆる上ノ国式で、高野遺跡Ⅴ群2類土器等にも同様な土器が認められる。

102～116，165～181，188～198は、平行沈線文を主体として爪形文・刺突文・短刻文等が加わるものである。102・103・106・116は、つまみ状の貼付を有する。このグループは、口唇部が波状を呈するものが多い。168・169，170～172，174・175，176・177，180・181，190～192は、それぞれ同一個体である。

182～187は、押引文を特徴とする土器である。ラフな刺突文とみることも可能である。182～185は、同一個体である。

101～116，152～198は、大洞ＢＣ式と大洞C_1式の一部に並行するものと考えられる。

219～226は、縄文だけが施されているものである。口唇部にはキザミが施され小さな波状を呈する。220・221，223・224が、それぞれ同一個体である。粗製土器でもあり、後出のものである可能性もあるが、爪形文・刺突文等を特徴とする土器と焼成や胎土などに共通点が認められるため本類土器とした。

234～240は、平縁で縄文だけが施文されているものである。いずれも口縁部破片である。

128～136，241～245は、いずれも縄文だけが施文されている底部破片である。128～132，241～243は、平底であるが、128・131は若干張り出す器形である。133～135，244・245は揚げ底であり、136は台付である。

本類土器として分類したものの中には、晩期前葉の土器として適切ではないものも含まれているかもしれない。いわゆる上ノ国式については、不明な点が多く、編年上の位置付けも明確ではない。

本遺跡出土の縄文時代晩期の土器の主体は、爪形文・刺突文・短刻文・沈線文等を多用するものである。Fig・26・29のように、いわゆる上ノ国式土器から大洞C_1式並行の土器への文様変遷をある程度追うことができたのではないかと考えている。

Ⅱ群ｂ類

117～121，199～218は、平行沈線文が主体となる土器である。口唇部には、さまざまなキザミが施され波状口縁を呈している。117・118には、ツマミ状の貼付がなされている。119・120・205・206・208・214・215・218等は、浅鉢ないしは台付であろう。大洞C_2式並行のものでも後出のもののように思われる。札苅遺跡等でも多数出土している。200～202，203・204，205・206，211・212は、それぞれ同一個体である。

122・123・227～231は、平行沈線文を特徴とし口縁部がわずかに内湾するものである。大津遺跡第8群土器や大洞C_2式の一部に並行するものとみられる。

125・246は、沈線文のみによる土器である。125は台付，246は浅鉢であるかもしれない。

137～143は、台付土器の底部である。137～140，143には沈線が、141・142には段がつく。137・139にはＬＲ縄文が底部下端に施文されている。139の沈線文の下位には、Ｂ状の突起が附されている。143は、透しの入る台である。美沢川流域の遺跡や御殿山遺跡から出土している朱漆塗の櫛の透し文様に良く似ているように思われる。

247～251は、いずれも浅鉢とみられる。刺突文・沈線文・雲形文等を特徴とする。247～249は朱塗の土器である。247・248，250・251は、それぞれ同一個体である。250・251は口唇部が肥厚し肥厚部裏面に波状の沈線が施されている。247～249は、大洞C_2式に並行するものとみられる。250・251は、模倣した北海道的な土器であろう。道央部等に出土例が多いように思われる。

144・145・148・149，252～258は、平縁の無文土器である。254だけは、沈線が下部に施文されている。144・148は浅鉢であり、145・149・258は深鉢とみられる。256・257は同一個体である。

これらの無文土器が本類に分類されるか否かは不明である。

いわゆる亀ヶ岡式系土器の編年は、精製土器によってなされているのが一般的である。したがって、粗製土器の変遷については不明確であるといえよう。

Ⅱ群土器を概ね二分類したのは、精粗の差を型式差としてとらえる場合があってはならないということが常に頭にあったからでもある。それが、

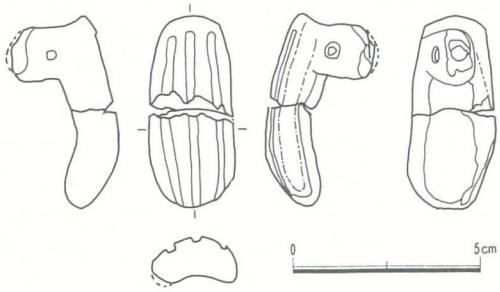


Fig.33　新村4遺跡出土のスタンプ状土製品

このような不明瞭な分類になってしまった原因のひとつでもある。筆者の勉強不足もあり、ここでは詳細な分類をさけた。今後の良好な資料の増加と研究の進展に期待したい。　（宮）

C．土製品

スタンプ状土製品が１点だけ出土した。完形品ではない。半折しており中央部と茎部をわずかに欠いている。版部（印刻面）の大きさは、50㎜×24㎜×11㎜で版面から茎部先端までの長さは、(24)㎜，重さは、(16.8) ｇである。茎部には直径３㎜程の孔が版部面に沿って貫通している。版部は湾曲しており版部裏面は無文で、指先で擦ったかのように窪んでいる。版部の文様は、図のように３本の平行する沈線文のみが施文されているにすぎない。版部の長軸を基本として真中の沈線の左右は、シンメトリーに構成されている。これは多くの当該資料と同様である。

本遺跡出土のものは、茎部が端部側に寄っており、茎部が中央部にあるものよりは、若干後出のもののように考えられる。E13GridⅣ層から出土した。当該資料に伴出したと考えられる土器は、Fig.20－22で、いわゆるエリモＢ式であり、縄文時代後期後葉でも古手のものとみられる。（宮）

d．石器・石核・剥片等

本遺跡より出土した石器は、土器に伴出したものであり、時代は縄文時代後期、あるいは縄文時代晩期に相当する。

(1)　石器の総数

出土した遺構外の石器、および自然礫の総数は1,832点で、その内訳はFig.34に示すとおりである。さらに、包含層における割合を円グラフに表わしている。

(2)　石器の分布

包含層における石器の垂直分布は、Ⅱ・Ⅲ，Ⅳ層に多く、Ⅴ層は少ない。土器の出土層位などを考え合わせると、前者は後・晩期、後者は後期の石器と考えてよさそうである。

包含層の石器の水平分布については、各グリッド¼分割、礫石器を除く石器のⅡ・Ⅲ，Ⅳ層とⅤ層の重量分布をFig.34に示した。重量分布によると、上位・下位の層両者ともに数ヵ所のブロックにより構成され、さらにⅡ・Ⅲ，Ⅳ層とⅤ層のものを重ね合わせると、後期と晩期のブロックは位置的に異なっている。

(3)　石器の接合資料

北東および南西の調査区のブロックより、接合資料が得られた。確かな帰属時期については、不明である。Fig.35は、接合資料の分布図，Fig.37－38は、接合資料である。

接合資料ａ

総数４，総重量185.6ｇ

石器など　剥片2(使用痕を残すもの１)，スクレーパー１，石核１

礫皮を残すもの　4

礫　頁岩

特徴　全体に暗い緑色を呈し、黄・紫色の縞模様がはいる。

まとめ：一方向からの加撃がなされている。剥片生産ばかりでなく、剥片石器も製作している。一部が抜けている。持ち去られたのであろうか（？）。

接合資料ｂ

総数４，総重量34.0ｇ

石器など　剥片４（使用痕を残すもの２）

礫皮を残すもの　4

礫　頁岩

特徴　全体に暗褐色を呈し、一部に茶色の縞模様がはいる。

まとめ：一方向から加撃がなされている。剥片石器や石核がない。持ち去られたのであろうか（？）。

接合資料Ｃ

総数３，総重量62.8ｇ

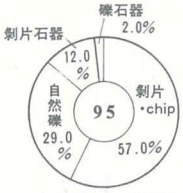
石器など　剥片２（使用痕のあるもの１），石核１

礫皮を残すもの　3

	I	II·III·IV	V	Total
剥片・chip	476	450	54	980
剥片石器	41	85	11	137
礫 石 器	11	26	2	39
自 然 礫	196	452	28	676
Total	724	1013	95	1832

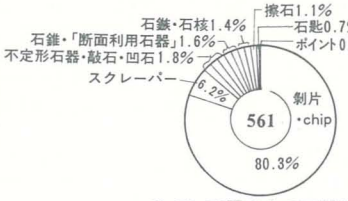
石器，自然礫各層出土点数

II・III，IV層出土の頻度

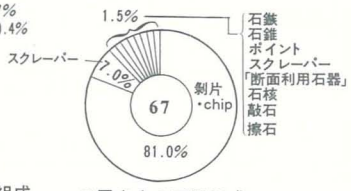


V層出土の頻度

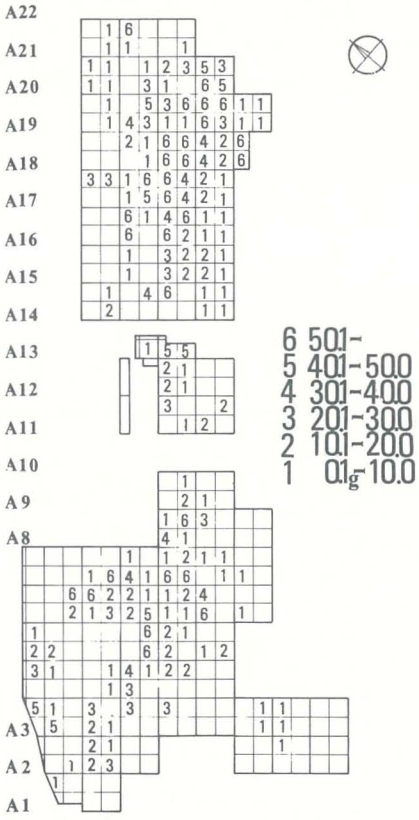
II・III，IV，V層出土の頻度



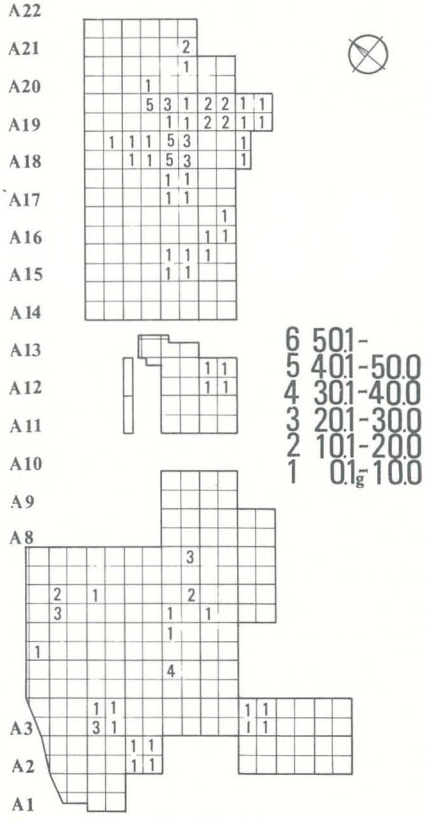
II・III，IV層出土の石器組成



V層出土の石器組成



II・III，IV層出土重量分布



V層出土重量分布

Fig.34　新村4遺跡出土の石器総数，剥片等の重量分布

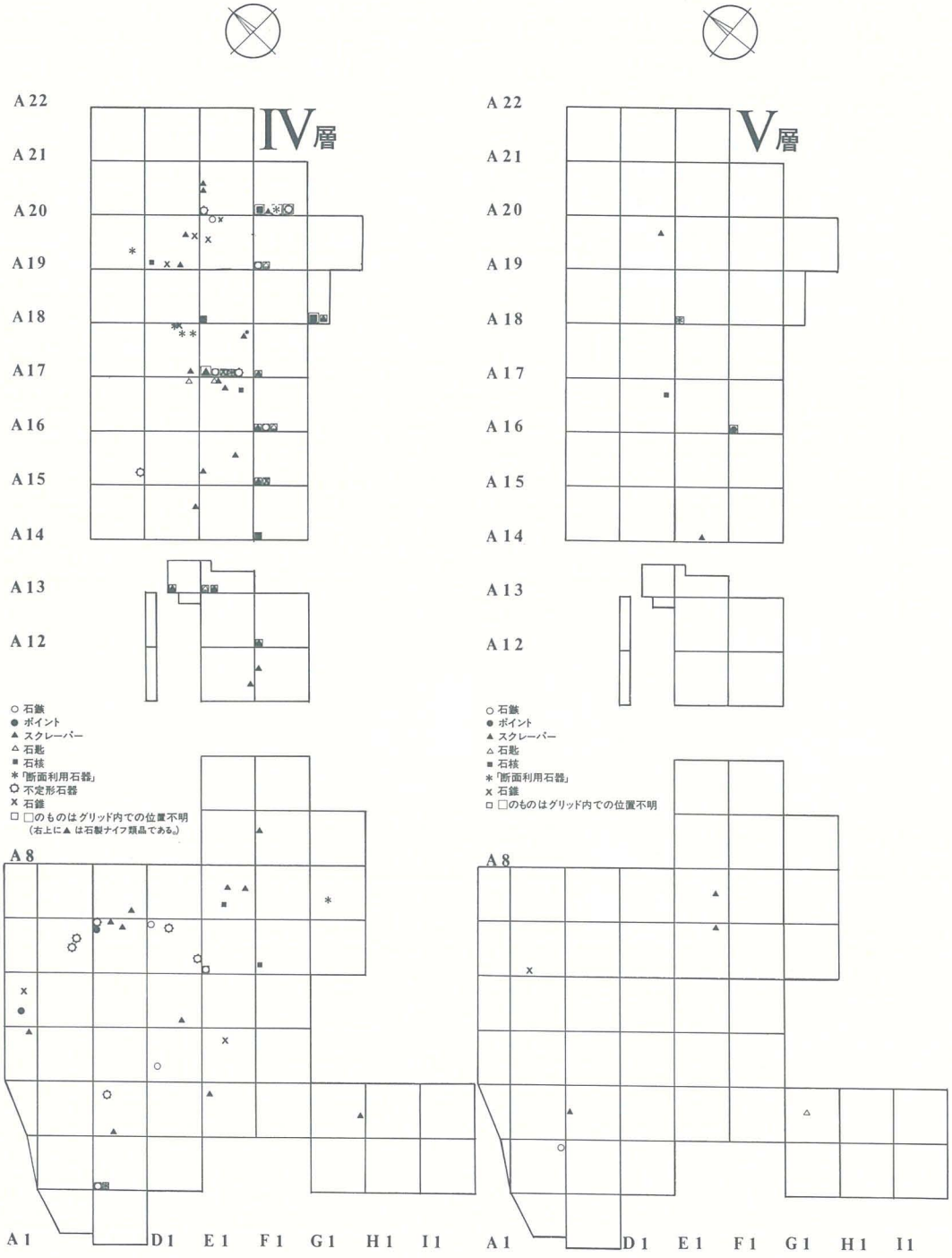


Fig.35　剝片石器の分布

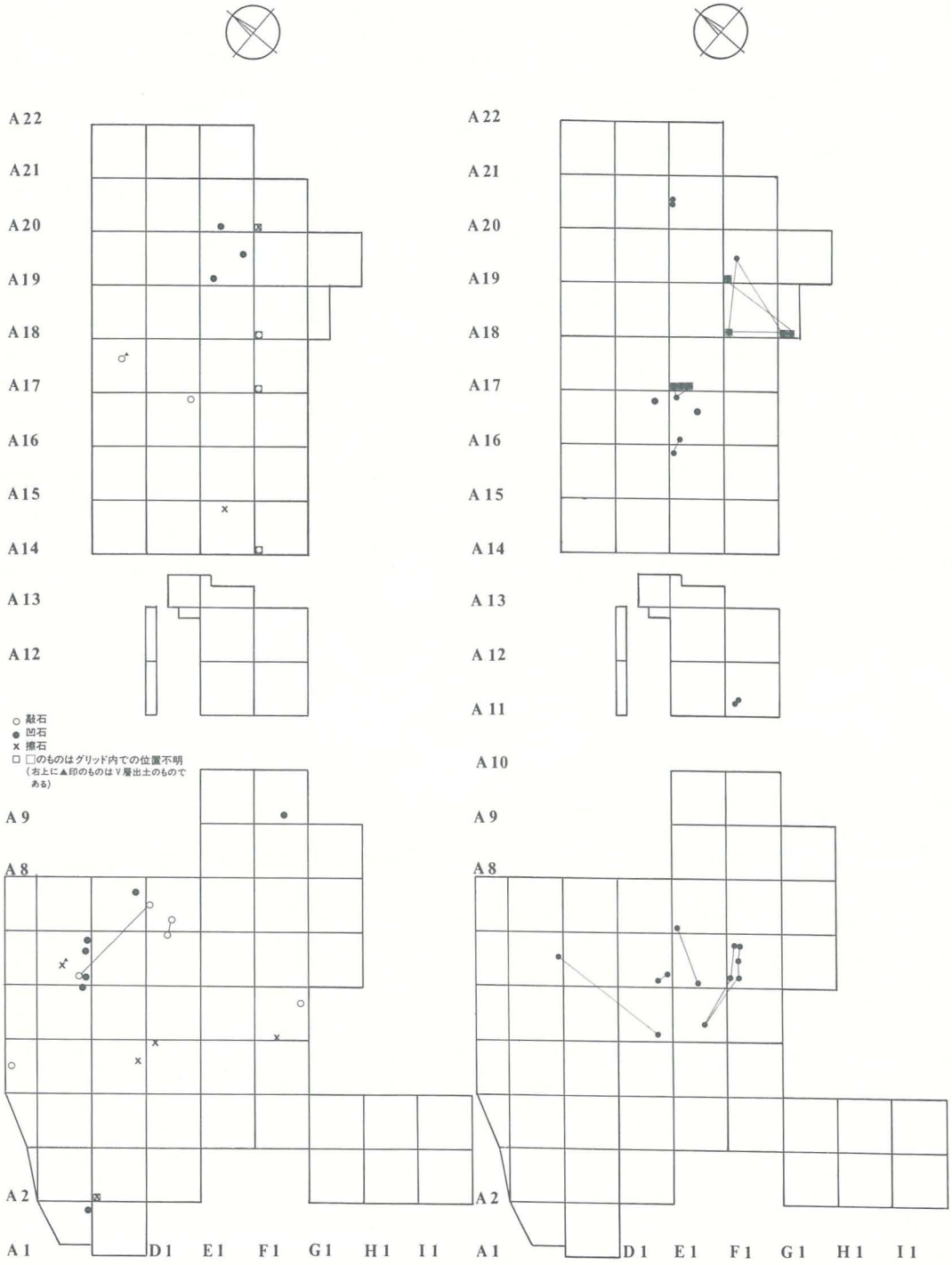


Fig.36　礫石器と剥片接合資料の分布

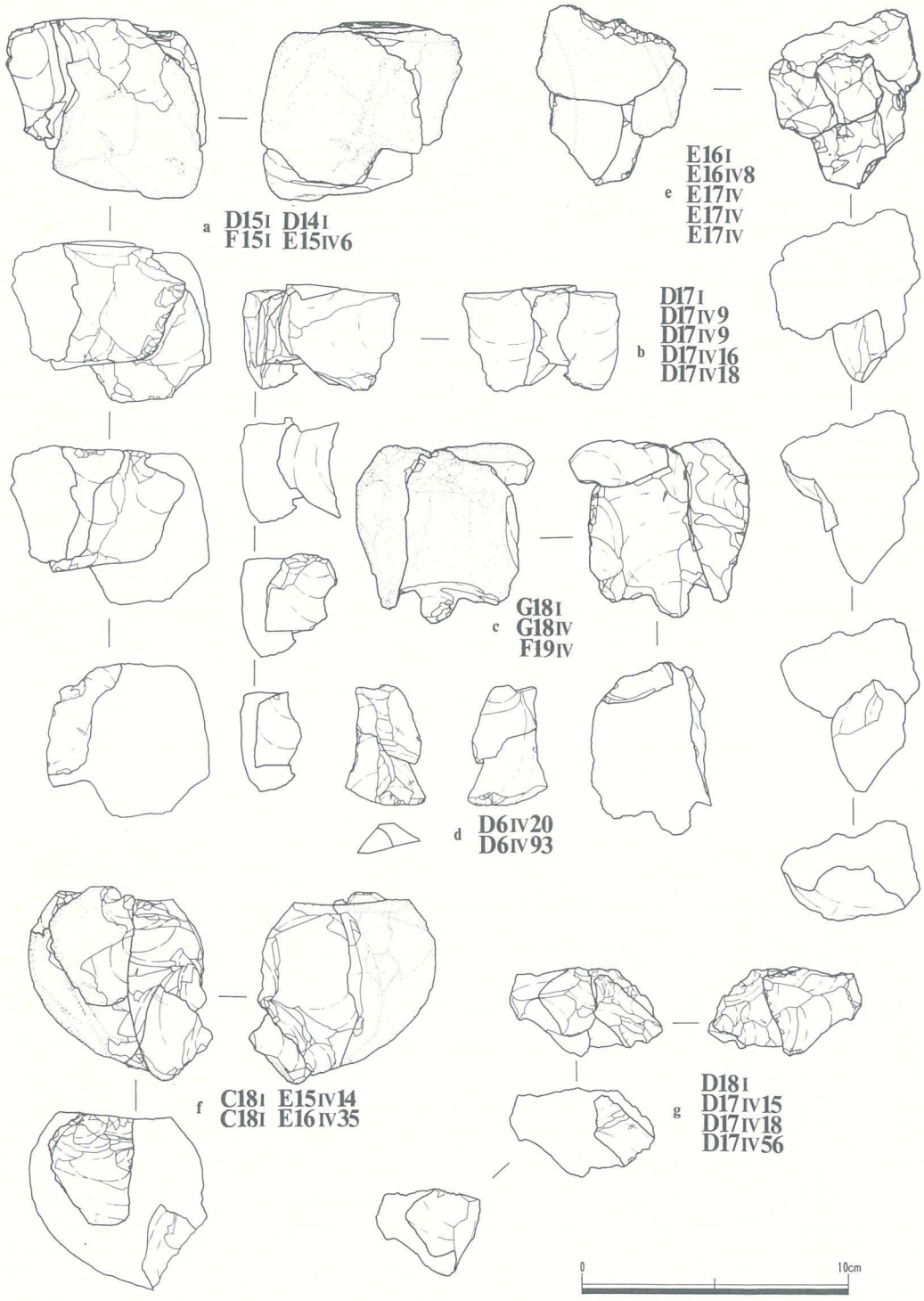

a D15I D14I
F15I E15IV6
e E16I
E16IV8
E17IV
E17IV
E17IV
b D17I
D17IV9
D17IV9
D17IV16
D17IV18
c G18I
G18IV
F19IV
d D6IV20
D6IV93
f C18I E15IV14
C18I E16IV35
g D18I
D17IV15
D17IV18
D17IV56
0
10cm

Fig.37　接合資料（1）

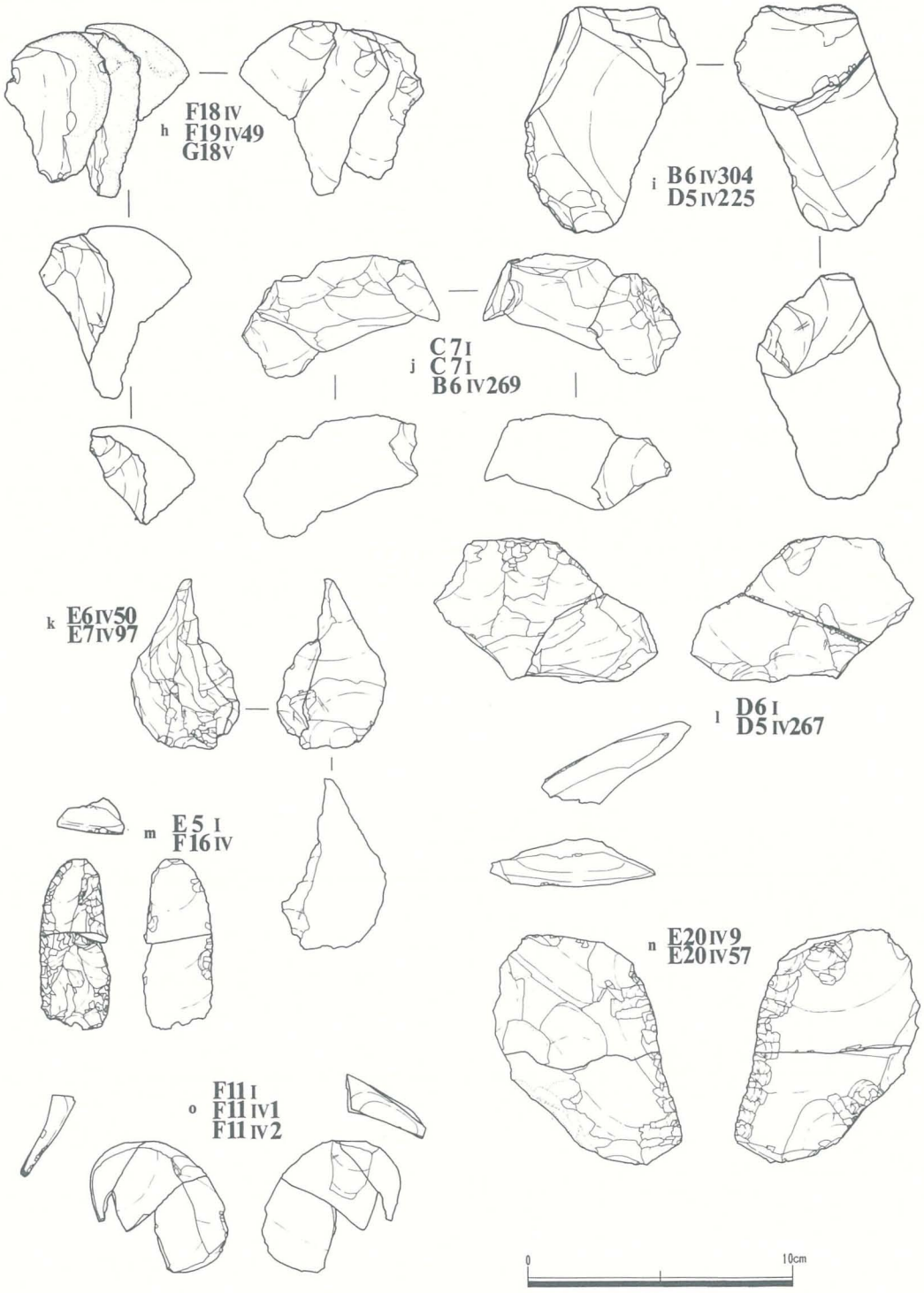

h F18 IV
F19 IV49
G18 V
i B6 IV304
D5 IV225
j C7 I
C7 I
B6 IV269
k E6 IV50
E7 IV97
l D6 I
D5 IV267
m E5 I
F16 IV
n E20 IV9
E20 IV57
o F11 I
F11 IV1
F11 IV2
0
10cm

Fig.38　接合資料 (2)

礫　頁岩
特徴　全体に黄灰色・灰色を呈する。
まとめ：ほぼ周縁全体に加撃がなされている。

接合資料d

総数２，総重量15.5ｇ
石器など　剥片２（小リタッチのあるもの１，使用痕のあるもの１）
礫皮を残すもの　０
礫　頁岩
特徴　全体に暗褐色を呈し、一部に茶色の縞模様がはいる。接合資料ｂと同一母岩であろうか（？）。
まとめ：石器の製作時における破損のようである。

接合資料e

総数５，総重量50.0ｇ
石器など　剥片２（使用痕のあるもの２），不定形石器２，石核１
礫皮を残すもの　５
礫　頁岩
特徴　全体に褐色・灰褐色を呈し、暗褐色の縞模様がはいる。
まとめ：多方向からの加撃がなされている。剥片生産ばかりではなく、剥片石器も製作している。その他の剥片は、持ち去られたのであろうか（？）。

接合資料f

総数４，総重量227.2　ｇ
石器など　剥片３，石核１
礫皮を残すもの　４
礫　頁岩
特徴　全体に黄褐色・暗褐色を呈する。
まとめ：多方向からの加撃がなされている。剥片生産を示すもので、他の剥片は持ち去られたのであろうか（？）。

接合資料g

総数４，総重量36.0ｇ
石器など　剥片３（使用痕のあるもの３），石核１
礫皮を残すもの　０
礫　頁岩
特徴　全体に暗褐色を呈し、灰褐色の縞模様がはいる。
まとめ：多方向からの加撃がなされている。剥片生産を示すもので、他の剥片は、持ち去られたのであろうか（？）。

接合資料h

総数３　総重量132.0　ｇ
石器など　剥片３（使用痕のあるもの２）
礫皮を残すもの　３
礫　頁岩
特徴　全体に黄褐色・灰色を呈し、２～３本のスジがはいる。
まとめ：一方向からの加撃がなされている。剥片石器・石核は、持ち去られたのであろうか（？）。

接合資料i

総数２，総重量86.6ｇ
石器など　剥片１（小リタッチのあるもの１），スクレーパー１
礫皮を残すもの　２
礫　（？）
特徴　全体に暗灰青色を呈する。
まとめ：剥離面で接合している。石核は、持ち去られたのであろうか（？）。

接合資料j

総数３，総重量42.1ｇ
石器など　剥片３（小リタッチのあるもの１）
礫皮の残るもの　０
礫　（？）
特徴　全体に暗灰青色を呈する。
まとめ：剥離面で接合している。石核は、持ち去られたのであろうか（？）。

接合資料k

総数２，総重量42.2ｇ
石器など　剥片２（使用痕のあるもの１）
礫皮の残るもの　０
礫　頁岩
特徴　全体に灰褐色を呈する。
まとめ：剥離面で接合している。石核は、持ち去られたのであろうか（？）。

接合資料ｌ～ｏ

ｌ，ｏは剥片，ｍは箆状石器，ｎはスクレーパーである。折断したものか、欠損したものかは定かではないが、断面にて接合し、断面に小リタッチ、使用痕を有し、刃部は鈍角を呈するものである。石質は、いずれも頁岩である。

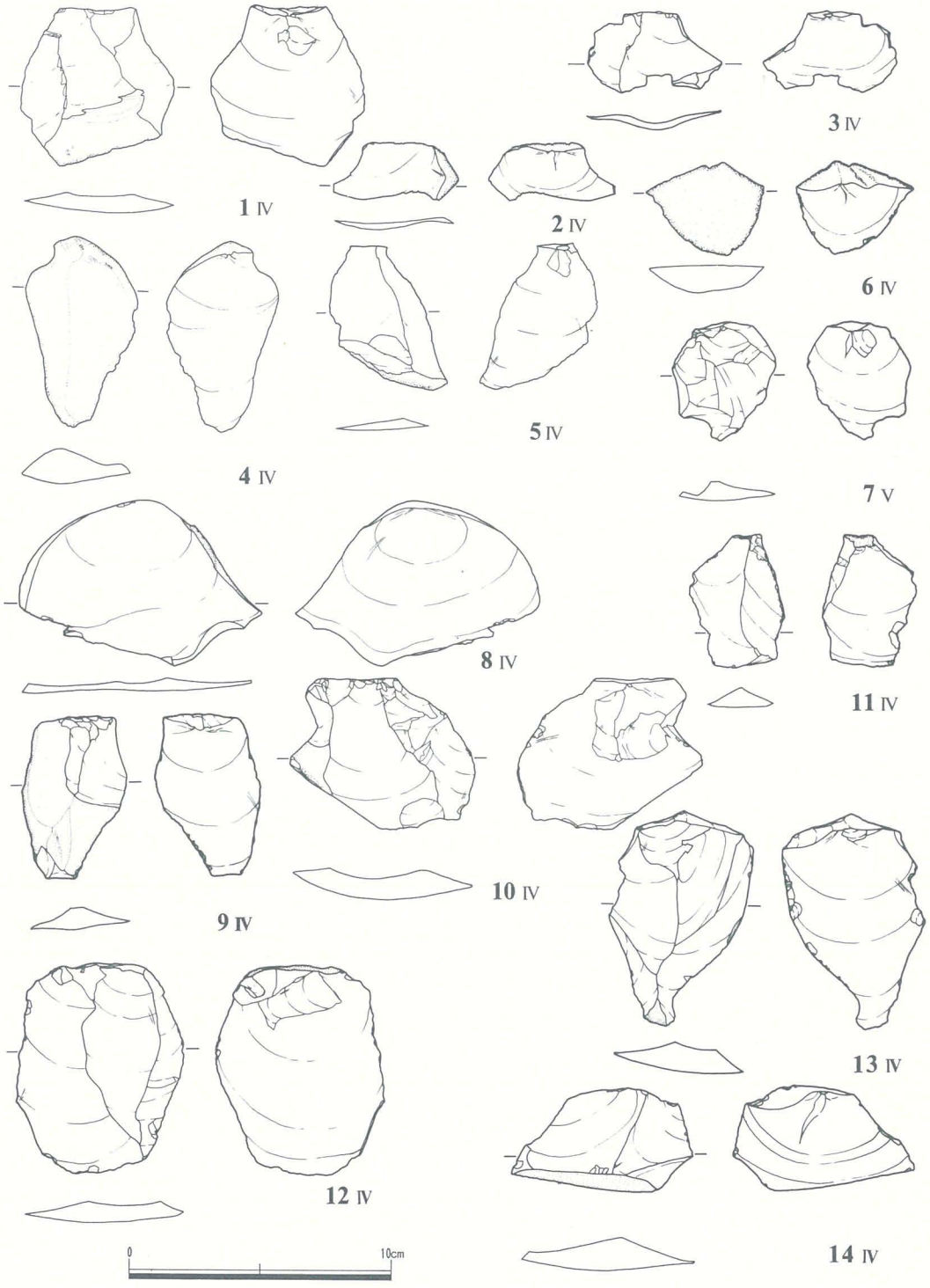

1 IV
2 IV
3 IV
4 IV
5 IV
6 IV
7 V
8 IV
9 IV
10 IV
11 IV
12 IV
13 IV
14 IV
0
10cm

Fig.39　剝　片

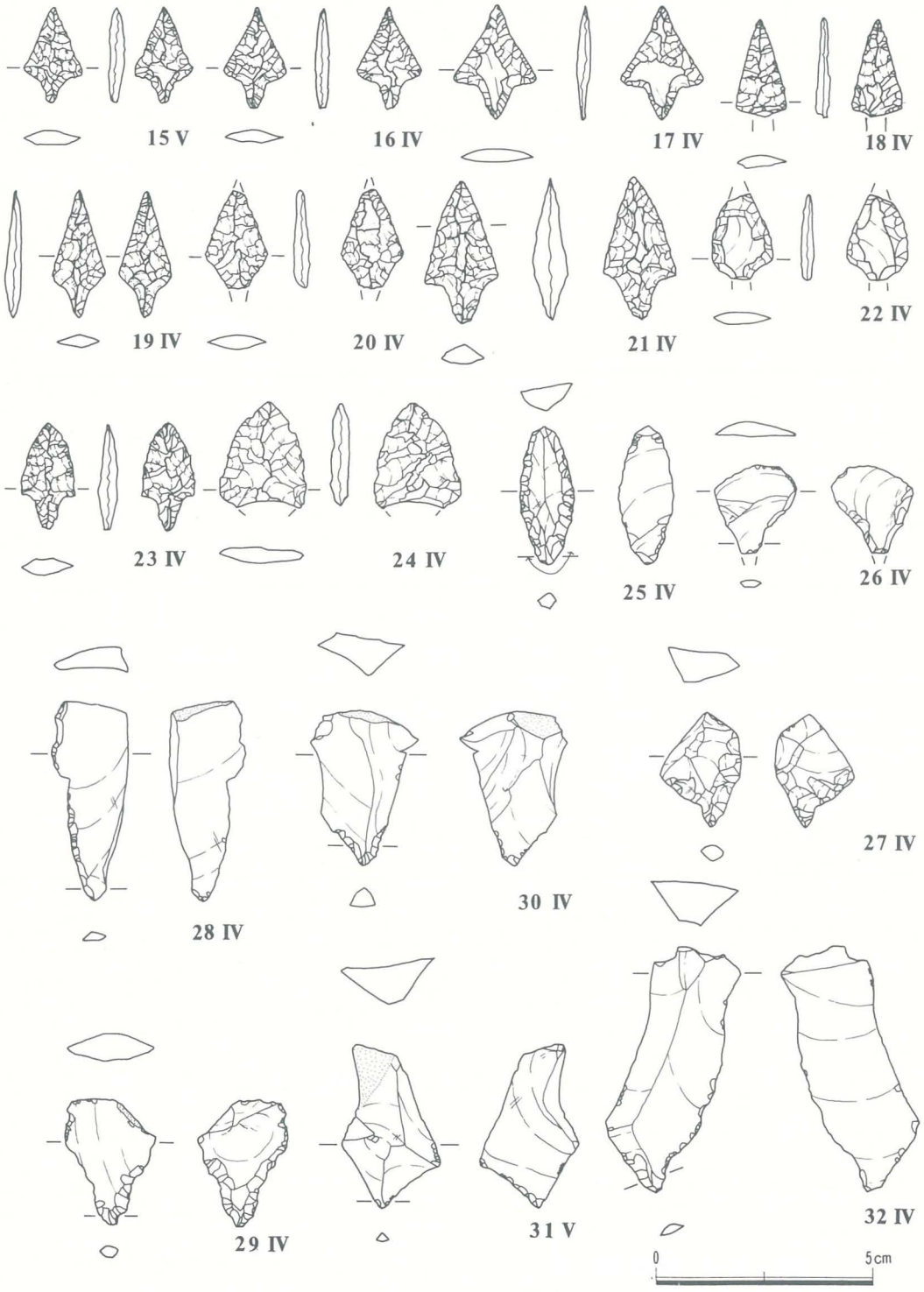

15 V
16 IV
17 IV
18 IV
19 IV
20 IV
21 IV
22 IV
23 IV
24 IV
25 IV
26 IV
27 IV
28 IV
29 IV
30 IV
31 V
32 IV
0
5cm

Fig.40　剝片石器(1)

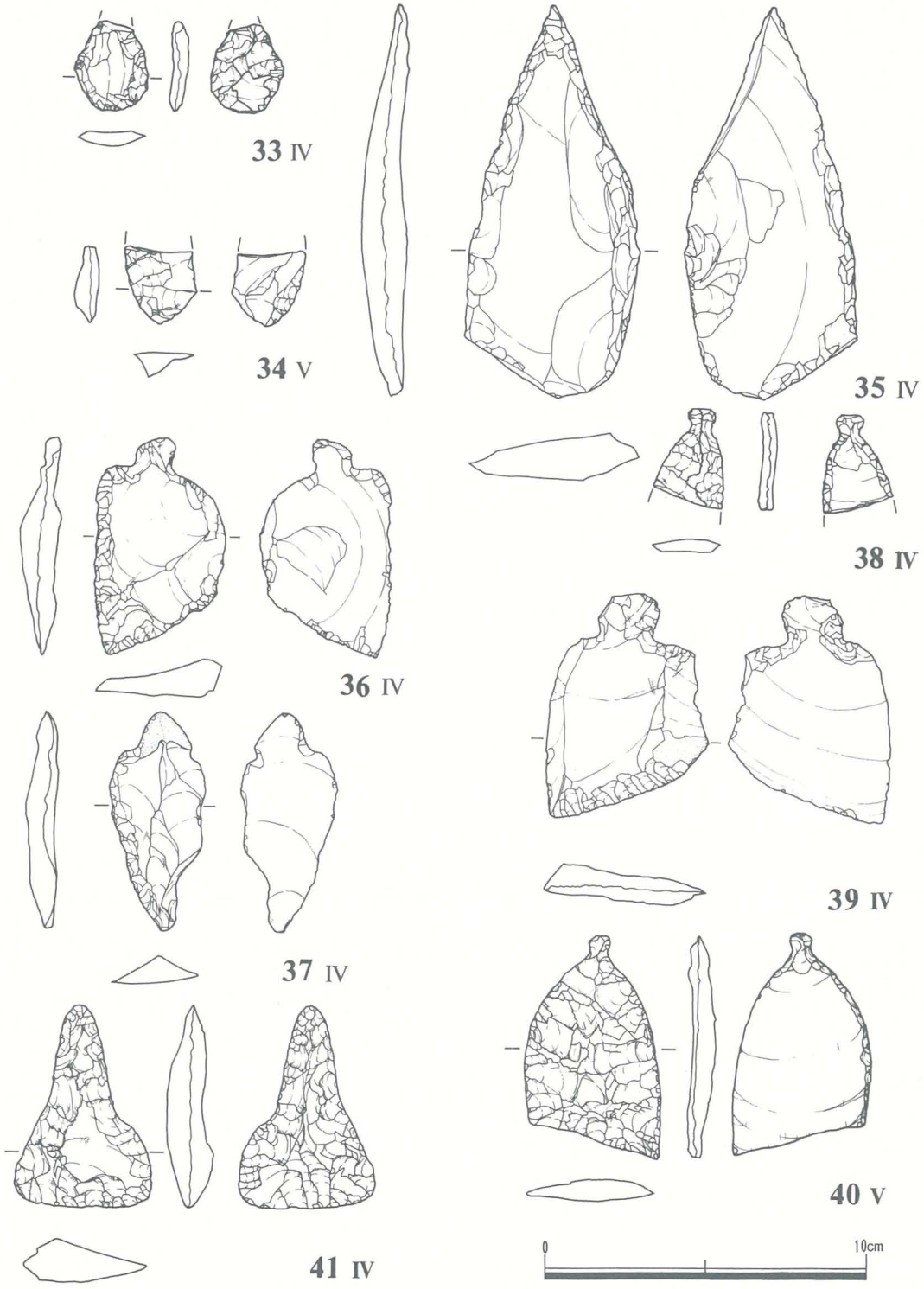


Fig.41　剝片石器(2)

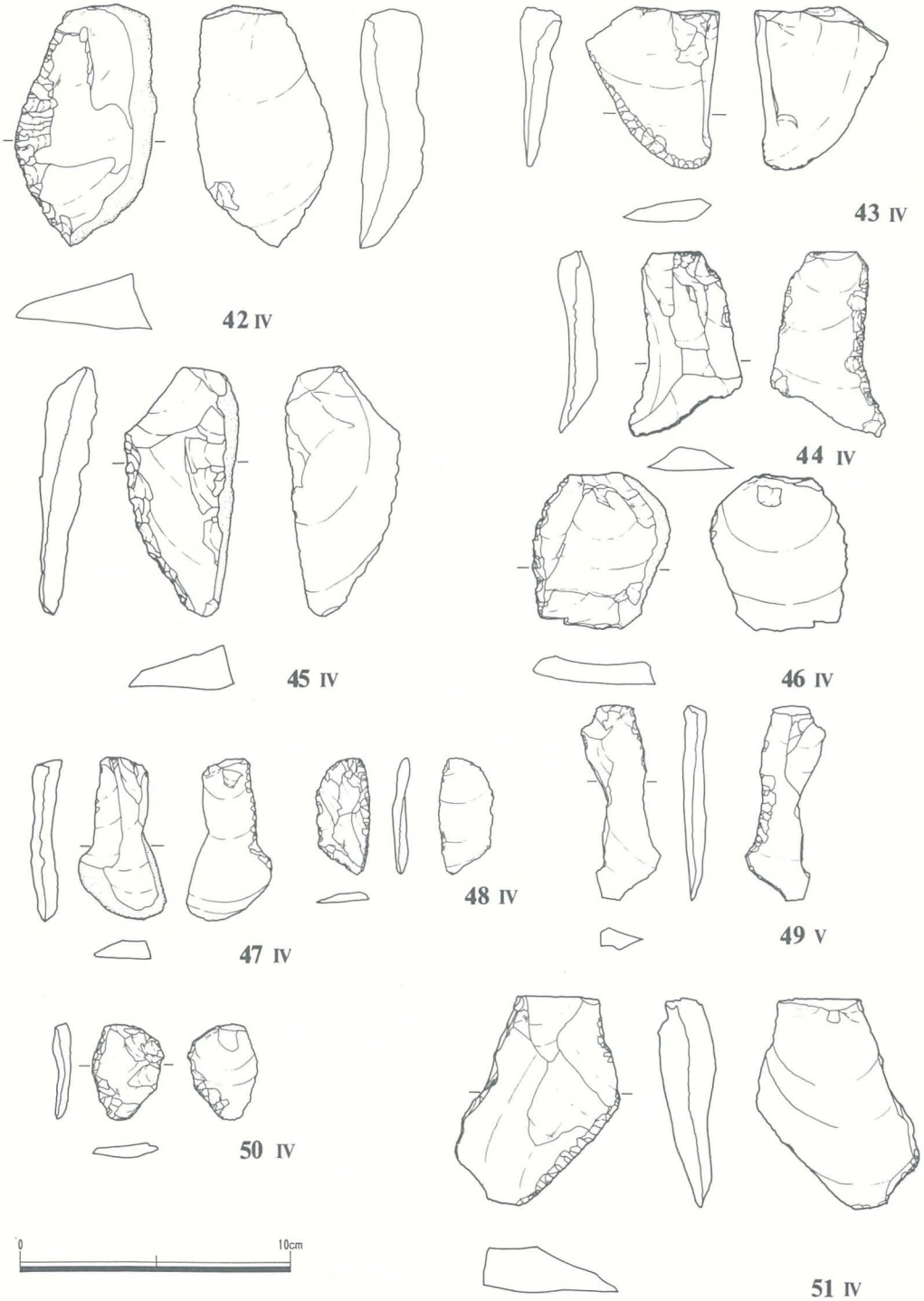


Fig.42　剝片石器（3）

(4) 石　器

二時期の土器が混在する場合もあり、一部を除き確実な石器の時期の特定は出来なかった。

尚、主な石器の分布をFig.35・36に示した。

Ⅱ・Ⅲ，Ⅳ層とⅤ層における石器の組成は、Fig.34に示すとおりで、似た組成を示し、剥片・chip，スクレーパー・・・の順に多く出土している。さらにFig.35の石器の分布をみると、石錐・「断面利用石器」は、北東側，不定形石器などは、南西側のブロックに片寄って出土していることがわかる。

① 剥　片

1～14は、剥片である。一般的には、縦長・横長・ノ字形の不定形剥片で、4はfirst flake，8～14は小リタッチ・使用痕を有する剥片である。石質は頁岩のものが圧倒的に多く、メノウ・黒曜石などが若干数ある。

② 石　鏃

15～24は、石鏃である。いずれも有茎鏃で、15～17は、側縁が幾分内湾，18～20は、側縁が直線的，21～23は、側縁に丸味をもち、15・17・20～22は、主要剥離面を残すものである。石質は、頁岩のものが多く、その他、黒曜石などがある。

③ 石　錐

25～32は、石錐である。25は柳葉形，26・28・29は先端部の長いもの，27・30～32は、先端部が短いもので、25は、尖頭部の磨滅が顕著である。石質は、頁岩のものが圧倒的に多く、その他、メノウのものがある。

④ ポイント

33～35は、ポイントである。いずれも基部と先端部の境界が明瞭で、一端が鋭利に作出されており、主要剥離面を残している。石質は、33・34が頁岩、35は不明である。

ポイントについては、刺突具として使用されたものか、ナイフとして使用されたものか定かではない。

⑤ 石　匙

36～40は、石匙である。36は、素材が横長剥片のもの，37～40は、縦長剥片のものである。ツマミの位置は、36が打面と直交する側，37が打面と逆方向，38～40は、打面側にある。石質は、全て頁岩である。

⑥ 石製ナイフ類品

41は、石製ナイフ類品である。形態は、撥形を呈し、両面とも丹念に二次加工が施され、打面の位置は、中軸に直交する側にある。石質は、頁岩である。

⑦ スクレーパー

42～59は、スクレーパーである。刃部の部位により、若干の分類を行なった。

a類：中軸に平行する一辺、あるいは二辺が刃部の場合（42～51）

いずれも縦長剥片を素材としており、42・45～47は、一部に礫皮を残す。

b類：中軸に直交する一辺、あるいは二辺が刃部の場合（52・53）

いずれも横長剥片を素材としており、53は一部に礫皮を残す。

c類：a・b類の複合の場合（54）

54は、縦長剥片を素材としており、一部に礫皮を残す。

d類：周縁、あるいは打面を除く縁辺が刃部の場合（55～59）

縦長・横長剥片を素材としており、56・58・59は、一部に礫皮を残す。

石質は、頁岩のものが圧倒的に多く、その他、メノウのものがある。

⑧ 不定形石器

60～64は、不定形石器である。60・62・64は、鋸歯状，61・63・65は、ノッチ状の刃部を有し、63は、一部に礫皮を残す。石質は、すべて頁岩である。

⑨ 「断面利用石器」

66～73は、「断面利用石器」である。所謂折断面、欠損面に二次加工・小リタッチ・使用痕を有するものである。67・69・70は、一部に礫皮を残す。石質は、すべて頁岩である。

なおFig.38のl～oは、接合資料である。

⑩ 石　核

74～79は石核で、78は接合資料である。74・75・77は、加撃の転移が頻繁，76・79は少なく、78は一方向からのみのもので、76・78は、横長剥片その他のものは、不定形剥片が剥取されている。石質は、頁岩のものが多く、その他黒曜石のものがある。

⑪ 礫剥片

102は、礫剥片である。包含層より敲石が出土

しており、敲石の使用により剝取したものとおもわれる。石質は、凝灰岩である。

⑫ 敲　石

82～90は、敲石，80・81は、素材礫で、86は、接合資料である。素材は、断面が扁平、あるいは、三角形などを呈する自然礫である。ダメージの部位により、若干の分類を行なった。

a類：一端あるいは、両端にダメージのある場合（80・89）

b類：一側縁、あるいは、二側縁にダメージのある場合（82・83）

c類：a・b類の複合の場合（85～87）

d類：敲石としての他に、凹石としての機能を合わせもっている場合（88・90）

敲石の石質は、安山岩のものが多く、その他、凝灰岩・玢岩のものなどがある。

⑬ 凹　石

91～100は凹石で、95は接合資料である。素材は、断面が扁平、あるいは、三角形などを呈する自然礫である。凹孔の数、その部位などにより若

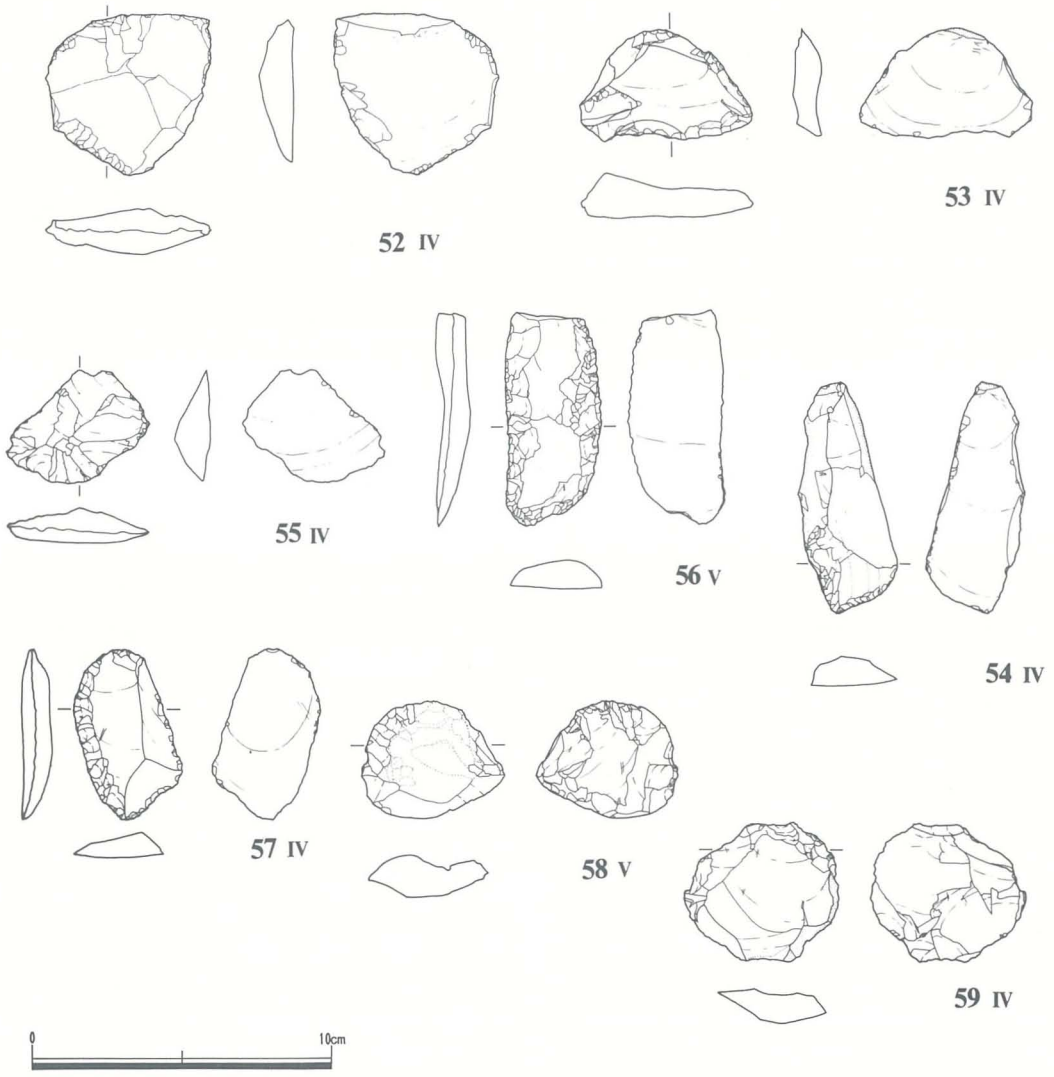


Fig.43　剝片石器（4）

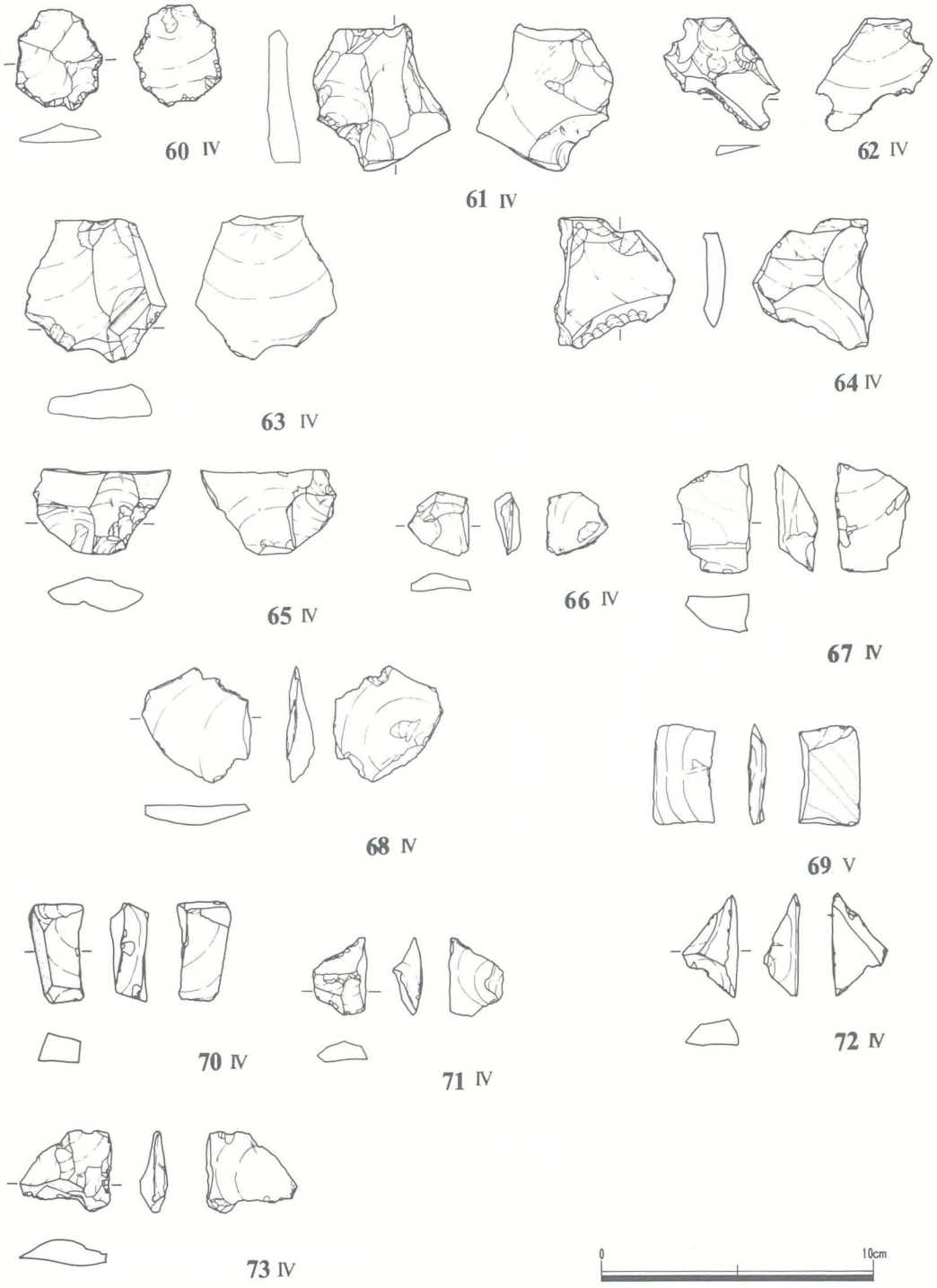
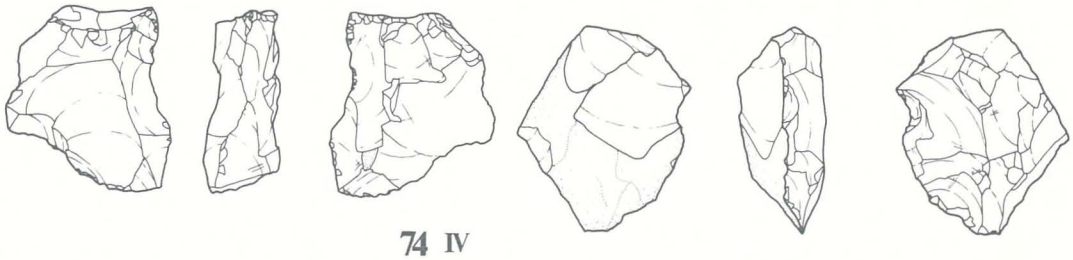
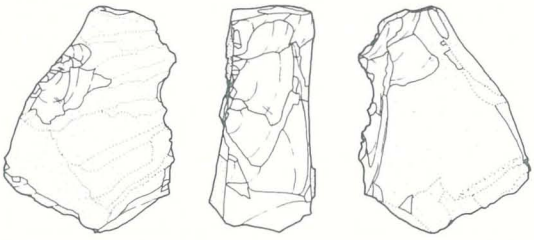

60 IV
61 IV
62 IV
63 IV
64 IV
65 IV
66 IV
67 IV
68 IV
69 V
70 IV
71 IV
72 IV
73 IV
0
10cm

Fig.44　剝片石器（5）

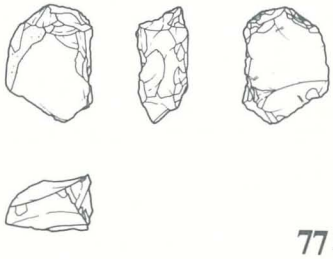


74 IV

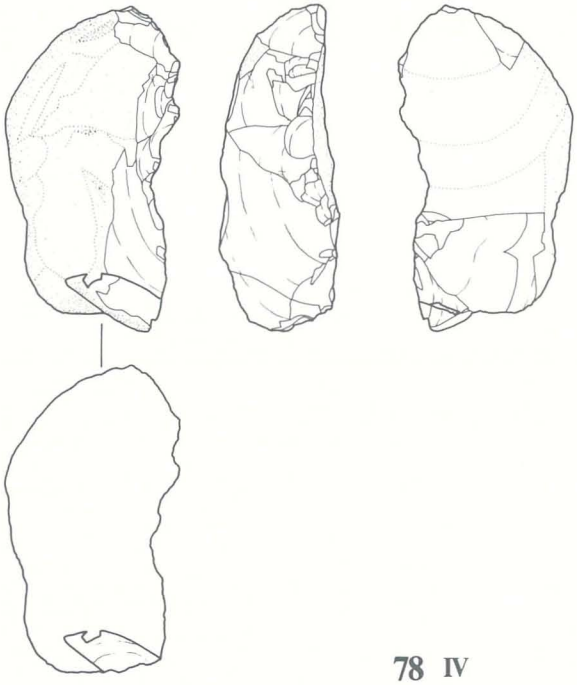
75 IV



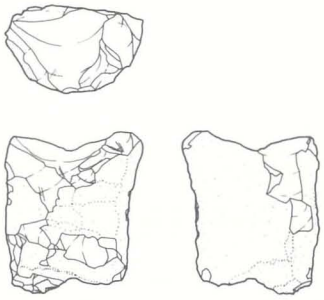
76 IV



77 IV



78 IV



79 V

Fig.45　石　核

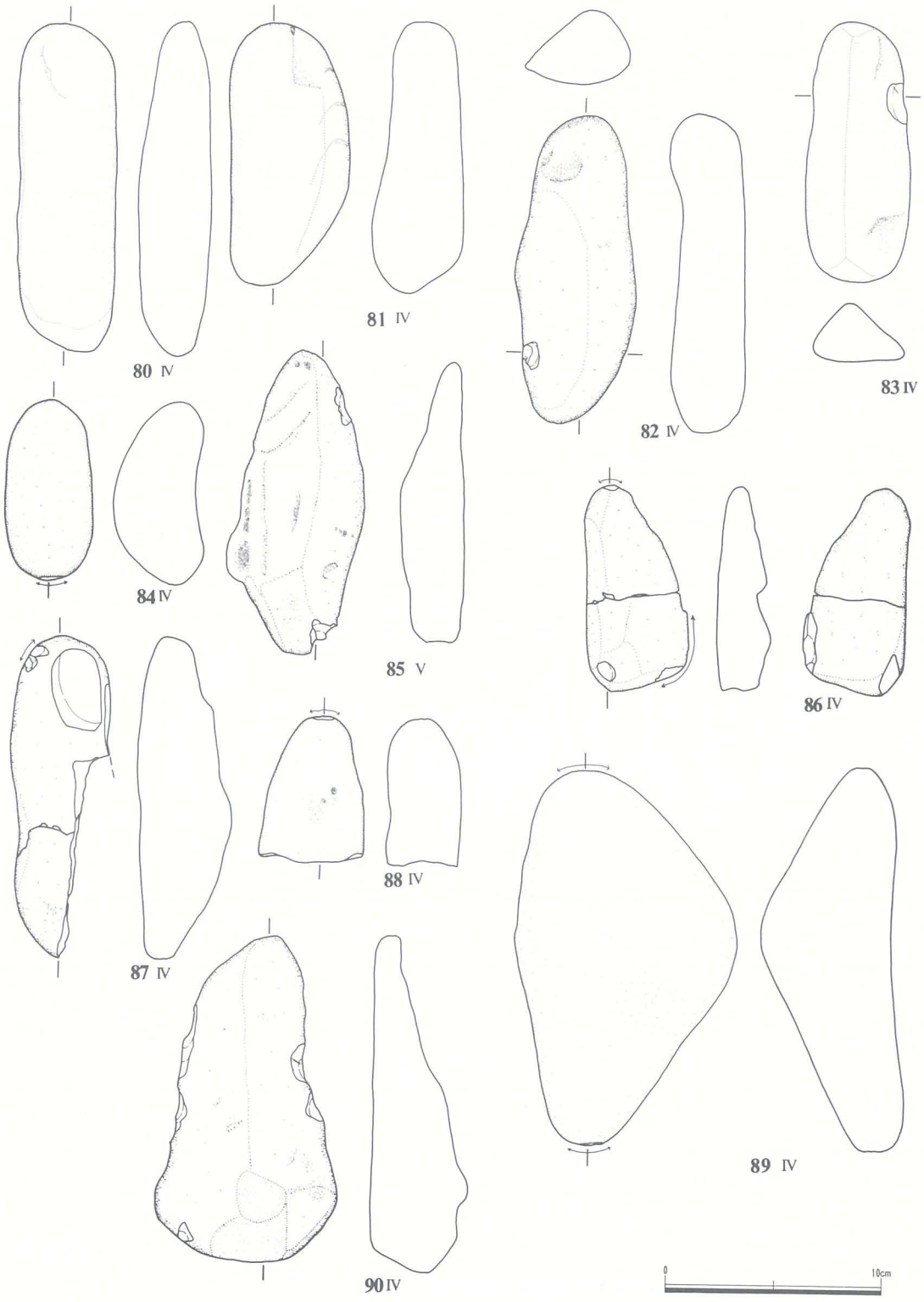


Fig.46　礫石器 (1)

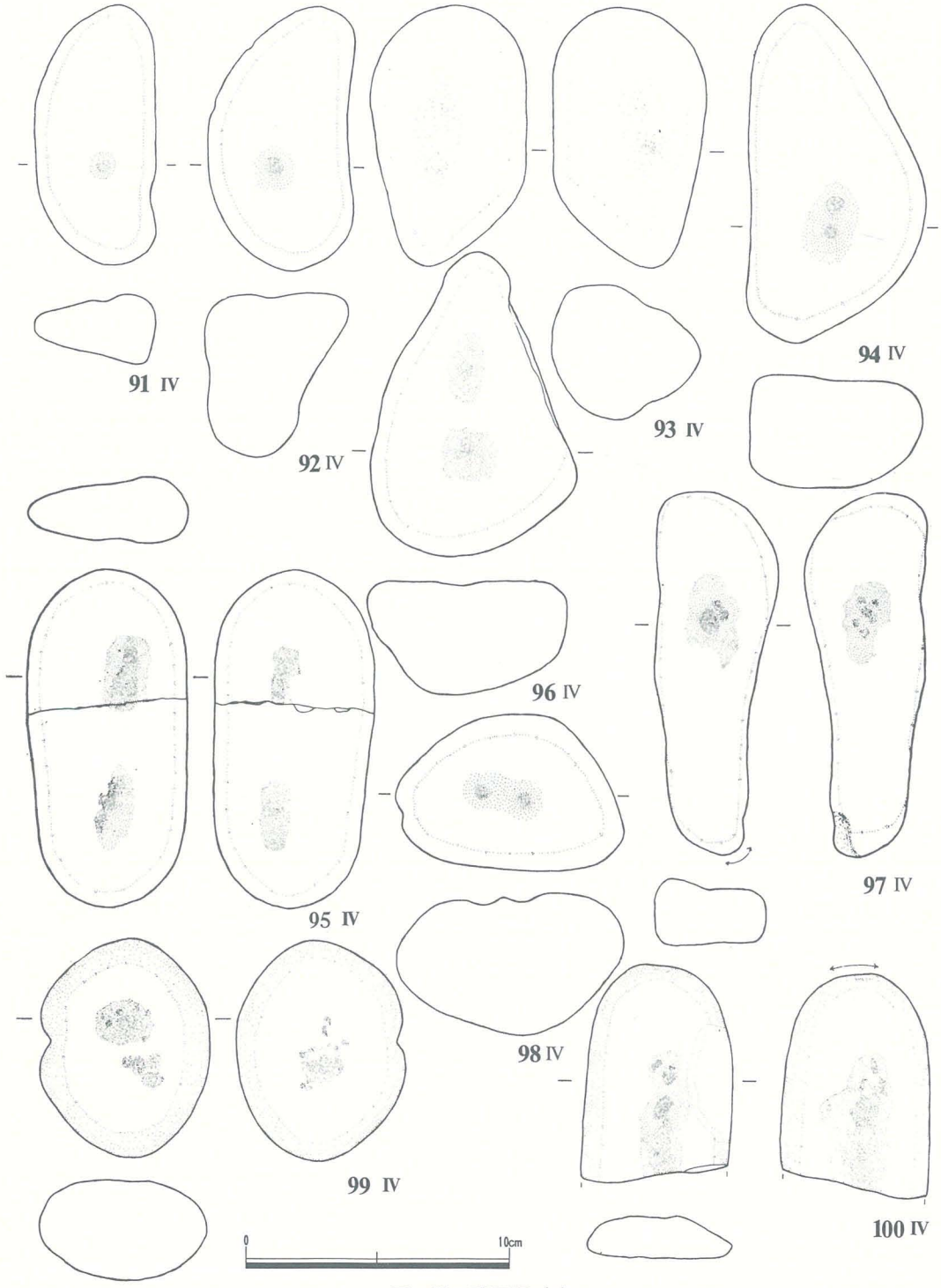


Fig.47　礫石器（2）

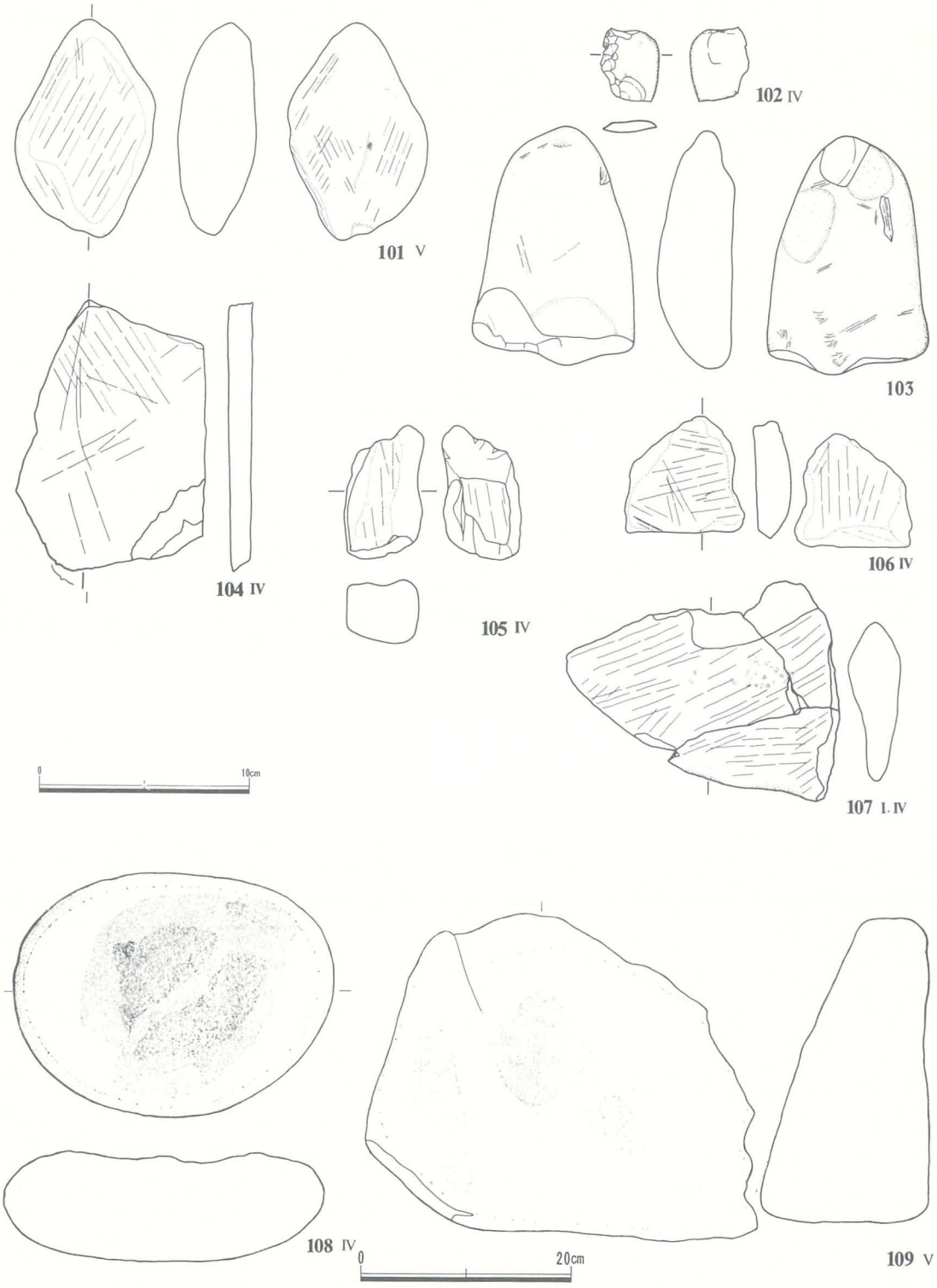

101 V
102 IV
103
104 IV
105 IV
106 IV
107 I.IV
108 IV
109 V
0
10cm
0
20cm

Fig.48　礫石器 (3)

干の分類を行なった。

a類：凹孔を一面のみに有する場合（91・92・94・96）

a'類：凹孔を二面に有する場合（93・95・98・99）

b類：凹孔を一面に1個のみ有する場合（91・92・94・97）

b'類：凹孔を一面に1個以上有する場合（93・96・98～100）

c類：凹石としての他に、敲石・擦石としての機能を合わせもっている場合（97・100）

凹石の石質は、玢岩のものが圧倒的に多く、その他(？)のものがある。

⑭ 擦　石

101～107は擦石で、104・107は接合資料である。素材は、断面が扁平、あるいは、四角形などの自然礫である。104は一面，101・103・105～107は、二面以上に擦痕を有するものである。

擦石の石質は、凝灰岩が多く、その他、軽石のものがある。

⑮ 台　石

108は、台石である。断面が扁平で大型の自然礫を素材とし、一面に大きな凹部をもっている。

台石の石質は、安山岩である。

⑯ 石　皿

109は、石皿である。断面が四角形で大型の自然礫を素材とし、一面に多方向の擦痕をもっている。

石質は、安山岩である。

包含層の石器以外に、第Ⅰ層より出土している石器も多くあり、前述の器種を除くもので図示はしていないが、異形石器，磨製石斧，北海道式石冠などがある。

異形石器は、刺股状を呈し、丹念に二次加工が施されており、石質は黒曜石である。磨製石斧は、やや小型であるが、刃部は蛤形を呈し、丹念に研磨されている。石冠については、比較的扁平な自然礫を素材とし、敲打により整形、底面に擦痕が認められる。（鈴木）

e．その他の出土遺物

a～dで紹介した遺物以外に以下のものが出土している。炭化物を除き、全てⅠ層出土のものである。

陶　器　1点（Ⅰ層出土）。

磁　器　11点（総てⅠ層出土）。染付6点（同一個体，皿），色絵3点（同一個体，碗），蓋物2点（同一個体）

鉄製品　3点（総てⅠ層出土）。鑽1点，釘1点，カミソリ(？)1点

獣　骨　10点（総てⅠ層出土）。

炭化物　13点（うち12点はⅣ層，1点はⅠ層出土）。（鈴木・宮）

Tab. 1　剝片石器・剝片・石核の属性

図	地区	器　種	長・幅・厚（mm）	重（g）	石　質	図	地区	器　種	長・幅・厚（mm）	重（g）	石　質
1	E13	剝　　片	60×57×12	27.2	頁　岩	41	E17	石製ナイフ	62×42×13	21.5	頁　岩
2	F20	〃	22×46×5	3.8	〃	42	E16	スクレイパー	88×49×22	87.4	〃
3	A3	〃	29×50×8	6.5	〃	43	F16	〃	63×50×15	24.6	〃
4	E18	〃	72×41×14	27.5	〃	44	E3	〃	65×36×11	24.6	〃
5	D16	〃	55×43×8	10.4	〃	45	C7	〃	90×40×19	56.9	〃
6	D3	〃	35×44×10	12.4	〃	46	D14	〃	57×48×12	38.3	〃
7	D19	〃	43×39×11	13.6	〃	47	C3	〃	59×32×9	14.4	〃
8	E8	〃	62×90×12	31.2	〃	48	D13	〃	42×20×7	3.5	〃
9	C18	〃	61×40×12	23.6	〃	49	E6	〃	70×22×8	11.1	〃
10	F14	〃	57×69×13	43.3	〃	50	G3	〃	36×25×6	4.7	〃
11	D16	〃	50×35×15	17.7	〃	51	E7	〃	76×51×20	74.7	メノウ
12	E18	〃	79×62×9	48.0	〃	52	E17	〃	55×54×15	38.8	頁　岩
13	E18	〃	81×50×17	51.8	〃	53	E15	〃	35×57×10	20.0	〃
14	F19	〃	34×68×17	36.2	〃	54	E13	〃	74×28×17	37.6	〃
15	B2	石　　鏃	22×13×3	0.6	黒耀石	55	D19	〃	37×47×12	15.2	〃
16	E6	〃	23×14×3	0.6	頁　岩	56	E7	〃	69×30×9	27.8	〃
17	F16	〃	26×19×3	0.8	〃	57	G18	〃	55×30×9	18.5	〃
18	E17	〃	(22)×11×3	(0.6)	〃	58	D19	〃	38×47×14	26.8	〃
19	F19	〃	29×12×4	0.8	〃	59	F20	〃	46×51×15	35.9	〃
20	D6	〃	(22)×14×4	(0.8)	〃	60	B6	不定形石器	37×30×7	7.2	〃
21	D4	〃	33×17×7	2.5	〃	61	〃	〃	52×48×15	25.2	〃
22	C2	〃	(19)×14×2	(0.8)	?	62	D6	〃	29×49×9	10.6	〃
23	E4	〃	24×12×4	(1.0)	頁　岩	63	F20	〃	52×51×15	40.8	〃
24	E19	〃	(24)×20×4	(1.6)	〃	64	C6	〃	48×44×14	19.6	〃
25	D17	石　　錐	31×12×6	2.5	〃	65	C3	〃	31×51×14	23.3	〃
26	D19	〃	(20)×19×5	(1.3)	メノウ	66	D17	「断面利用石器」	20×23×8	4.2	〃
27	F15	〃	27×19×8	3.1	〃	67	C2	〃	42×27×15	16.2	〃
28	E17	〃	46×18×7	4.0	頁　岩	68	D6	〃	42×39×8	8.9	〃
29	B6	〃	29×21×7	3.0	〃	69	E18	〃	37×22×6	6.5	〃
30	A5	〃	37×25×16	7.2	〃	70	D17	〃	37×18×15	10.0	〃
31	E19	〃	38×23×9	5.7	〃	71	G7	〃	28×20×11	4.6	〃
32	D19	〃	57×29×9	7.9	〃	72	C19	〃	37×20×12	5.5	〃
33	A5	ポイント	(27)22×5	(3.6)	〃	73	E17	〃	30×32×9	6.9	〃
34	F16	〃	(24)×(23)×6	(2.6)	〃	74	E7	石　　核	42×43×19	16.1	〃
35	C6	〃	119×55×13	73.6	?	75	F14	〃	54×45×23	38.7	〃
36	E13	石　　匙	68×40×10	22.6	頁　岩	76	G18	〃	59×44×27	79.0	〃
37	F16	〃	67×30×9	14.3	〃	77	D19	〃	30×24×14	9.5	黒耀石
38	D16	〃	(30)×(21)×(4)	(2.9)	〃	78	E18 F20	〃	87×45×32	119.6	頁　岩
39	F19	〃	66×52×6	25.3	〃	79	D16	〃	42×36×21	35.3	黒耀石
40	G3	〃	69×41×6	16.4	〃						

Tab. 2　礫石器・礫の属性

図	地区	器種	長・幅・厚（mm）	重（g）	石質	図	地区	器種	長・幅・厚（mm）	重（g）	石質
80	E15	素材礫	155×45×34	410.0	玢岩	95	B1 B2	凹石	126×61×21	259.0	玢岩
81	D4	〃	125×54×40	415.0	〃	96	C7	〃	114×78×46	481.0	〃
82	A4	敲石	145×56×35	305.0	凝灰岩	97	B5	〃	135×45×27	241.0	〃
83	F18	〃	122×50×30	237.0	安山岩	98	B6	〃	86×57×57	296.0	〃
84	D16	〃	82×39×39	182.0	〃	99	E19	〃	81×63×37	220.0	?
85	C17	〃	137×59×33	254.0	?	100	F18	〃	(83)×56×17	(106.9)	玢岩
86	D7	〃	93×48×24	120.0	玢岩	101	B6	擦石	31×25×7	124.8	凝灰岩
87	B6	〃	(146)×(44)×(44)	(289.0)	安山岩	102	E6	礫剝片	98×60×39	4.8	〃
88	F17	〃	(66)×(48)×(35)	(141.0)	〃	103	D4	擦石	98×81×24	124.8	〃
89	F5	〃	174×102×63	1066.0	玢岩	104	E14	〃	108×86×10	173.9	〃
90	F14	〃	144×84×49	525.0	安山岩	105	C2	〃	58×32×34	124.0	〃
91	B6	凹石	97×45×27	164.0	玢岩	106	F20	〃	52×51×18	52.6	軽石
92	E20	〃	97×52×56	422.0	〃	107	C4 D4 F5	〃	122×101×27	8.8	凝灰岩
93	D19	〃	95×56×53	343.0	〃	108	E8	台石	290×222×95	9119.0	安山岩
94	F9	〃	125×65×66	534.0	〃	109	E16	石皿	370×291×151	18,500.0	〃

Ⅶ 総　　括

a．検出遺構の概要

今回の発掘調査によりTピット8，小ピット1の合計9基の遺構が検出された。遺構覆土から遺物が若干出土したピットはあったものの、遺構伴出遺物は皆無であった。

Tピットの掘り込み面は、P2・P3でも確認されたようにV層とみられることや覆土中から出土した遺物等から、縄文時代後期前葉ないしは、それ以前に構築されたものと考えられる。

本遺跡検出のTピットは、他の遺跡のものに比して比較的浅く、ピット底部が平らではないことが特徴といえよう。数基のTピットの底部に直交するようにトレンチを入れ再度確認したが、やはり底部は平らでないものが多かった。比較的規模が小さい事とともに、特徴的な事実として記しておきたい。（宮）

b．出土遺物の概要

今回の発掘調査によって、約23,600点の遺物が出土した。詳細については、前述したとおりであり、本遺跡を規定する特徴的な遺物についてのみ、若干述べることとする。

土器は、縄文時代後期初頭のものから、同晩期中葉のものまで出土している。このうち多数を占めるのが、後期中葉（Ⅰ群C類）のものと、晩期前葉（Ⅱ群a類）のものであり、両者で全体の約70％を占める。

スタンプ状土製品が1点のみ出土している。当該資料は、従来から精神的側面の強い遺物として考えられており、本遺跡の性格とのかかわりから重要である（後述）。

異形石器（Fig.50－D12Grid）が1点出土している。不明な点が多い遺物であるが、類例は少なくない。これなども、スタンプ状土製品等と同様、精神的側面の強い遺物である可能性もある。

礫石器が比較的多く出土している。鈴木報文で詳述されているように、特徴的なものとして凹石がある。多くは、クルミ等の堅い木の実を割るために使用したと考えたい。

また、いわゆる北海道式石冠が1点のみ出土している。Ⅰ層出土とはいえ重要である（Fig. 51のC17Grid）。石皿も出土しておりセットとしてとらえることが可能である。本遺跡から出土した土器に伴出したとすれば、縄文時代後期のものである可能性が高い。円筒土器に伴うのが一般的であり、きわめて重要な出土例となろう。

(1) 土器について

本遺跡の土器のうちV層出土のものは縄文時代後期のものであり、Ⅳ層からは同後期・晩期のものが出土した。出土土器の総数は、21,703点であり、うちⅣ層からは、11,817点，V層からは944点出土した。したがって、プライマリーな遺物の層位別の割合は、Ⅳ層が93％，V層が7％である。

主要土器の分布は、Fig.49のとおりである。前述したように南西部に晩期の土器が北東部には後期の土器が分布する。石器等も大同小異である。

口縁部並びに底部の双方から推測した両時期の土器の個体数は、後期が約55個体で晩期が約105個体と概ね1：2の比率である。

出土土器の多数を占めるものは、いわゆる「鮏澗式」・「上ノ国式」と、その前後の土器であると考えられる。

前者は、短刻文が多様され、平行沈線文と磨消文が特徴的である。後者は、爪形文・刺突文・短刻文・押引文・沈線文等を主体とするものと考えられるが、不明な点も少なくない。

この両者が本遺跡の主体的な土器である。（宮）

(2) スタンプ状土製品について

はじめに

縄文時代において、一種の精神文化を象徴するものと考えられている遺物に、スタンプ形（型）土製品あるいは、スタンプ状土製品とよばれているものがある。

この土製品の意義については、不明確であると言わざるをえない研究の現状である。かっては、耳飾としての用途も考えられていた（樋口清之1939）が、耳飾と確定しうるような出土事例は、未だ以って皆無のようである。

分　布

当該資料の分布は、東日本一円に及ぶものとみ

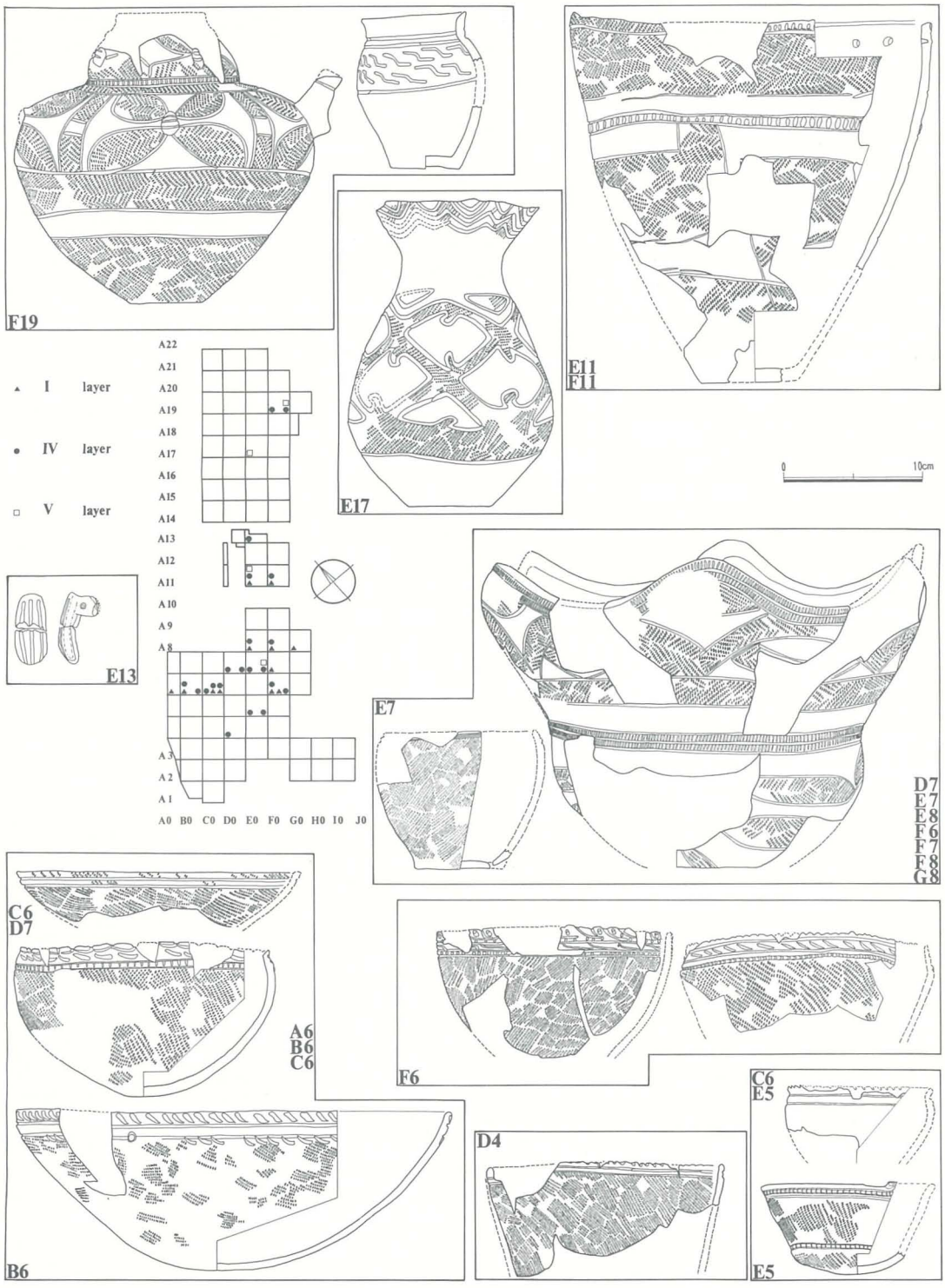


Fig.49　新村4遺跡Grid別主要土器とスタンプ状土製品の分布

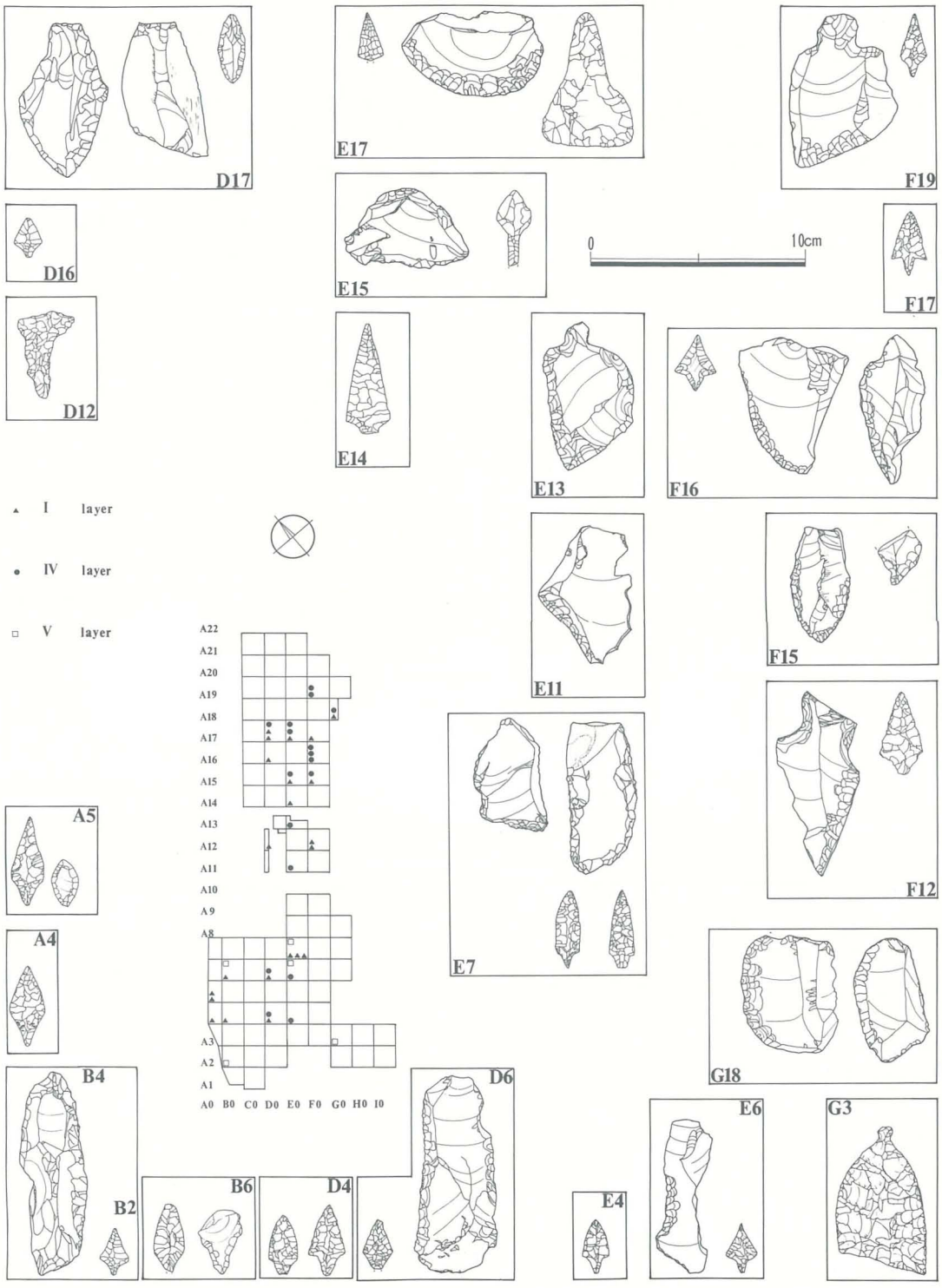


Fig.50　新村4遺跡Grid別主要剝片石器の分布

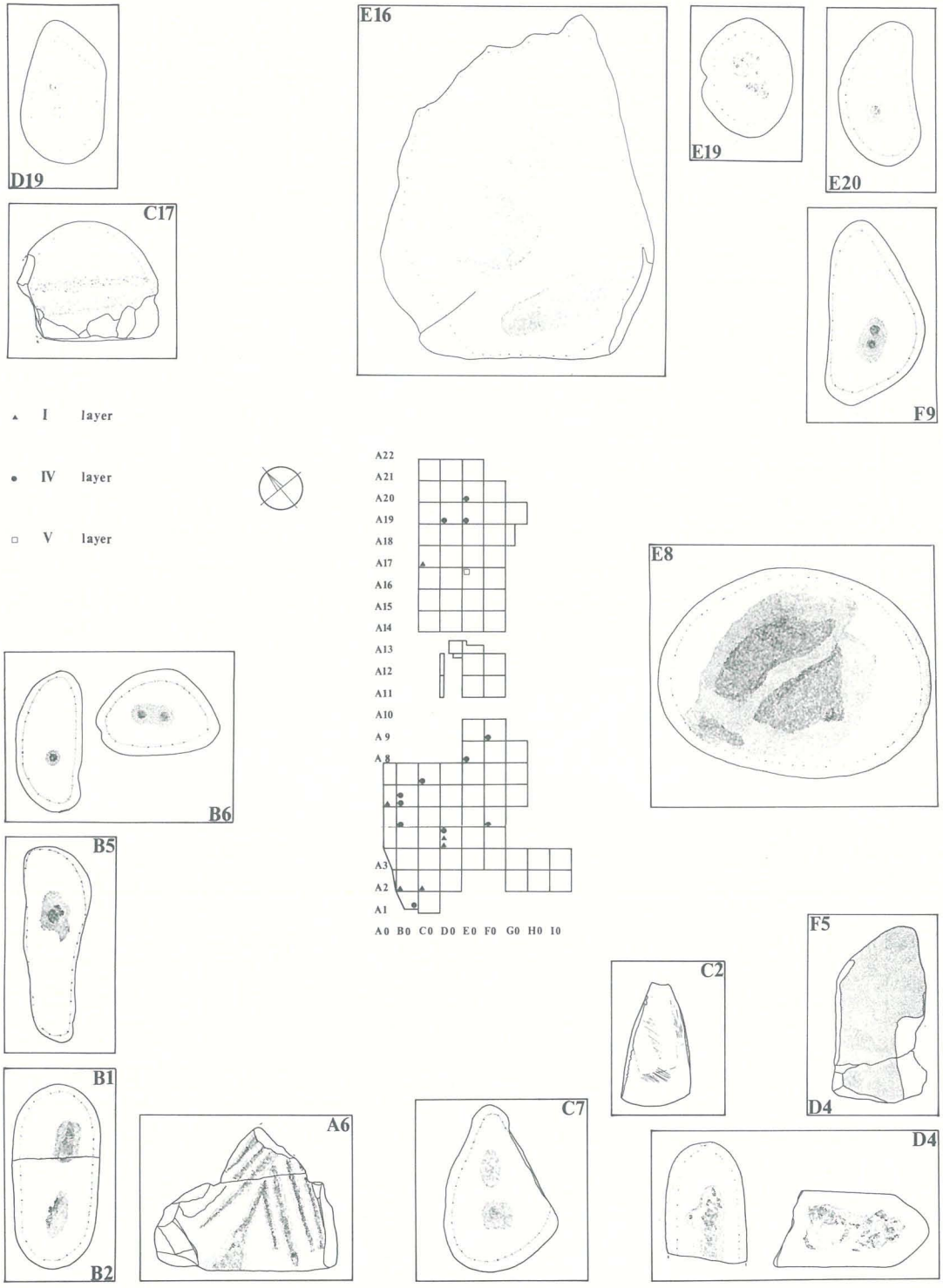


Fig.51　新村4遺跡Grid別主要礫石器の分布（縮尺不同）

られる。特に北海道中央部や東北地方の太平洋側にその出土例が多い。千歳市末広遺跡や宮城県の宝ヶ峯遺跡では、数十点の当該資料がえられている。

出土遺跡は、おそらく30ヶ所を超えるものとみられ、点数にして200点程度は出土しているものと考えられる。

北海道における当該資料

北海道では、現在までに10遺跡から出土例が確認されている。合計52点のうち、前述した末広遺跡からは37点出土している。北海道でも最多の当該資料を出土した遺跡である。

分布は、道央部に集中しており、10遺跡中８遺跡が所在する。

形状と分類

当該資料の版部（印刻面）の形によって文様や文様構成が規定される傾向がある。したがって形状と文様は、密接に関連する。

版部の形には、円形・楕円形・長円形・十字形・菱形・不定形などがあり、形態変遷を辿ることができる。

所産時期

古くは、縄文時代中期末葉にみられ、同後期後葉まで継起する。主体は、後期中葉であり、出土遺跡の所産時期の大半がこれにあたる。

古手のものは、大型・無文で、版部は円形であるものが多い（中期末葉～後期前葉）。次いで、版部は円形であるが、刺突文・渦巻状沈線文・同心円状沈線文が主体となり（後期前葉～中葉）、その後、最もバリエーションに富んだ段階をむかえる。この段階が前述したように後期中葉である。

後出のものになってくると、それまで、一様に中央部にあった茎部（柄部）が端部側に偏ってくるとともに短かくなり、最後には、ほとんど認められなくなってしまう。文様も、単純化し、沈線文が主体となる。

機能・用途

当該資料は、墓壙や住居址等の遺構に伴って発見されることは、きわめて稀である。これは、むしろ前記の遺構等に伴わないことに意味があるように思われてならない。

有孔の当該資料は、90%を超える。したがって有孔のものが一般的であるといえよう。首から下げたものか、あるいは佩用したものか定かではないが、紐を通して使用したことは、まちがいない。また、有孔でなくとも茎部があれば、なんら不都合はない。実用品であれば土製である以上、ほとんどの資料が磨滅しているものが多数みられてよいはずであるが、そういったものは比較的少ない。実用品ではなかったことを示していよう。

護符あるいは、一種の祭具と考えたい。版部の文様や茎部の形状は、性器をモティーフにしているものが多い。多産や安産または、狩猟の安全やその成果への祈念等は、縄文時代の人々にとって、生活そのものであっただろう。

まとめ

スタンプ状土製品は、東日本一円に分布し、特に北海道中央部・岩手県・宮城県等から多数の出土例が報告されている。時期は、縄文時代中期末葉～同後期後葉までみられ、土版へ移行する。

スタンプ状土製品が耳飾や垂飾等の身体装身具ではない理由に墓壙から出土例がみられないこと等があげられよう。護符と考えれば、人が死に至った時点で取りはずされ、死者にとっては、不要の物（米田　1983）となる。あるいは、祭具と考えれば、末広遺跡（大谷・田村　1982）から検出された焼土遺構に伴出した当該資料の説明にもなると考えられる。

スタンプ状土製品や土版等は、縄文時代における人々の精神文化の一面を理解する上で、きわめて興味深い遺物であるといえよう。

本遺跡の性格を類推する上で、非常に重要な決め手となるのが、このスタンプ状土製品であると考えられる。（宮）

(3) 石器について

包含層出土の石器と剥片・chipの総数は、665点で、土器との伴出状況などからみて、そのうち、Ⅱ・Ⅲ, Ⅳ層のものは、後・晩期, Ⅴ層のものは、後期と考えてよさそうであるが、前者については、後期・晩期いずれか、一部を除き確実な帰属時期は不明である。

石器の分布をみると、尾根の台地に沿って分布しており、各時期ともに数ヵ所のブロックにより形成されているものと考えられ、接合資料により、北東、および南西の集積ブロック内で石器の製作が行なわれたことを確認した。しかしながら、石器の細かな分析、帰属時期等今後の課題であり、

土器の詳細な分析とともに、本遺跡の存在解明に繋がっていくものとおもわれる。

石器全般については、その数量、内容において時期的にみても器種の数など、やや貧相ではあるが、特徴的な石器も出土しており、石器の中での礫石器の占める割合など、他の遺跡と同様、時期的な様相をうかがい知ることが出来る。

石製ナイフ類品と「断面利用石器」について

ⅰ） 石製ナイフ類品　　1点のみであるが、従来続縄文期に伴う靴形石器、あるいは石製ナイフと呼称されている石器が出土している。調査では続縄文期の土器は出土しておらず、出土層位はⅣ層で晩期の土器と共伴する可能性が強い。道南の他の遺跡では、木古内町札苅遺跡，七飯町聖山遺跡，上磯町添山遺跡より、この種の類品が出土している。以後、石製ナイフ類品が晩期の土器と伴出する例が増える可能性は高い。

なお、上ノ国町内では、金堀沢遺跡（大場他 1955）が晩期の遺跡のひとつであり、その類例がみられるようである。

ⅱ） 「断面利用石器」について　　本遺跡においても、従来剝片、剝片石器の破損、欠損品とされる石器が出土しており、「断面利用石器」（『添山遺跡』 1983）、「折断調整石器」（『峠下聖山遺跡』 1979）に相当するものである。

ここでは、「断面利用石器」とし、折断面、あるいは、欠損面に二次加工、使用痕を有するもので形態は、四角形、および多角形であり、刃部は鈍角を呈するものである。Fig.37に、接合資料を示した。

前述の石器は、縄文時代全般に亘ってみられるものであり、今後、この種の石器について洗い直す必要がある。　（鈴木）

c．遺跡の性格等について

今回の調査によって、合計9基のピットが検出された。うち8基は、いわゆるTピット（陥穴）であった。

したがって、遺跡の性格もTピットを主体とするハンティング・サイトとすることも可能である。ところが出土遺物のほとんどは、これらのTピットよりも後出のものであること（前述）が確かめられている。多数の遺物が、どのような目的で使用され、残されるに至ったのか、残念ながら明確ではないが、いくつかの可能性をさぐってみたい。

多数出土した土器は、そのつくりや器形等から大半が日常生活に使用したとみられる。しかし、縄文時代後期のものでは、壺形土器，注口土器，異形土器、同晩期のものでは、台付土器や精製の浅鉢形土器等、特殊な器形や特殊なつくり（朱塗の土器をはじめとする精製土器）の土器が少なからずみられる。

これらの土器の器種が遺跡の精神的側面を示している可能性があり、スタンプ状土製品や異形石器などの出土も、それを裏づけているものとみられる。すなわち、祭祀遺跡としての側面も有していたと考えたい。

他に、遺跡の性格を示しているものとして剝片石器の製作（鈴木報文）や、凹石・石皿・石冠等の出土が示すような野外作業における生産活動があげられる。これらは、時間の経過とともに個々に行なわれたものとは考えにくく、むしろ、すべて一連のものとしてとらえることができる。

すなわち、経済的強制としての狩猟・採集活動には、直接的行為と、それに伴う二次的な行為が含まれている。

狩猟の安全や、その成果への祈念等が、前述したような本遺跡の精神的側面（祭祀的側面）を示していると考えられ、石器の製作や、その他の二次的生産活動にかかわるものは、狩猟・採集の前後になされた行為であり、その結果、残されたものであるとみられる。

想像の域を脱しえないが、物的証拠と状況証拠から、このようなことが類推された。ひとつの可能性として記したものである。

いずれにしても、長期間に亘って、この地を縄文時代の人々が利用したのは事実である。

往時の人々の生活の様子を彷彿し、擱筆するものである。　（宮）

参　考　文　献

市川金丸　1974　『中の平遺跡発掘調査報告』　青森県教育委員会

石本省三・鈴木正語　1983　『添山』　上磯町教育委員会

宇田川　洋　1977　『北海道の考古学』1・2　北海道出版企画センター

内山真澄　1980　『寿都町文化財調査報告書』II　寿都町教育委員会

大谷敏三・田村俊之　1982　『末広遺跡における考古学的調査』　千歳市教育委員会

大場利夫他　1955　『桧山南部の遺跡』　上ノ国町教育委員会・江差町教育委員会

大沼忠春他　1985　『建川1遺跡・新道4遺跡』　北海道埋蔵文化財センター

鬼柳　彰・谷島由貴　1986　『豊田西遺跡』　北海道埋蔵文化財センター

清野謙次　1924　「男女生殖器を示し且同時に交接を意味せる日本石器時代土製品」『考古学雑誌』第15巻第3号　日本考古学会

桐谷賢一編　1974　『松前町高野遺跡発掘報告』　松前町教育委員会

草間俊一・金子浩昌編　1971　『貝鳥貝塚』

久保　泰・井上真理子・石本省三・鈴木正語・松谷　太・工藤ゆかり　1983　『白坂』　松前町教育委員会

熊谷仁志・花岡正光　1986　『木古内町札苅遺跡』　北海道埋蔵文化財センター

河野本道他　1973　「石狩の先史時代」　『石狩町史』

斉藤　傑他　1974　『松前町大津遺跡発掘調査報告書』　松前町教育委員会

佐藤忠雄　1979　『奥尻島青苗遺跡－図版編－』　奥尻町教育委員会

高橋正勝　1974　「知内町涌元遺跡出土の土器と北海道南西部の縄文時代後期前半について」　『北海道の文化』31号　北海道文化財保護協会

高橋正勝編　1982　『萩ヶ岡遺跡』　江別市教育委員会

千代　肇　1972　『涌元遺跡』　知内町教育委員会

東北大学日本文化研究所　1962・63　『沼津貝塚石器時代遺物』

名取武光・松下　亘　1969　「縄文後期文化－北海道－」　『新版考古学講座』3

野村　崇他　1974　『札苅遺跡』　木古内町教育委員会

野村崇・森田知忠・平川善祥・中田幹雄・山田悟郎・赤松守雄　1976　『札苅』　北海道開拓記念館

野村　崇　1981　「晩期の土器　北海道南部・中部の土器」　『縄文文化の研究』4　雄山閣

野村　崇　1985　『北海道縄文時代終末期の研究』　みやま書房

畠山三郎太　1959　「北海道忍路出土の特異な土製品について」　『ウタリ』第2巻4号

樋口清之　1939　「日本先史時代人の身体装飾」（上）　『人類学・先史学講座』13

桧山農業改良推進委員会他　1968　『上ノ国町土壌調査報告書』　上ノ国町役場

藤沼邦彦　1967　『石巻市沼津貝塚調査概報』

北海道教育委員会　1979　「美々4遺跡」　『美沢川流域の遺跡群』III

北海道函館中部高等学校考古学研究部　1975『江差町・上ノ国町遺跡分布調査報告書』

北海道埋蔵文化財センター　1982　「吉井の沢1遺跡」　『吉井の沢の遺跡』

峰山　巌・大島直行・百々幸雄・石田　肇・鈴木隆雄・三橋公平・山口　敏　1986　『入江貝塚』　虻田町教育委員会

宮　宏明　1986　「鮀淵遺跡出土のスタンプ状土製品について」　『北海道史研究』38号

毛利総七郎・遠藤源七　1932　『陸前沼津貝塚骨器図録』

米田耕之助　1983　「土版」　『縄文文化の研究』9　雄山閣

わたしたちの町上ノ国編集委員会　1986　『わたしたちの町上ノ国』　上ノ国町教育委員会

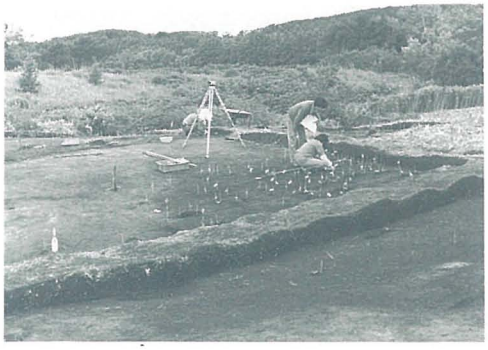
写　真　図　版

発掘当初の状況(1986年7月撮影)

新村4遺跡遠景(右がA地点，左がB地点)

遺跡の層序(A3Grid)

発掘調査状況(手前がA地点)



遺物実測状況(D4Grid)

遺物出土状況(A地点，E4・D4Grid,

新村4遺跡と調査状況

F6GridⅣ層(縄文時代晩期) Fig.29－167

Ⅳ層(縄文時代後期)

D3GridⅣ層(縄文時代晩期)

E5GridⅣ層(縄文時代晩期) Fig.26－114

B6GridⅣ層(縄文時代晩期) Fig.27－141

E17GridⅤ層(縄文時代後期) Fig.18－2

遺物出土状況

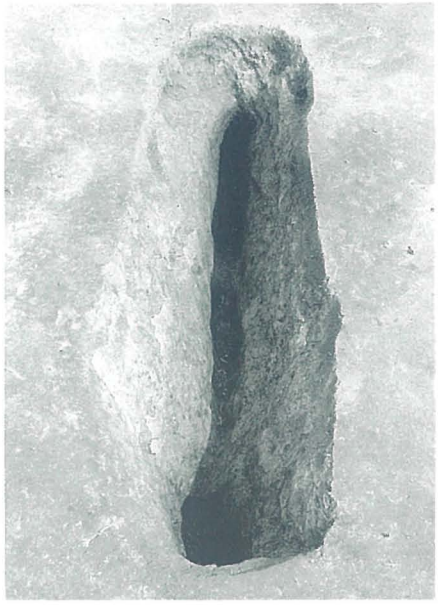
P1(I2Grid, 西より撮影)

P2(H2Grid, 東より撮影)

P2(H2Grid, 西より撮影)

P4(A4Grid, 南より撮影)

Tピット検出状況



P5(D15・D16Grid, 北東より撮影)

P7(C19Grid, 南西より撮影)

P8(C21・D21Grid , 南より撮影)

P9(E15Grid, 南より撮影)

Tピット検出状況

縄文時代後期の土器

20

21

22

23

24

25

26

27

28

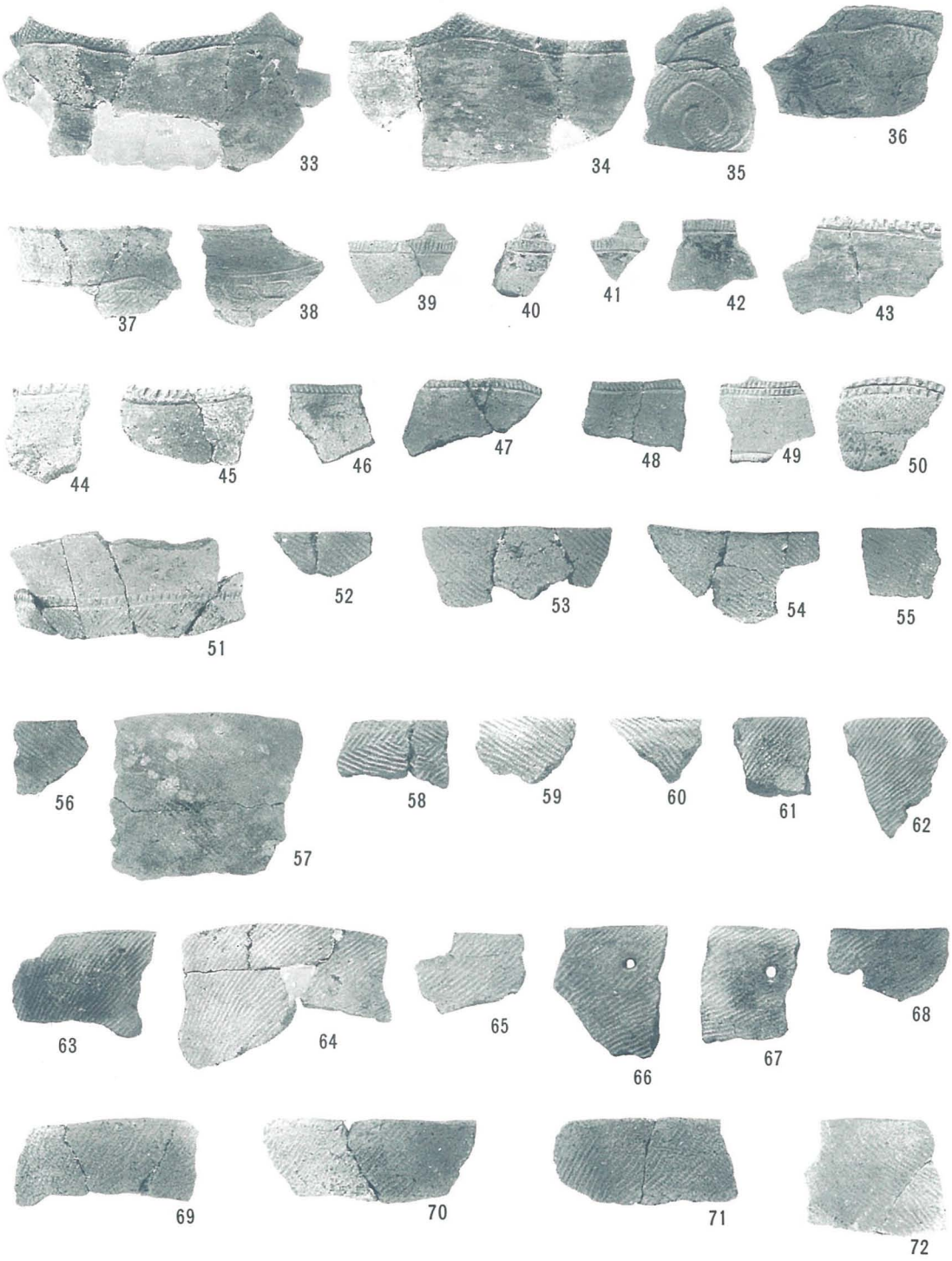
29

30

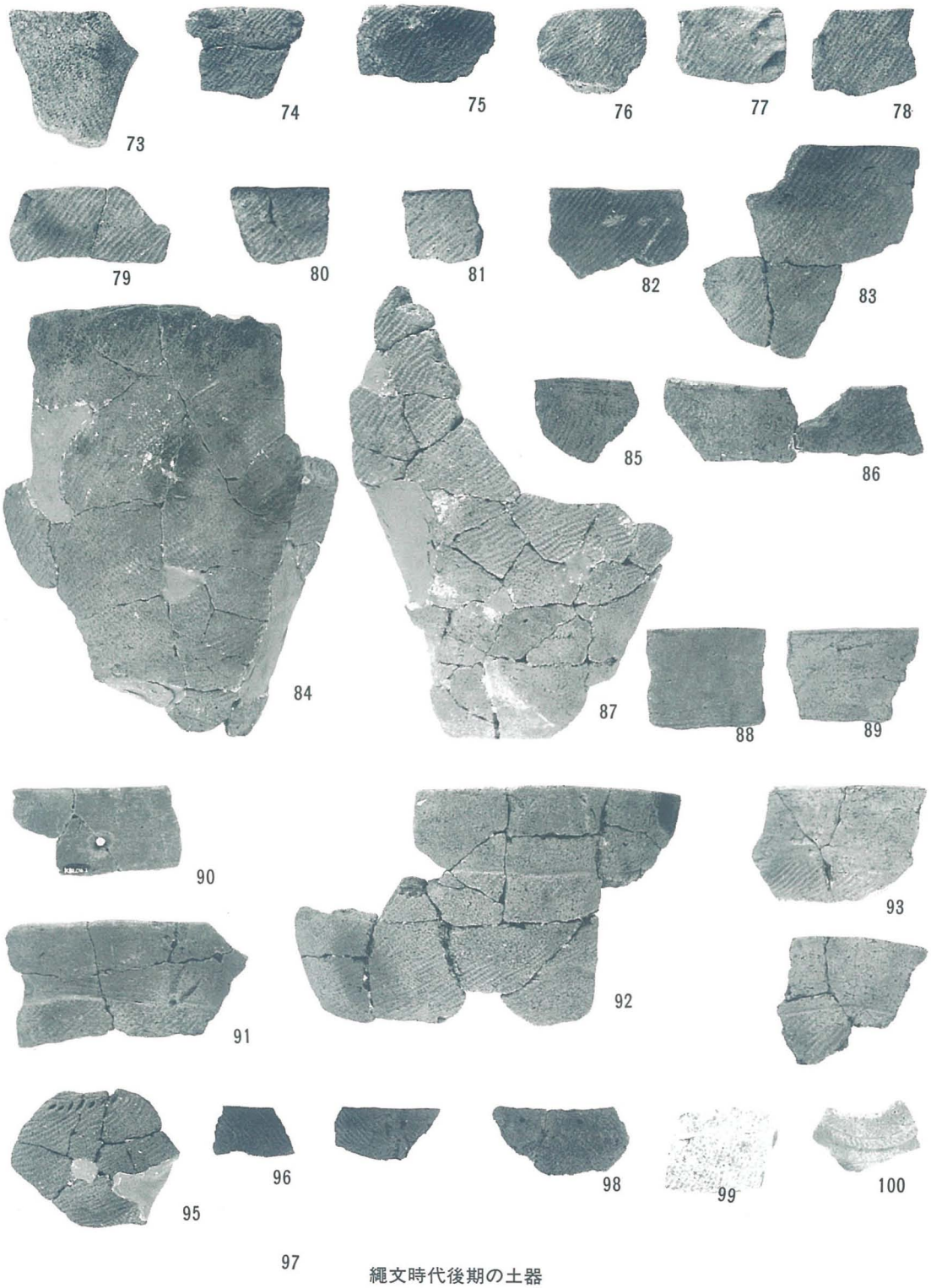
31

32

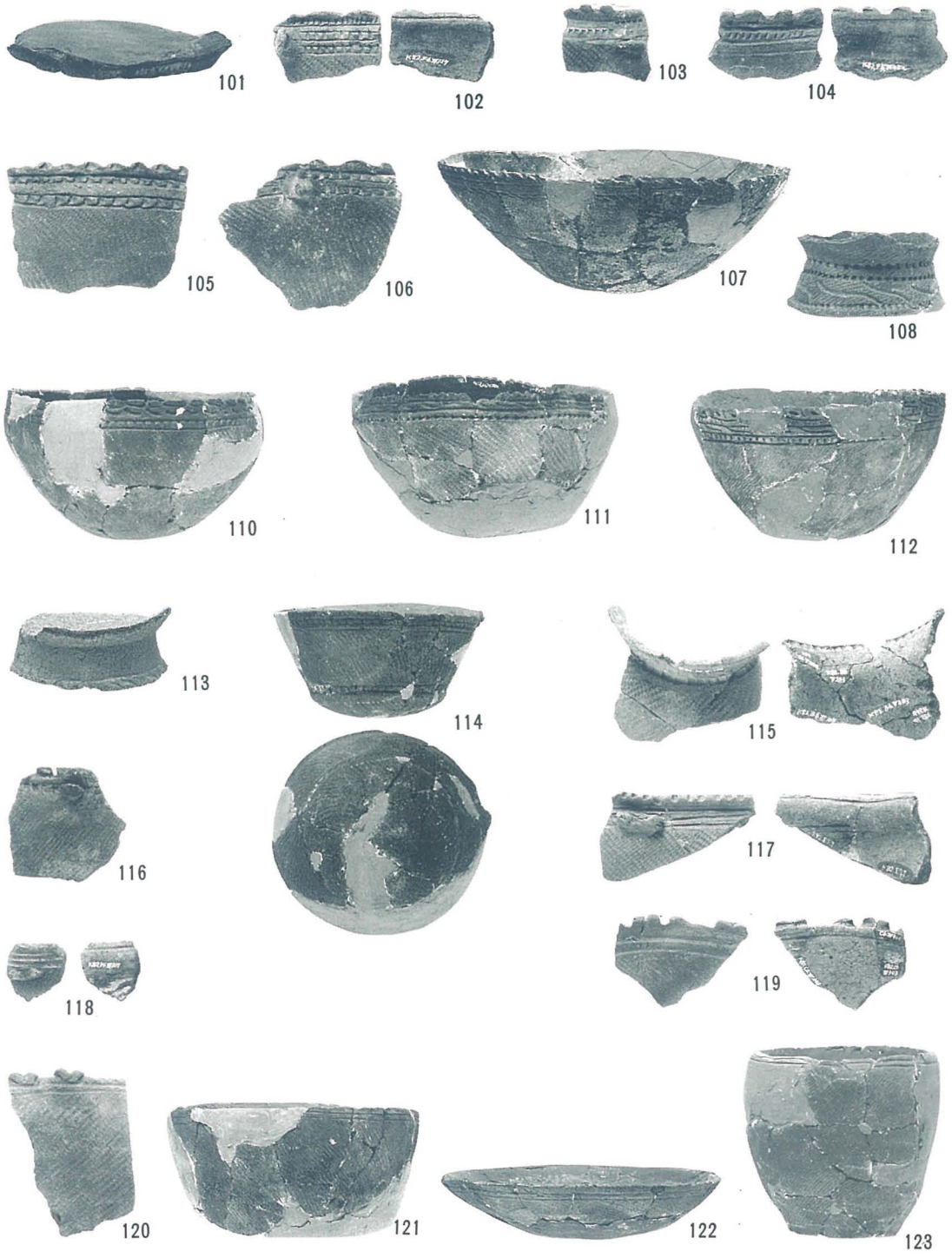
縄文時代後期の土器


33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72

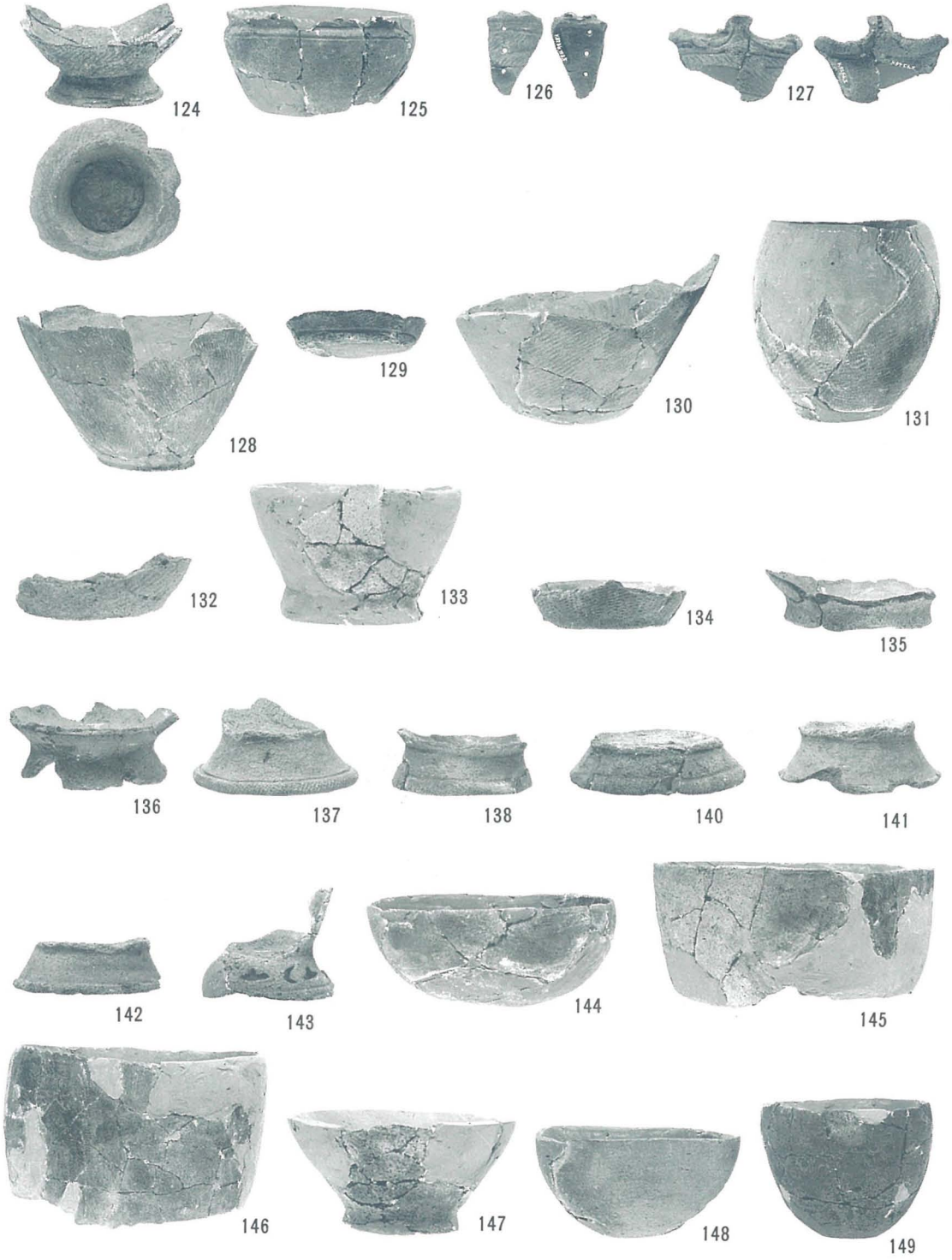
縄文時代後期の土器


73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
95
96
97
98
99
100

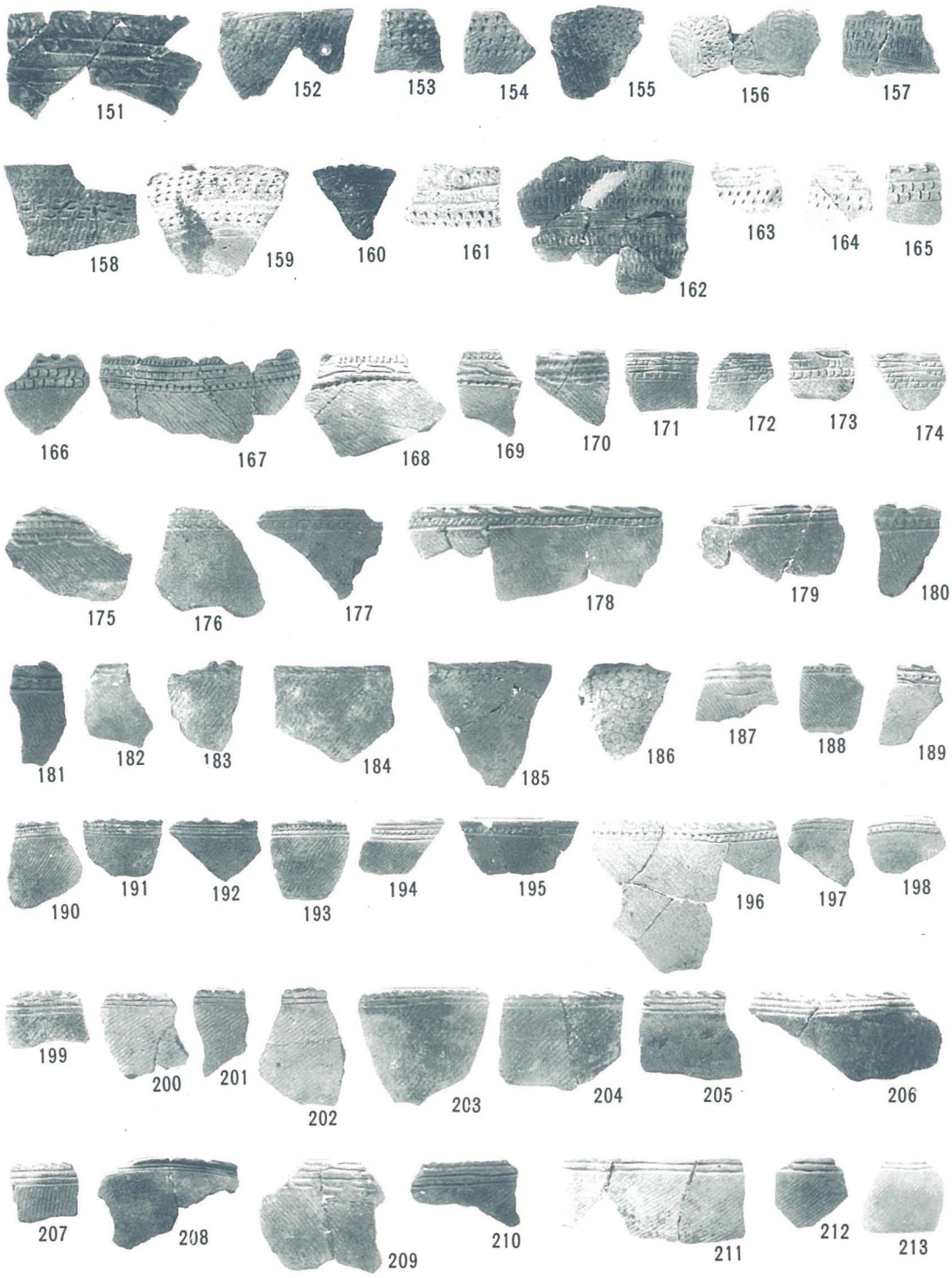
縄文時代後期の土器


101
102
103
104
105
106
107
108
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123

縄文時代晩期の土器


124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149

縄文時代晩期の土器


151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213

縄文時代晩期の土器

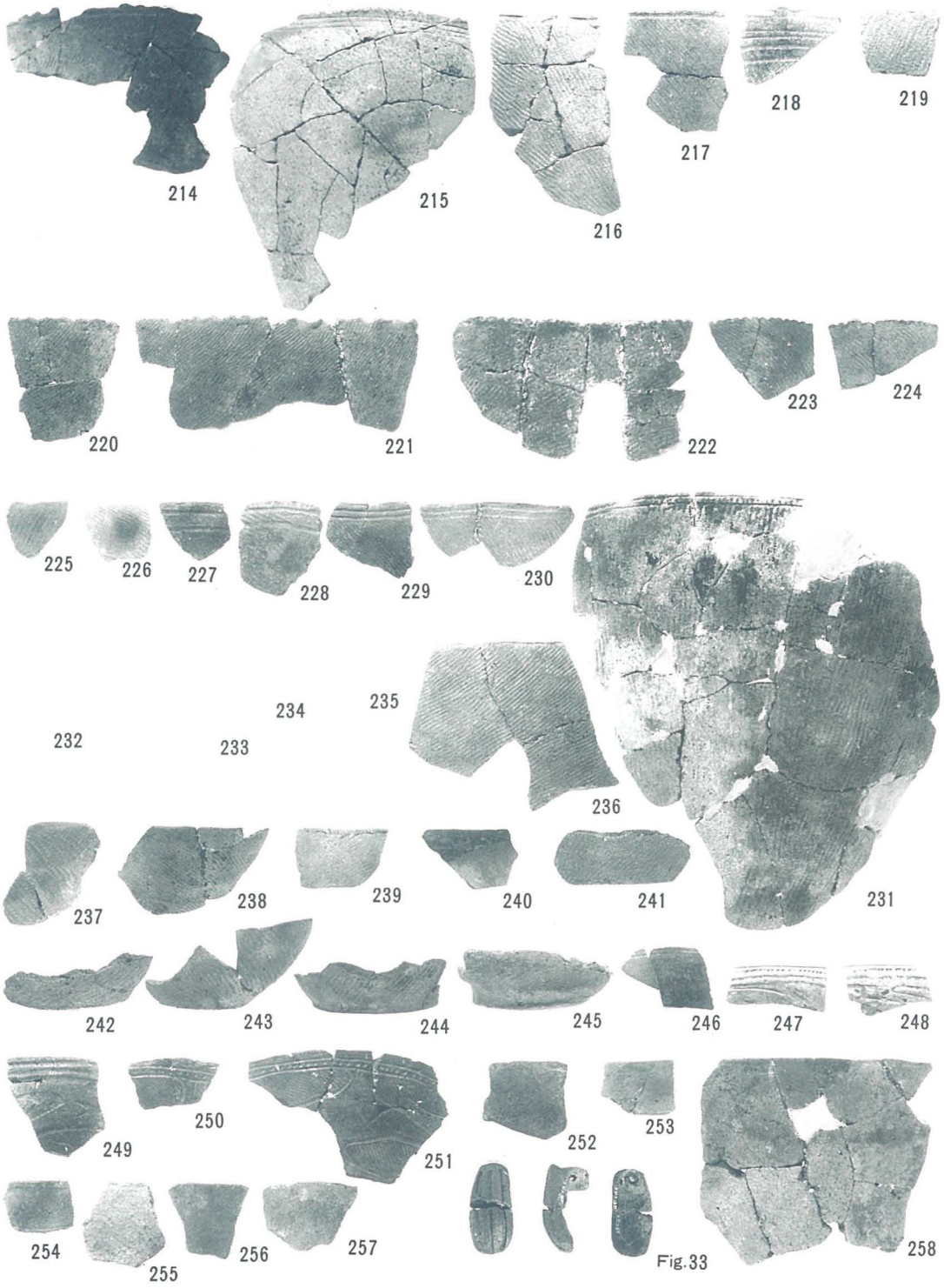
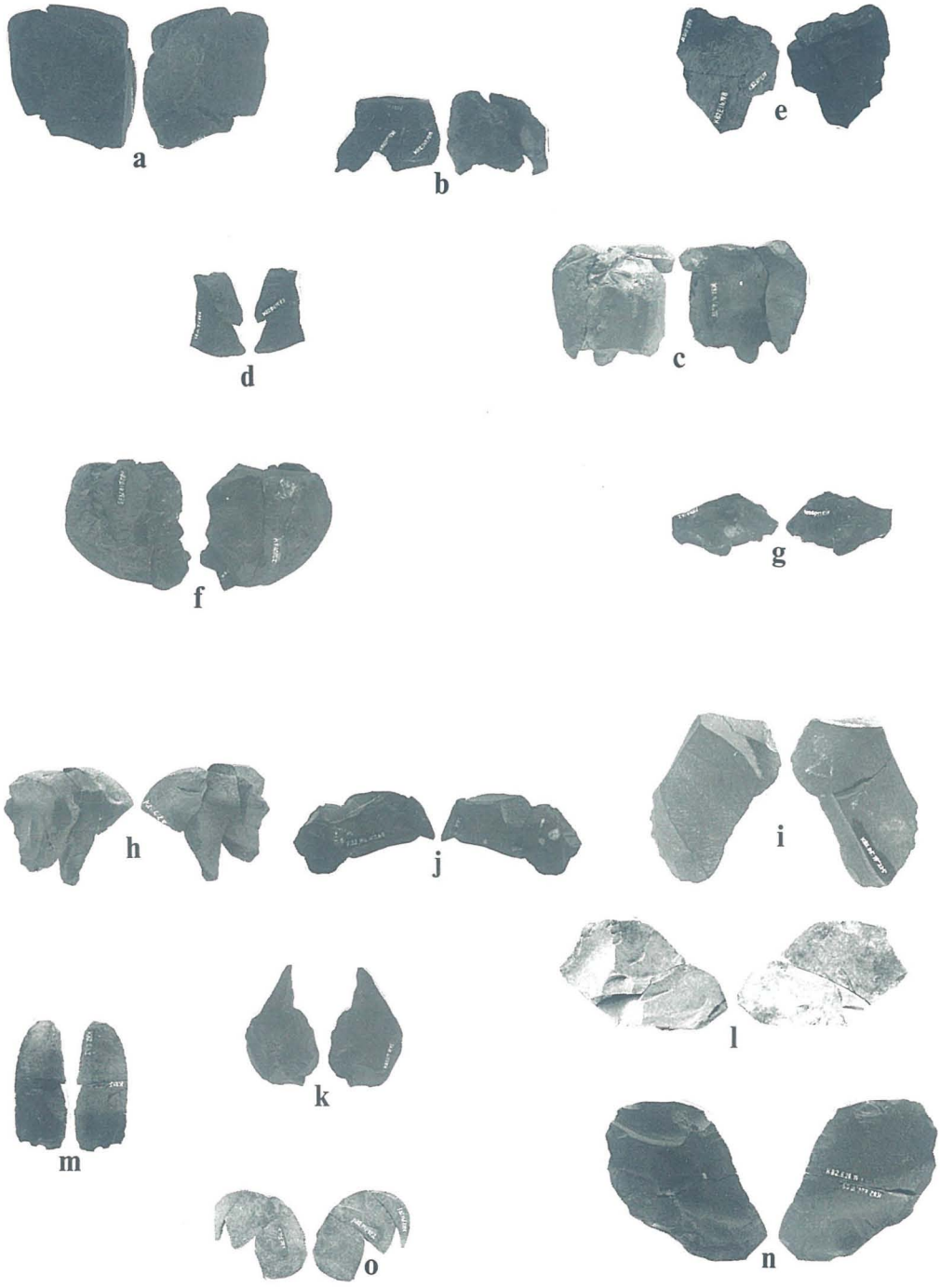
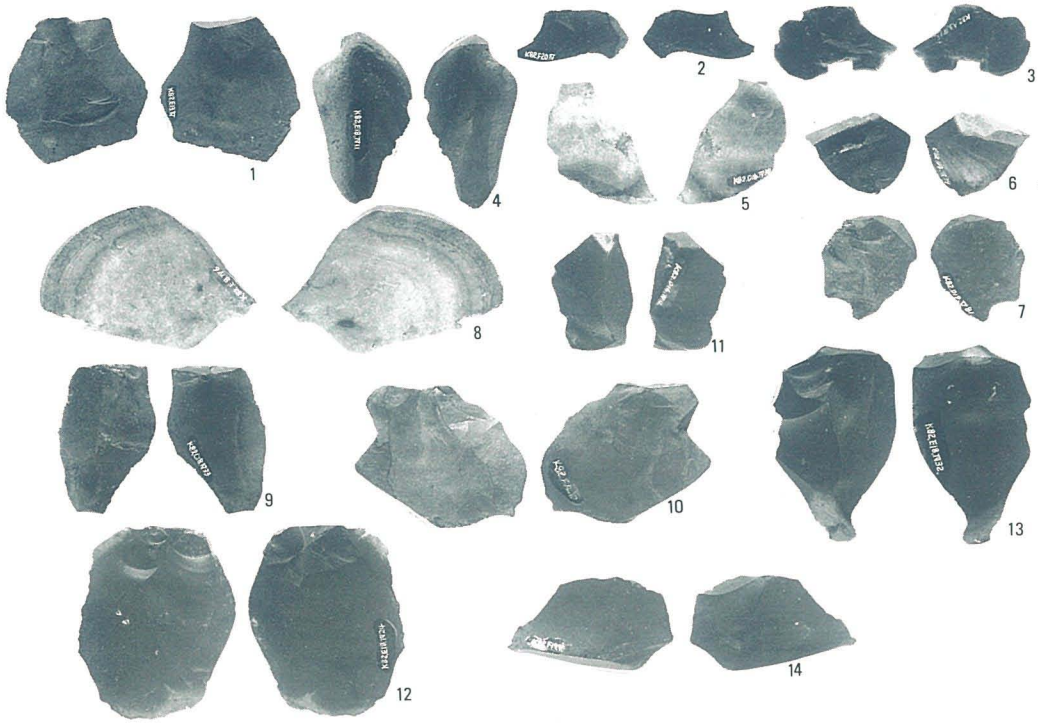


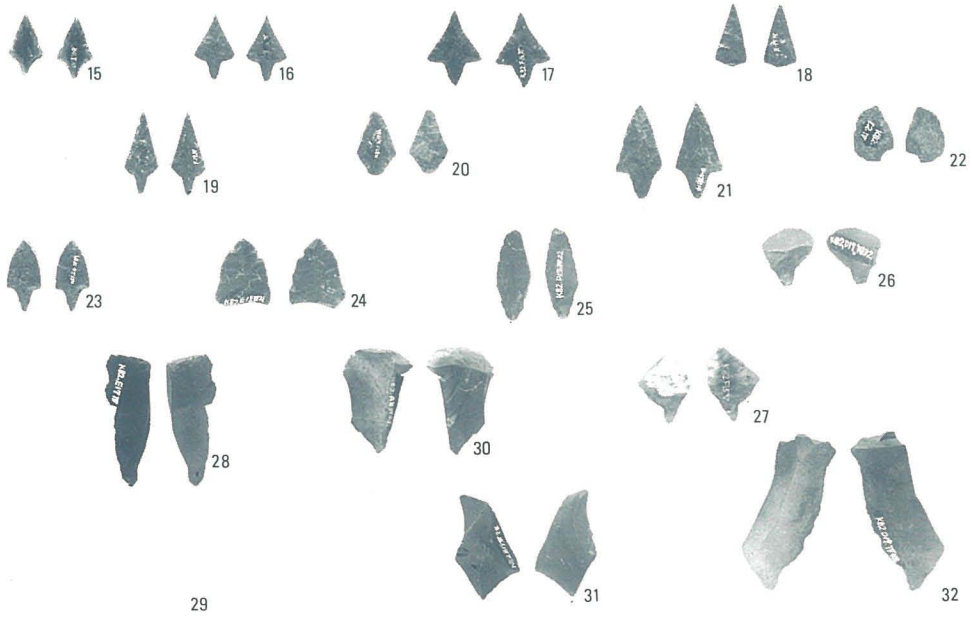
Fig.33

縄文時代晩期の土器とスタンプ状土製品

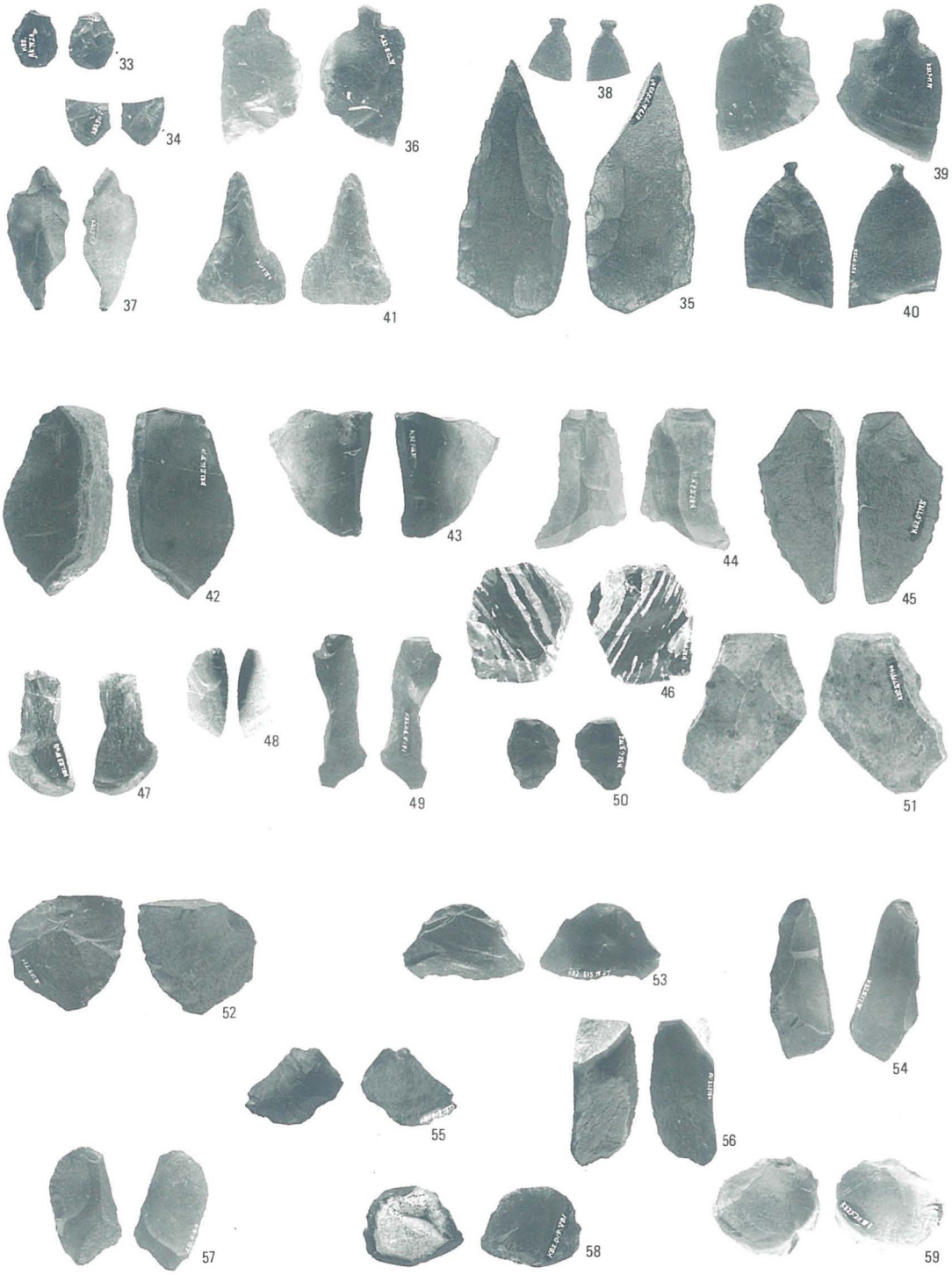


接合資料（Fig.37・38）



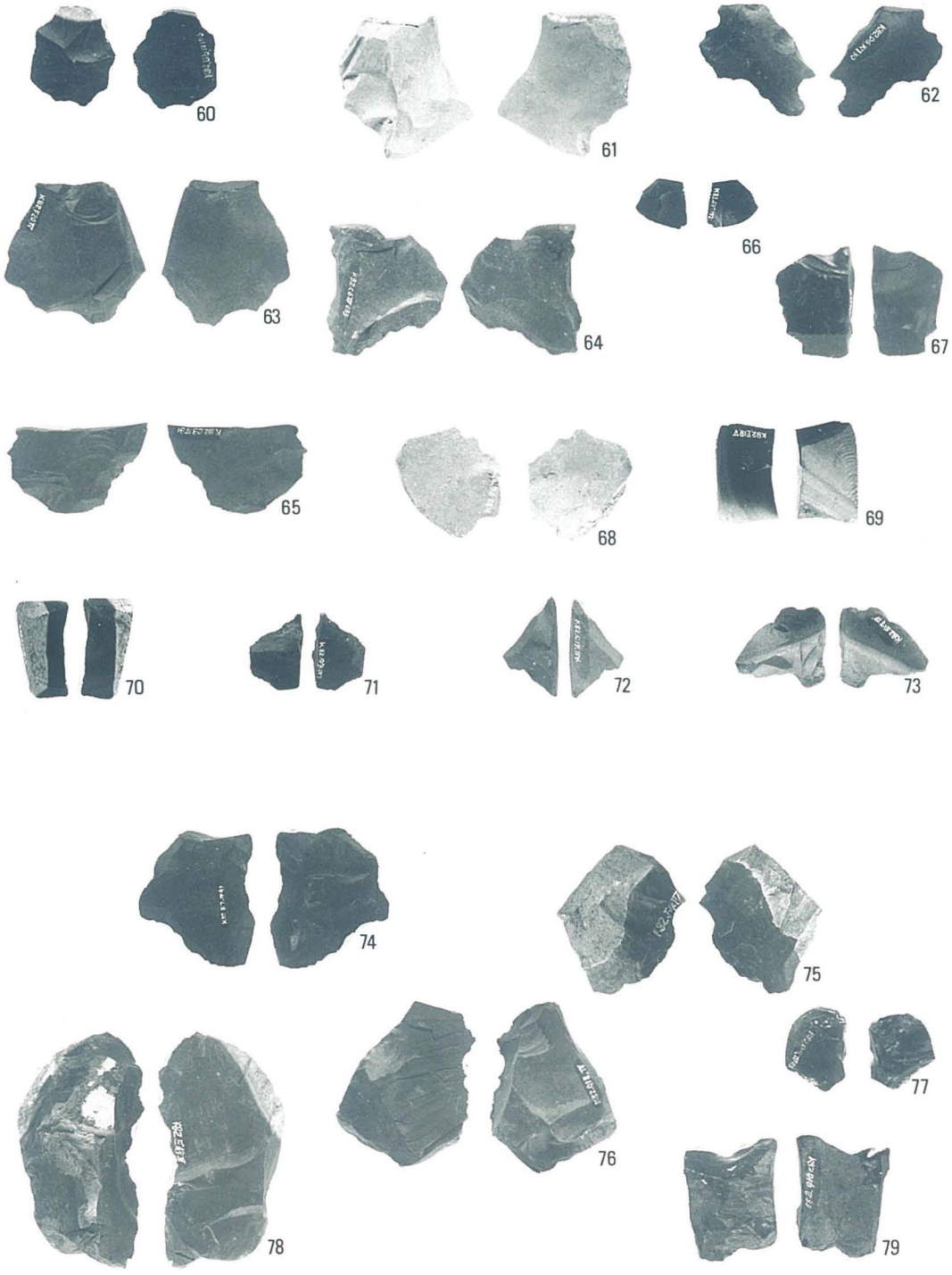


剝片（Fig.39），剝片石器（Fig.40）

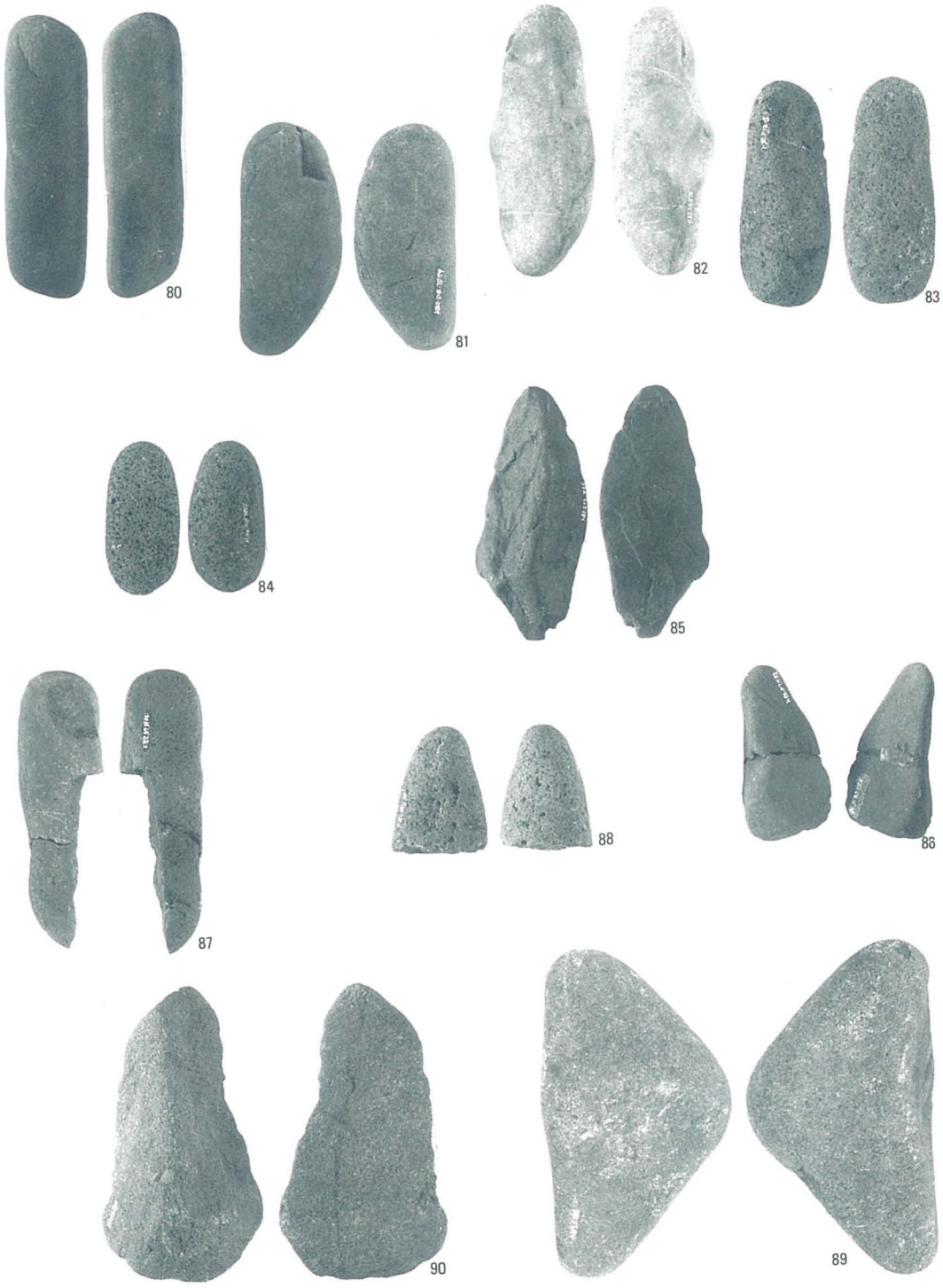


剝片石器（Fig.41～43）

PL. XVII

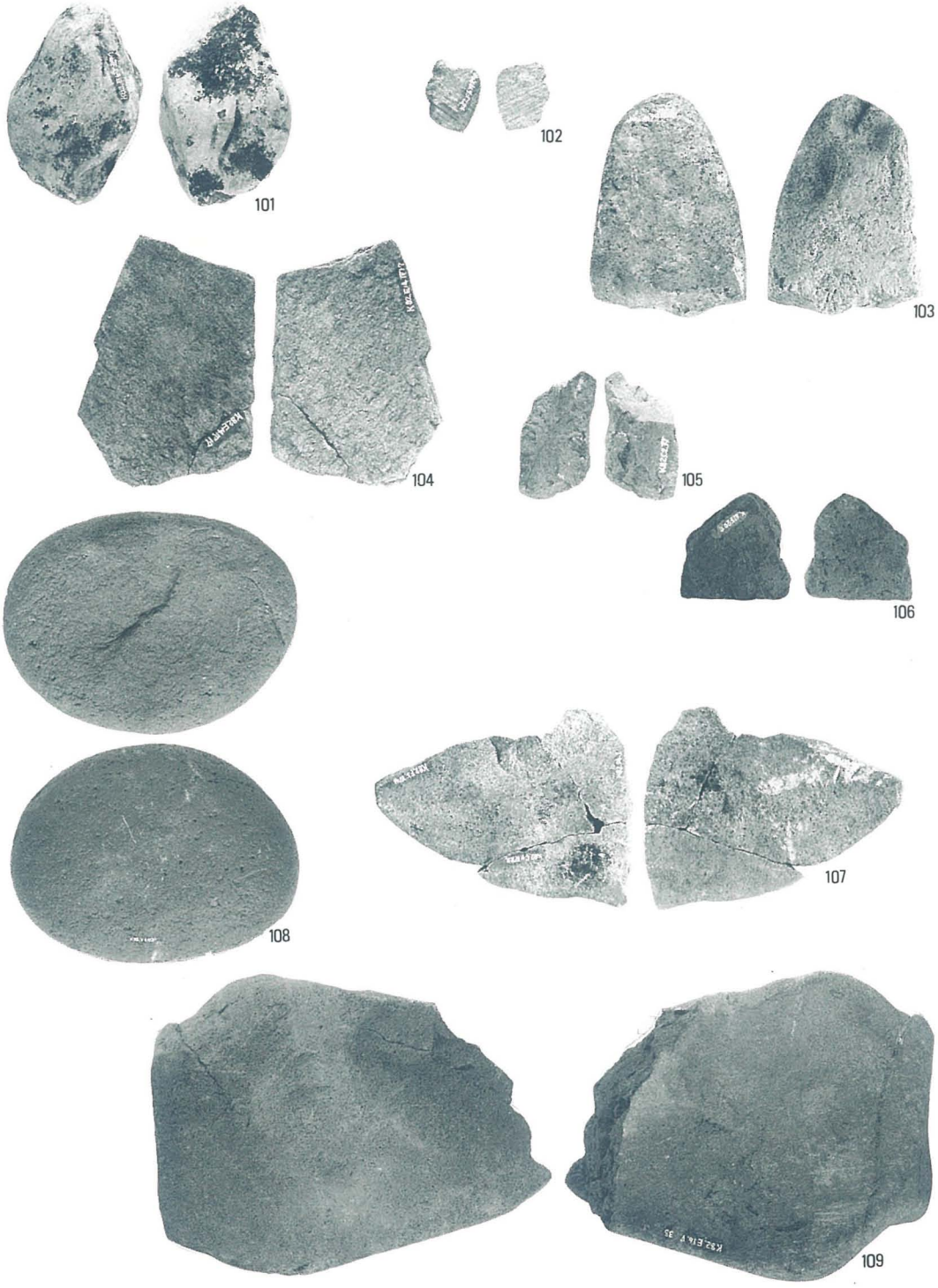


剝片石器（Fig.44），石核（Fig.45）



礫石器（Fig.46）

礫石器（Fig.47）



礫石器（Fig.48）

新　村　4　遺　跡

— 上ノ国町豊留地区道営農地開発
事業用地内遺跡発掘調査報告書 —

印刷　昭和62年 3 月20日

発行　昭和62年 3 月25日

上ノ国町教育委員会

北海道檜山郡上ノ国町大留100

印刷所　㈱長門出版社　印刷部